Dear Friend

橘 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear Friend

【コード】

N0069R

【作者名】

橘 零

【あらすじ】

3年前に起きたある事件。

孤独で哀しき少女が起こした事件は、様々な人たちの心を揺さぶる。その心が交錯する時、少女がみたものは…

プロローグ

4月3日。

街を吹き抜ける春の風が、希望に満ちた新しいスタートを後押しする。

新学年への期待。

社会人1年生たちの、大人への不安。

全てが新鮮で、鮮やかに映る。だが、私の心が、その爽やかな風を受けるとはなかった。

私の心を吹き抜けたのは、生ぬるい絶望の突風であった。親友の死。

その報せは、私のことを、どこまでも深い穴に落としました。

私は、その報せを聞いた瞬間、視界が真っ白になり立っていられなかった。涙声で私に話し掛けている母の顔も、父の悲痛そうな表情も、何もかもが真っ白になってしまった。

神谷エリ。私のたった一人の親友。

彼女が死んだ。

訃報から二日経った今日も、私は仕事を休み、ベッドから天井を見つめていた。

トントン。

天井の、何の模様もない真っ白な壁を見つめていると、扉をノックする音が響き、母の遠慮がちな声が聞こえてきた。

「美優ちゃん。お昼ごはんどうするの？」

「いない」

「いないって…ここに置いておくから、しっかり食べてね」

普段は大好きな母の声が、今日は、街に蔓延する耳障りなノイズのように聞こえ、私は思わず耳を塞ぎ、布団の中に潜り込んだ。

私が何も返事をしないと、母は諦めて階段を下りて行った。

寂しさや悲しみが、その足音からも感じ取ることが出来る。それほど弱々しい足音だった。だが、その音が途中で止まり、しばらくして聞こえてきた足音は、再び階段を上がってくる音だった。そして母は、扉の向こうからまた遠慮がちに話す。

「今日、エリちゃんのお葬式があるんだって。どうする？」

「いけない。…エリちゃんは死んでなんかないもん」

くぐもった声で、私は答える。母は私の答えを聞き、黙り込んでしまう。扉を挟んでいるので顔は見えないが、母が泣き出しそうな顔をしているのが、私には見えた。

「美優ちゃん。…エリちゃんは…」

「うるさい！」

「……」

思わず叫んでしまった。今まで母にこんなに大きな声を出したことなどなかった。私は、自分がこんなに大きな声が出ることすら知らなかったのだ。

もちろんエリちゃんが死んでしまったことはよくわかっていた。それでも、その事実を受け入れることは出来なかった。どうしても信じたくなかった。

” みたい。あたしがみいを守るからね。これからずっとずっと、みいを守るから”

” エリちゃん…ありがとう。じゃあ私がエリちゃんを守るね”

エリちゃんとそう約束した日のことを、私は何度も思い出す。

エリちゃんを守ることが出来なかった。そのことが悔しくて、悲しかった。

エリちゃんは、カーブでガードレールに衝突し、死んでしまった。

ブレーキの跡もなく、居眠り運転だと、警察は見ていらしい。あまりにも呆気なく、唐突にやってきた別れに、私の心は全くついていけていなかった。

「最近忙しすぎて死んじやいそうだよ」

事故の1週間前に、電話でこんなことを笑いながら話していた。その時は、お互いの仕事の愚痴などを、笑いながら話していたのに、結局それが、エリちゃんとの最後の会話になってしまった。そんな冗談を話していたエリちゃんが、本当に死んでしまったのだ。あの時に何とかすれば守れたかもしれないなどと、どうしようもないことばかりが頭を埋め尽くす。

「美優ちゃん？」

母が何度も呼び掛けていたらしいが、全然気付かなかった。私は布団に潜り、耳を塞いだまま返事をする。

「…何？」

自分でも聞こえないくらいの返答だったが、母には聞こえたらしい。

「あのね…エリちゃんから手紙を預かってたの」

「え？」

「3年前の9月3日にね、エリちゃんが訪ねて来たの。美優ちゃんは入院してたから知らないだろうけど、その時にエリちゃんがね、3年後の4月になったら、美優ちゃんに渡してくれって。自分で渡すのは照れ臭いからって。なんで3年後なのかは教えてくれなかったんだけど」

”ガチャ”

私は次の瞬間にはドアを開けていた。

「手紙ってどれ？」

「はい。これ」

差し出された封筒を、私は奪い取るように取る。

「ありがとう」

”ガチャ”

「あ…美優ちゃんごは…」

「後で食べるから！」

母を置き去りし、部屋に戻った私は、ベッドの上に封筒を置く。

長い間封筒を見つめ続けた後、ようやく封筒を手に取り、開く。中

には、1枚の便箋が入っていた。
その便箋には、可愛らしいキティちゃんがプリントされており、今の私の気分と比べると、その笑顔はあまりのも輝いていた。私の悲しみが、その輝きの方だけ増幅していくような、そんな気さえした。3年前。私とエリちゃんにとって、忘れることの出来ない、大切な思い出が残る年だった。

第1章 エリ

3年前

私立青崎高校3年A組

4月3日。

「今年の担任って転任してくる奴なんだってさあ」

「マジで？イケメン？」

「さあ？けどおっさんらしいよ」

「ええ〜！高校生活最後の担任もオヤジかよ…」

「うるさいんだけど」

「え？ああ…ごめん」

「どうせどんな担任でも一緒なんだから靖子も知香も騒ぎすぎ」

「そうだよな。ごめん」

エリは2人を睨み付け、溜め息を吐く。毎日ちよつとしたことで騒ぎまくるこの2人に、エリも毎日のようにイラついていた。

村田知香に田上靖子。

2人とも高1で初めて出会い、それからずっとエリにくっついてくる金魚の糞だ。

知香は毎日甘いものばかり食べている。今日も朝からアンパンのようなものや、チョコレートのようなものを食べ続けている。甘いものしか食べないので、おそらく頭も味覚もバカなのだろう。

一方、靖子の方も、頭のネジが1本外れているんじゃないかと疑いなくなるようなバカ女だった。なぜなら、1日20時間は笑っているのだ。放課はもちろんのこと、授業中でもずっと爆笑している。

靖子が笑っていない時を見るのは、東京の夜空に流れ星を発見することと同じくらい稀な出来事で、そんな時は思わず手を合わせ、願

仕事を3度呟いてしまっただった。

「みい！」

イライラしたまま、大きな声で美優を呼ぶ。だが、聞こえてきた返事は、衛星中継かと思うほど遅れてやってきた。

「あ、何？」

一応急いでいるのだろう。美優はガタガタと大きな音を立てながら、自分の席から駆け足でやって来る。

佐藤美優。小学生の頃からの同級生だ。小学6年の時から高3の今年まで、7年連続同じクラスである。

性格は、いい風に言えばおっとりとしていてマイペース。顔も可愛らしいので意外と男子には人気だった。ただ、極度の人見知りの為に、いつもエリの横から離れない。

そんな可愛らしい美優も、エリから言わせればただのノロマだ。いつもやるが遅く、イライラさせられる。

「タバコ！」

「あ、うん」

また駆け足で机に戻り、カバンからタバコを取り出す。

「はい」

美優が差し出した箱からタバコを1本取り出し、火を点ける。

「ふう〜。もういいよ。どっか行って」

「え？あ、うん」

今度はとぼとぼ戻っていく。さっきの駆け足と比べると、多少ではあるが、やはり駆け足の方が速いことが確認出来た。

そんな下らないことを確かめっていると、チャイムが鳴り、教室の扉が開く。

「来たあ！」

知香と靖子が同時に叫ぶが、残念なことに教室の扉を開けて入ってきたのは、噂のイケメン教師ではなく、教頭の猿渡だった。

「ってツルリンかよあ！ふざけんな！」

生徒全員の大ブーイングが教室内を包む。

猿渡の渾名はツルリン。その渾名の通り、頭はツルツルの禿げ頭。さらに、禿げ上がった額は脂でテカテカ。腹は妊婦のように出ており、どんな漫画やドラマにも1人は登場する、典型的なキモキャラだ。だが、その後ろから入ってきた教師を見て、教室内の大ブーイングが歓声に変わる。はずだったが、入ってきたのは何の特徴もない30代前半くらいの男だった。

「かつこ…いいかあ？」

「まあ…こんなもんじゃない」

案の定、知香と靖子も期待外れだったらしい。それでも、始めから教師に外見の良さなど求めていない生徒たちは、各々が勝手に納得をしていた。その為、期待を裏切られたことに対する、嘆きや罵声が聞こえてくることはなかった。

「静かに！え、このクラスの担任は転任してきた榎村先生になります」

エリは、久しぶりに聞いた猿渡の声に、思わず顔を顰める。

猿渡は、見た目もキモイが声もキモイのだった。その見た目からは想像も出来ないくらいの高音で、聞く者たちの聴覚を破壊していく。

「じゃあ榎村先生。後は頼みますよ」

そう言つて、猿渡は教室を出て行った。

残された新任教師は、小さく息を吸い込み、一気に話し出す。

「おはようございます。今日から転任してきて早速担任をやらせてもらう榎村隼人といいます。授業は英語を担当します。みんなのこととは全く知らないし、みんなも私のことを知らないはずなので、これからゆっくり時間を掛けてお互いのことを理解していけたらいいと思います」

その話し方は流暢ではあるが、緊張しているのが手に取るように伝わってくる。

「演説みてえ」

「ガツチガチじゃーん」

エリが感じたものを、他の生徒たちもすぐに感じ取り、小馬鹿にし

たようにからかい出す。

隼人の初めての挨拶は、生徒たちの爆笑、苦笑、そして、失笑を誘っただけであつた。

「ははは。あんまり挨拶なんてしないからちよつと緊張してしまつてね」

隼人も自分の挨拶の固さに苦笑し、照れたように頭を掻いていた。

そんな和やかで、平和な1年の始まりを、エリは、一片の桜の花びらが風に舞うのを窓から眺め、過ごしていた。

隼人

4月4日。

昨日の始業式から1日経ち、今日から本格的に高校生活最後の1年が始まる。

教室に向かう廊下を、隼人は颯爽と歩いていった。隼人の転任後初めての授業はHR。普段なら何をやるのか、毎回決めておかなければならない時間なのだが、新学年が始まり、最初のHRは、大抵はクラス委員を決める。その例に漏れず、今日のHRはクラス委員を決めることにしていた。

教室の前まで来ると、扉を開ける前に立ち止まり、大きく1回、深呼吸をする。子供の時から、事あることに立ち止まり、深呼吸をしていた為、大人になった今でも、授業の前には必ず深呼吸をする習慣がついてしまった。

深呼吸によって自分の落ち着きを確認した隼人は、ゆっくり扉を開ける。その扉の先には、異世界が広がっていた。

男子の低い声と、女子の高い笑い声。その間を縫うように、ガムを噛む音や、お菓子の袋を開く音。様々な雑音が全て重なった時に起こるのは、眩暈がするほどの不協和音だった。

隼人が教壇に立つても、生徒たちは一向に気付く気配がない。おそらく、気付いてもあまり変化はないように思うが、授業を始めなければならぬ為、声を掛ける。

「始めます！」と言ってみても、思った通り変化なし。仕方なく何度も声を掛け4度目で何とか授業の形を作ることが出来た。

「今日の1限目はクラス委員を決めていこうと思います」

ようやくHRに入ることが出来た隼人だったが、もうすぐ教師生活10年を迎える経験上、このセリフに返ってくる返答は1つしかなく、このセリフはいるのだろうか、と自問自答してしまう。

「何でもいい」

生徒たちは、隼人の予想と一言一句変わらぬセリフで答える。隼人は、思わずガッツポーズが出てしまいそうな自分を必死に抑え、授業を進める。

「まあそう言わずに。まずは学級委員長を決めようか。誰か立候補はあるかな？」

クラス委員は多種多様、様々あるが、全てに共通して言えることが1つあった。それは、誰が何になっても何もやらない。一般常識の問題に出されてもおかしくないんじゃないかと思うほど、不変の共通項だ。だからといって、やらないならそれでいいと言ったことも出来ない。結局学級委員長がほとんどの仕事をやるはめになる。その為、毎年学級委員長だけはいつまで経っても決まらない。今年も例年通りの長丁場を覚悟していた隼人は、聞こえてきたやり取りに驚く。

「みい。やりなよ」

「え？私？学級委員長なんて出来ないよ」

神谷エリと佐藤美優だった。

小声でのやり取りならまだしも、全員の聞こえる声で強制するエリに、隼人は言葉が出なかった。エリに指名された美優は慌てて断っている。

「いいからやりな。わかった？」

「…うん。わかった」

エリが有無を言わせぬ強い口調で言うと、美優は学級委員長を引き受けた。

「先生。学級委員長はみいで決まりました」

エリにそう言われても、隼人にしてみれば到底容認出来ることではなく、普通ならすぐに無効にする決定だった。だが、2人のやり取りを見ていた隼人は、そのやり取りの中に違和感を覚え、その違和感の正体を突き止めることに頭を奪われていた。

客観的に見れば、エリに無理矢理指名され、美優がエリに怯えて、

仕方なくやることになったように見えるが、隼人には、美優が恐怖や怯えからエリの言うことを聞いたように見えなかったのだ。むしろその逆。幸福感や喜びを感じているようにさえ見えた。

「佐藤。本当に学級委員長でいいのか？」

隼人は、その違和感を胸の内に押し留め、聞く。

「はい。大丈夫です」

やはり美優の返事には、恐怖や怯えは微塵も感じられなかった。

「じゃあ学級委員長は佐藤にやってもらおう。次は副学級委員長を決めなきゃな」

そう言い、再び立候補を待とうとした隼人だったが、ふと思いつき、続けて発言することにした。

「これは、神谷にやってもらおう」

「はあ？なんであたしなの？勝手に決めんなよ」

隼人の独断での指名に、エリは当然のことながら抗議する。隼人は自分のことを睨み付ける少女に、諭すように話す。

「神谷は佐藤を指名したんだぞ？つまり君も誰かに指名される可能性がある。そうじゃないかな？」

そこからエリとの睨み合いがしばらく続いたが、結局エリが折れる形でこの鬭いは決着が着く。

「意味わかんないし！…まあいいや。めんどくせえしやっただげるよ」

「よし。じゃあこれで学級委員長が決まったので、ここからは2人に任せよう」

そう言つて隼人は教壇から降り、窓際へ歩いていく。その短い距離を歩く間に、隼人の頭には、騒がしい異世界のような教室で、一言も喋らずに窓の外を眺め続けている少女と、その少女の背中を、微笑みながら見つめる少女。2人の少女の姿が浮かんでいた。

エリ

(なんであたしがやんないといけないわけ?)

エリは隼人から指名され、自分が副学級委員長などという下らない仕事をしなければならなくなったことにイライラしながら、教壇に立つ。顔を上げると、美優はまだ席の近くであたふたしていた。

「みい！早く！」

美優のノロマ加減に、エリの怒りはさらに膨れ上がる。

「あ、うん。ちょっと待って。書くものとかいるよね？」

そう言うと、ガシヤガシヤと筆箱を漁り、シャーペンを取り出す。そしてようやく教壇まで来たが、その手にはシャーペン以外の物は見当たらなかった。

「あんだシャーペンだけ持ってきて何がしたいの？」

「え？」

エリはウンザリしてしまう。だが、当の美優は、質問の意味がわからないのか、キョトンとしている。

「だから、紙とかは？シャーペンだけ持ってきても書けないでしょ」
早口で捲し立てると、美優は、「あ、そっか」と言いながら、再び机に戻るうとする。

「もういい！黒板にチョークで書いて！」

怒りが沸点に達したエリは、その背中に鋭く言い放った。その一言に、美優の動きはピタリと静止する。

「わかった。…ごめんね。エリちゃん」

そう謝りながら振り返った美優の瞳には、今にも泣き出してしまいそうな悲しみが湛えられていた。

美優はいつもこうだ。取り留めもない小さなミスを1日何十回と繰り返すが、その度にこの世の終わりのような悲壮感を漂わせて謝る。それがまた、エリをイライラさせるのだった。

「もういいから早く進めて」

エリはその苛立ちを何とか抑えて言う。

「うん。えっと……じゃあ他の係を誰かやりたい人はいますか？」

……。

誰も答えない。いや、答える気もない。

「……いませんか？」

……。

二度目の問い掛けにも相変わらず誰も答えなかったが、徐々にクスクスと笑い声のようなものが聞こえるようになってきた。誰も答えられず、困っている美優を見るのが面白いのだ。

「……もういい。あたしが決める」

堪りかねたエリは、そう言うのと次々と黒板に名前と係を書いていく。

「これで決まりだから。文句ある奴はあたしに言いな」

あつという間に係を全て決め席に戻る。そんなエリに文句を言う奴なんてもちろんいない。残された美優は、まだ教壇に立ち尽くしていた。

「これでみんないいのかな？」

見かねた隼人が助け船を出して聞くと、全員渋々頷く。

「よし。じゃあこれで決まりにしよう。佐藤も席にもどっていいぞ」

「あ、はい」

隼人に言われ、やっと美優は席に戻った。

エリは、美優を学級委員長に指名したことを、早くも後悔し始めていた。これから何度もこんなことを繰り返すのかと思うと、頭が痛くなってくる。

「先生。まだ時間余ってますけどお」

エリがぼんやりと考えていると、知香が隼人にそう言うのが聞こえた。時計を見ると知香が言った通り、授業が終わるまで10分近く時間が残っていた。隼人は少し考えるように俯いた後、口を開く。

「そうだな。……じゃあ私の話をみんなに聞いてもらおう」

「なになに？先生の女性遍歴とか教えてくれんの？」

靖子の問いに、教室内は爆笑に包まれる。エリは、早くも興味を失い、頬杖を着き、いつものように窓の外を眺めていた。

「いや、私自身の話ではない。愛。愛について話そう」

……。

静まり返る教室。

「は？何言っちゃってんのこの人？」

一瞬の静寂の後、知香の一言で再び教室は爆笑に包まれた。

「まあそう笑わずに聞いてくれ」

隼人はそんな爆笑など意に介さず、といった感じで話を続ける。

「愛。と言われるとみんなは男女の愛を思い浮かべると思うが、愛には様々な形があるんだ」

「それってゲイのことかよ」

また生徒たちは笑う。真面目に隼人の話を聞いている奴など美優くらいだろう。そう思い美優の方を盗み見ると、案の定美優だけは隼人の言葉に真剣に耳を傾けていた。

「同性愛か。もちろんそういう形もある。けど他にも、親が子を思う気持ちや、逆に子が親を想う気持ちなんかも愛なんだ。それだけじゃなくて、友達が友達を想う気持ちも愛だよ。君たちは愛に包まれているんだ。そして君たちもまた、誰かを愛している。恋人を、家族を、そして友達を愛している。よく恋人に対して、60億の中から君に出会ったのは奇跡だ。だとか運命だ。なんて言うよね。そんなような歌もたくさんある。それは家族や友達でも一緒じゃないかと私は思う。君たちのご両親も60億人の中からたった2人が親として君たちと出会った。友達だって、60億人の中からその子と奇跡的に出会ったんだ。君たちの人生はまだまだこれからだし、様々な苦難や、もしかしたら絶望を味わうかもしれない。しかし、忘れてはならないのは、君たちは愛されているってことだ。君たちを愛してくれている人がたくさんいる。君たちのことを守ってくれる人がたくさんいる。いつでも一緒に闘ってくれる人がいる。それを忘れないでいてほしい。以上」

隼人の話が終わったのと同時にチャイムが鳴った。

隼人はあんなに熱っぽく語っていたのに、教室内の温度は2度は下がっていた。隼人が教室を出た瞬間に、知香と靖子が爆笑と共にエリに近寄ってきた。

「槇村の話、意味わかんなくない？」

「君たちは愛されている。…だつてえ。キモイ。あはははははは」
知香と靖子は隼人の真似をして爆笑している。

「エリは意味わかったあ？」

靖子が爆笑でヒイヒイ言いながら聞いてくるが、エリに意味がわかると思つて聞いているわけじゃないのは明白だった。

「わかるわけないじゃん。あんな長い演説オバマだけで十分」

「あははははは。もう、エリ最高。槇村の渾名オバマにけつてえい」

知香と靖子は相変わらず爆笑をし続けていた。エリにも隼人の話ははつきり言つて退屈な時間だった。だが、なぜか隼人の言葉が、まるでリピート再生しているかのように、頭の片隅で響き続けていた。

“君たちは愛されているつてことだ。君たちを愛してくれている人がたくさんいる。君たちのことを守ってくれる人がたくさんいる。いつでも一緒に闘ってくれる人がいる。”

隼人

4月20日。

隼人がこの学校に来て3週間が経った。

今日も朝からクラスは騒がしい。どうしてこうも毎日毎日、同じような話ばかりしていられるのだろうか。自分も学生時代はこんな風にバカ話ばかり飽きもせずしていただろうか。バカというと、生徒たちから機関銃のような抗議が炸裂しそうだが。

「席に着け。朝礼始めるぞ」

黙っていれば老後まで喋っていそうな生徒たちを、席に着かせるのは骨が折れる。案の定、生徒たちは全くの無視。仕方なく何度も声を掛け、5度目で席に着かせることに成功する。まだこの学校に来て3週間しか経っていないのに、同じような声掛けを100回以上しているのではないか、そう思うと、隼人の心は今にも折れそうになってしまったのだった。

そんな折れかけの心を叱咤し、顔を上げると、全員席に着いていないことに気付く。まだ1席だけ空席のままであった。その席は、佐藤美優の席だった。

「佐藤はまだ来てないのか？」

「寝てるんじゃない？」

隼人が誰にともなく聞くと、知香が鏡を見ながら答える。隼人から見れば、十分すぎるほどの化粧に見えたが、知香は憑りつかれたように手を動かし続けていた。

「よく遅刻するの？」

「欠席はしなくせに、遅刻ばつかすんだよ。しかも毎回寝坊」

「そうなのか。じゃあ後で電話してみるか。とりあえず朝礼を開始しよ……」

“ガラガラ”

隼人が朝礼を進めようとした時、教室の扉が開き、美優が入ってきた。その背後には、教頭の猿渡もいた。

「槇村先生。ちょっといいですか？」

猿渡の光り輝く額と、天まで届くかのような高音。さらに、香水風呂に入ったんじゃないかと思うような臭いに、隼人は五感のうち三感を一瞬にして奪われる。

「はい。何でしょう？」

心だけではなく、肉体までも折れそうになりながら、何とか答える。しかし、教室から出て、猿渡が言った一言に、隼人は絶句する。

「佐藤がタバコを所持していたんですよ」

「は？タバコ…ですか？」

「そう。遅刻してたから急いで校門を抜けようとしてね。段差に引っ掛かって転んだ拍子にカバンの中身もドシャー、ですよ」

猿渡はどこか嬉しそうだった。他の生徒に聞こえないように教室の外に出たはずなのに、その声は明らかに大きすぎた。隼人は、この教師がなぜ教頭になれたのか、状況も忘れ真剣に考えたくなくなった。

一方の美優は、今にも泣き出してしまいそうな顔で俯いている。相当激しく転倒したのか、膝からは出血も見られた。

「佐藤。膝は大丈夫か？」

「…はい」

顔だけではなく、声までも泣き入りそうな、弱々しい声だった。

「タバコ、持ってたのか？」

「…はい」

「佐藤が吸う為に持ってたのか？」

「……………はい」

隼人は美優の、他の質問の時とは違う、妙な間に不審なものを感じ取る。

「本当か？」

「槇村先生。佐藤が認めてるんですから」

猿渡はさっさと話を終わらせたいらしい。ろくに話も聞かず、片付

「けようとしている」

「いや、しかし」

「いや、しかし、何ですか？」

「佐藤はタバコを吸うような子じゃないと思うんですが」

「私が吸う為に持ってたんです。…すみませんでした」

隼人が猿渡にそう言うと、美優はすぐに自分が吸う為に所持していたのだと言った。今度は先ほどと違い、あまりにも早すぎる喫煙の肯定で、隼人の疑心はさらに深まる。

「ほら、佐藤が認めてますから。そういうことで、生徒指導部で処分を検討しますからね。榎村先生も担任として出席してくださいね」
「…わかりました」

猿渡は満足そうに頷き、立ち去ろうとする。

「みいがタバコ吸うわけじゃないじゃん。バカじゃないの」

突然扉が開き、出てきたのはエリだった。

「そのタバコはあたしの。毎日みに持たせてるの。あたしがタバコ吸うって言ったなら納得でしょ、教頭先生」

エリは猿渡の前に仁王立ちになり、そう言う。その口元には、猿渡を挑発するような不敵な笑みが浮かんでいた。

「いや、まあ、その」

隼人は猿渡が態度に激昂すると思い、すぐに止められるよう身構えていたのだが、当の猿渡は、急にしどろもどろになってしまった。

「とにかく、今日の帰りまでに生徒指導部で話し合っ決めてから。そういうことで、榎村先生もお願いしますよ」

猿渡はそう言うと、逃げるようにそそくさと立ち去ってしまった。

「早く保健室行けば？」

猿渡の後ろ姿を不思議そうに見ていた隼人は、エリが美優にそう言うのが聞こえ、美優がケガをしていたことを思い出す。

「ああ。そうだな。佐藤、保健室に行ってきなさい。神谷、一緒に行っであげてくれるか？」

「ヤダ。授業あるし」

エリに一瞬で、しかも完璧な正論で断られ、面食らう隼人だったが、すぐに切り替え、言う。

「まあ、そうだな。じゃあ私と行くのか」

「…一人で大丈夫です。ありがとうございます」

「いや、しかし」

「みいが大丈夫って言うてるんだからいいじゃん」

エリはそう言うと、もう興味はない言わんばかりに背を向けて教室内に戻っていく。

「本当に大丈夫か？」

「…はい。ありがとうございます」

そう言い、美優は左足を引きずりながら歩いて行った。隼人は、猿渡が去って行った時と同じようにその背中を見送る。美優の小柄で華奢な背中が、膝の痛みだけではない、別の痛みにも耐えているようであった。

美優

4月らしい暖かな気候の中、午前中の授業はあっという間に過ぎていく。真面目に授業を受けるのは数名の生徒だけなので、ほとんどの生徒たちは眠って過ごす。当たり前で、いつもと変わらぬ日常の一幕。

美優もその一幕と同じように、いつも通り真面目に授業を受けているつもりだったが、今日は全く集中出来なかった。原因は一つ。朝の出来事が頭から離れなかったからだ。

寝坊をして、1人で転倒。それでエリに迷惑を掛けてしまった。美優はそんな間抜けな自分が大嫌いだった。休み時間が来る度に謝り続けているのだが、エリにはずっと無視されていた。そのことも、美優を落ち込ませている原因の一つになっていた。

「みい。行くよお」

様々な臭いが充満し、あまり居心地のよくない昼休みの教室で、美優が弁当箱を開こうとしていると、廊下の窓から靖子がそう叫んだ。「行くつてどこに？」

美優が聞くと、靖子は指を上に向け、同時に唇を、「うえ」と動かす。声は出ていなかったが、その動作だけで美優にも、靖子が何を言っているのか理解することが出来た。

急いで弁当をカバンに仕舞い込んで教室を出ると、靖子はすでにかなり先を歩いて行ってしまっていた。その距離を確認した美優は、遅れないように小走りで走り出す。残念ながら、靖子との距離は縮まることはなかったのだが。足を動かす度に膝がヒリヒリと痛んだが、靖子との距離が縮まらないことも、膝が痛むことも、少しも気にならないくらい、美優の気分は高揚していた。

階段を3階分上がるとそこには、昼間なのに薄暗い、畳2畳くらいの空間があり、そのすぐ先に、屋上へ繋がる扉があった。扉の前に

は知香。その横にエリがいた。知香はうつすらとホコリが床に膝をつき、いつものように開錠作業に入っていた。

屋上は立ち入り禁止であり、扉にも鍵が掛かっているのだが、その鍵は信じられないくらい脆く、針金を突っ込んでグリグリ回すと、簡単に開いてしまうのだった。床の状態を見ればわかるように、ここまで上がってくる人間もほとんどいない為、バレることもなく、屋上で悠々と昼の麗らかな陽気を楽しむことが出来るのだった。

美優が来てものの1分ほどで鍵は開き、4人は光が降り注ぐ屋上に勢いよく飛び出す。

美優が屋上に来てまずすることは、大きく深呼吸をすることだった。薄暗く、空気もあまりよくない空間から、眩しいくらいに明るく、それなりに空気もいい場所に出れば、それが東京の空気だとしても、おいしく感じてしまうのだった。

美優が東京の薄汚い空気を肺いっぱいに取り込み、3人の方を見ると、3人はそんな美優の姿に目もくれず、思い思いに昼食を食べ始めていた。

靖子が話す、彼氏の変な癖や、趣味の話を、知香はクリームのたっぷり詰まったパンを頬張りながら聞いている。2人ともとても楽しそうだったが、エリはあまり笑っていなかった。美優は、エリにもう一度謝りたかったが、知香と靖子がいる手前それも出来ず、仕方なく黙々と弁当を食べる。先ほどまでの高揚した気分は、とうに消え去っていた。

太陽の光をいっぱい浴びて、明るさが溢れているはずの屋上で、美優の心には少しだけ、陰が差していた。

隼人

「は？」

職員室の片隅にある小さな応接間で、隼人は頓狂な声を上げる。

「だから、2人に反省文を書かせてください」

猿渡の耳障りな高音のせいで、ついに聴覚がイカれてしまったのかと勘違いしてしまうほど、タバコ所持に関する処分は軽かった。あまりの軽さに、「反省文だけ、ですか？」と隼人は聞き返す。すると、猿渡は苦虫を噛み潰したような表情で、首を縦に何度も振る。

「今回は反省文だけです。次回はもっと重い処分になるので、それもしつかり、しっかりと言い含めておいてくださいよ！」

そう言うと、猿渡はあつという間に立ち去ってしまった。隼人は多すぎる疑問の数々に、しばらく呆然としてしまう。

なぜタバコ所持でこんなに処罰が軽いのか。普通は最低でも停学、下手をすれば退学になるほどの行為だ。そして、何より疑問なのは生徒指導部がこの話し合いに全く参加していないことだ。猿渡と隼人。今回の問題に対する話し合いは2人だけで、しかもこんな辺境の、汚らしい応接間で行われた。

回答の見つからない疑問の数々に、隼人の頭は中々整理出来なかったが、とにかく教室で待つ2人に結果を伝えようと立ち上がる。その時、隼人はエリの挑発的な笑みを思い出した。猿渡に対するあの態度は、自分が退学させられないことを確信しているようだった。その確信があったから、美優を庇った。

隼人は、あの2人の関係が今まで以上にわからなくなっていくのを感じていた。見えない糸が絡み合い、どれが本物でどれが見せかけの糸なのか、判別することが出来ない。そのことが、隼人を無性に不安な気分させ続けているのだった。

エリ

授業が終わり、エリと美優は隼人が来るのを教室で待っていた。

タバコ所持なのでおそらく停学だろう。ちょっと早いゴールデンウィークだと考えれば、逆にありがたいくらいだと思っていた。

エリの頭の中には、退学という処罰が下される心配など全くなかった。もしそういう処罰が下されたとしても、それはそれで構わないとも思っていたのだが。

そんなエリの余裕とは対称的に、美優は今日一日ずっと泣きそうな顔をしている。毎日のようにドジを踏むくせに毎回同じような顔をして落ち込むのだ。今日一日ほとんど無視し続けていたが、いい加減この顔にも嫌気が差し、隼人が来るまでの間暇も持た余っていたので仕方なく話し掛けることにする。

「痛い？」

「え？」

「膝」

「ああ。ちょっと痛いけど大丈夫」

美優はエリが心配してくれたことが嬉しかったのか、すぐに表情を崩してそう答えた。そんな美優の膝には、見たことないくらいの大きな絆創膏が貼ってあった。その絆創膏を見るだけで、美優がどれだけ豪快にコケたのかが目に浮かぶようであった。

「エリちゃん、ごめんね。私がドジったせいでエリちゃんにまで迷惑掛けて」

今さっきは嬉しそうに表情を崩していた美優は、次の瞬間には最初の泣きそう顔に戻ってそう謝る。

「別に。いつものことだからいい」

今日だけで飽きるほど聞かされた謝罪の言葉に、しっかり答えるのも面倒だったエリは、軽くあしらうようにそう返した。

「だよ。いっつも迷惑ばっか掛けちゃうもんね」

すると美優は、今日一番の悲壮感を全身から漂わせながら下を向いてしまう。このままだと美優の泣きそう顔が、泣き顔へと進化を遂げる可能性があったので、エリは話を変えることにする。

「なんであたしが吸う為に持たせてるって言わなかったの？」

「だって私がドジったせいでエリちゃんに迷惑掛けなくなかったから」

「チクつたら袋にされると思った？」

「ううん。全然思わない。エリちゃんはそんなこと絶対しないもん」
「あつそ」

話を変えたことによつて、次はエリが下を向くことになってしまった。

美優は全然わかっていないのだ。ムカついた奴、ウザい奴は徹底的に叩き潰す。それがエリの生き方だった。美優の中でエリは、まだ出会った時と同じ少女のままなのかもしれない。

そんなことを考えていると、不意に扉が開き、隼人が教室へと入ってきた。隼人の表情はどこか釈然としない表情だったが、エリと目が合うとすぐに表情を引き締めた。

「生徒指導部で処分を決めた。2人には反省文を書いてもらう。明日までに書いてくるように。以上」

「…以上？」

美優が不思議そうに首を傾げる。エリは隼人の釈然としない表情がこの処罰の軽さによるものだと確信した。美優と同じように不思議ではないのだろうか。

「タバコ所持で反省文だけ？」

エリは、隼人の表情が可笑しく、笑いそうになりながらそう聞く。

「タバコ所持だけで吸った証拠もないし。後は…わからん」

「誰が吸う為に持ってたのか、とか調べないの？」

「…わからん」

「ふん」

やはり隼人にも何が何だかわからないのだ。そんな隼人が滑稽で、真相をお教えしたいところだった。

とにかく生徒指導部と教頭で決めたことだから、以上だ。2人とももう帰りなさい」

そう言うのと、隼人は教室を出て行ってしまった。残された美優は呆然としている。エリはそんな美優を無視し、さっさと帰ろうと腰を上げる。

「…よかった」

教室を出かっていたエリの耳に、美優がぽつんと呟くのが聞こえた。

「何が？」

思わず振り返り、そう聞いていた。

「処分が軽くて。私はいいけど、エリちゃんが退学になっちゃったらどうしようかと思ってた」

美優は心底ホツとしたような表情でエリに言う。そんな美優の表情と言葉がエリを苛立たせ、エリは皮肉たっぷりに返す。

「あんたが退学になったら大好きなママが泣くよ」

「そっか。お母さん泣くかな？」

「泣くね。あんたの母親だからね。まああたしは停学くらって、1週間早くゴールデンウィークがよかったんだけど」

エリの皮肉にも気付かず、美優は不思議そうな顔でエリのことを見ている。だが次の瞬間、大きな瞳をさらに見開き、「ああ！そっかあ！エリちゃん頭いいね。私も停学がよかったなあ」と言い、笑顔でエリを見つめ返してきた。その笑顔は、出会った時と何ら変わる事のない少女のまま、その少女を、優しい光が包み込んでいた。

第2章 美優

5月10日。

ゴールデンウィークも終わり、3年生にとっては慌ただしく忙しい、これからの人生の全てを決めると言っても過言ではないほどの大事な日々が始まる。美優も、3年生らしく、朝から慌ただしく走り回っていた。ただ美優の場合、慌ただしいの意味が他の生徒たちと少し違うだけだ。

起きたのは8時。どう考えても遅刻だった。

「美優ちゃん。朝ご飯は？」

「いらない！食べてる時間ないよ」

美優の母である好子がのんびりと尋ねてくる為、美優はムツとしながら答える。

（起きてこなかったら起こしてくれてもいいじゃん）

美優は内心、母親に文句を言いながら準備を急ぐ。

好子は美優よりマイペースな人だった。好子が慌てているところを美優は見たことがなかった。たぶん好子は、世界が明日滅びると言われても、「へえ〜。大変ねえ」などと、のんびり言うのだろう。美優はそんなマイペースな母親が大好きだった。それなのに母親に似てしまった自分のことは大嫌いだった。美優と好子は、顔も性格もよく似ており、たぶん端から見たら仲のいい姉妹のような親子に見えるのだろうと、そんな下らないことを美優はよく考えるのだった。

こんな慌ただしい朝にもそんなことを考えている自分に思わず苦笑しながら、準備を終えた美優は、急いで玄関に向かい靴を履く。

「あ、今日は先生と面談があるからちよつと遅くなるからね」

「はい。慌てるけど気を付けて行ってね」

（だからお母さんのせいで急いでるんだって）

美優はまた、心の中で文句を言いながら玄関を出る。

「わかつてる。じゃあいつてきまあす」

「はい。いつてらっしゃい」

母の声を背中に聞きながら、美優は軽快、とは言い難いスピードで走り出した。

新しいことなど何一つない、昨日と全く同じような今日が終わる。

生徒たちは、ほんの少しでも昨日と今日の違いを見つけようと、暮れゆく街に飛び出していく。そんな後ろ姿を見ながら、美優とエリは廊下に座っていた。

結局、今日も1限目が始まるまでには間に合わず、学校に着いたのは9時過ぎだった。だが、最近では教師もクラスメートも、呆れているのか興味がないのか、美優が何時に来ても何も言わなくなった。それがいいことなのかはわからないが、怒られないことは美優にとってはありがたかった。

学校では今日から、1日8人ずつ、1週間でクラス40人全員を面談する、進路面談が始まる。美優も隼人と面談する為、今日は学校に残っていた。

隣には、エリがいつものように不機嫌そうに座っていた。美優の順番はエリの次なので、エリが呼ばれるまでは一緒に話していられる。それだけで、美優は嬉しかった。

「今日なんで遅刻したの？」

美優が何か話そうと、頭をフル回転させて話題を探していると、エリの方から話し掛けてくれた。

「ちょっと寝坊しちゃったんだ。お母さんが起こしてくれなかったの」

クラスメートは、美優がどれだけ遅刻しようとするの興味もなくなっていたが、エリだけは、こうやって話す機会がある度に、遅刻の理由を聞いてきてくれる。エリが自分のことを心配してくれているのが美優にはわかり、毎回その喜びに飛び上がりそうになってしまう

のだった。

「ふうん。また寝坊か」

「うん」

今日もやはり会話が続かない。せつかくエリと2人だけで喋る時間
が出来たのだからと、美優は必死に話題を探す。

「そういえばエリちゃんは進路どうするの？やっぱり就職？」

「就職もしないし進学もしない。渋谷歩いてりやお金くれるオヤジ
いっぱいいるし」

美優が見つけ出した質問に、エリが何でもないことのように落とし
た爆弾は、美優の心を激しく襲う。

「そ、そ、それって…エリちゃん…そんなことダメだよ！そんな…
そんなこと…」

美優がさらに言葉を繋げようとした時、教室の扉が開き面談を終え
た女生徒が出てきた。

「神谷さん。次は神谷さんだって」

女生徒は怯えたような声でエリに言う。

「……」

エリは、そのまま教室に入って行ってしまった。美優には、エリが
ひどく遠い世界に旅立って行ってしまったような、そんな気がした。

エリ

教室に入ると、教室の中央に机が向かい合って並んでおり、片方の机に、オバマこと隼人が座っていた。

「そこに座って」

隼人に言われ、黙って椅子に座る。

「神谷は就職希望でいいのかな？」

「はい」

「どこか行きたい会社なんかはあるのか？」

「別に」

エリは隼人と喋りながらも、先ほどの美優との会話を思い出していた。いつものように適当な話題で時間を潰そうとしていたはずなのに、美優の幸せそうな表情を見ていたら、無性に腹が立ってしまった。その怒りに任せ、全く必要のないことを言ってしまう、あんなことをわざわざ言ってしまった自分に、また腹が立っていた。

「じゃあ、やってみたい仕事なんかは？」

隼人はそんなエリの様子に気付くわけもなく、質問を続けている。

「別に」

「じゃあこれから資料を集めて行きたい会社とか、やってみたい仕事なんかを探そうな」

隼人が言ったこの言葉が、なぜかエリを刺激した。

「嫌です」

「嫌？」

「ていうか卒業出来ればそれでいいから」

「就職もしないってことか？」

「はい」

「でもなあ神谷。学校から就職しておいたほうが楽だぞ？何にもやりたいことがないなら進学して、大学で見つけるのも手だしな」

「あたしのことを思ってた言ってくれてるんだ？」

「そうだ」

エリの身体中を、真っ黒な血が駆け巡る。自分でもどうしようもないくらいに、隼人に苛立った。

「…バツカじゃないの！！ホントは自分の評価の為のくせに！キレイ事言うのやめてくれる？ムカつくから！」

エリの突然の爆発に、隼人は面食らったような表情になるが、すぐに真剣な表情になり、エリと対峙する。

「なぜそう思う？」

隼人の声は、激昂するわけでも、悲観するわけでもなく、どこまでも冷静で、穏やかだった。

「みんな自分が一番だから。あたしもだけど」

「確かにそうかもしれない。けど他にも一番がある可能性もあるんじゃないのか？」

「はあ？」

意味のわからない隼人の言葉に、次はエリが面食らってしまう。

「何言ってるの？」

「だから、自分が一番だけど、他にも一番があるかもしれない。一番が一つだけじゃないといけないなんて誰が決めたんだ？」

「意味わかんない」

本当に意味がわからなかった。隼人が何を言っているのかも、なぜ隼人がこれほど穏やかなのかも、何もかも意味不明だった。

「俺は自分が一番だが、他にも家族や友達、そして生徒たちも一番だ」

「全然意味わかんない。………帰る。とにかく、就職も進学もしないから」

エリの怒りは急速に冷めていく。こんな奴にあれほど苛立った自分がバカみたいだった。

エリは席を立ち、教室を出ようとする。その背中に、隼人の言葉が投げ掛けられた。

「神谷。君の一番はなんだ？」

エリは振り向かず答える。

「自分って言ってるんじゃない」

「他には？」

「ない」

「俺はあると思う」

「ないし」

「一番大事なものは一つじゃなくていいんだ。欲張っていいんだ」

エリは、何も言わず教室を出た。

美優

廊下に取り残された美優は、先ほどのエリの言葉を思い出していた。エリが最近、自分の家に帰っていないことは美優も知っていた。だが、そんなことをしているとは夢にも思わなかった。美優の中で急激に不安が広がる。

エリは毎日どうやって過ごしているのだろうか。バイトもしていないエリが、どうやって家に帰らず暮らしているのだろう。自分はエリのことを知っているようで、本当は何も知らないのかもしれない。廊下に座り込んで頭を抱えていると、突然エリの大声が耳に飛び込んできた。美優は驚きのあまり、座ったまま尻を浮かせて飛び上がった。何を言っているかまではわからないが、エリの口調がかなり激しいのだけは確認出来た。

先ほど落とされた爆弾と、静寂の中から突然放たれた銃弾のような激しさに、美優は底知れぬ不安を感じた。

そんな美優の不安をよそに、教室から出てきたエリに、美優が予想していた怒りや嫌悪の表情はなかった。だが、実際にエリが浮かべる表情を見て、美優はさらに動揺する。出てきたエリには、表情がなかった。文字通り、無だったのだ。

「次、みいだよ」

声にも感情は含まれておらず、淡々とそう言う。

「ねえエリちゃん。さっきの…」

「早く行きなよ。オバマが待ってるよ」

「…オバマ？」

突然アメリカ大統領の名前が出て、美優は思わず首を傾げてしまう。そんな美優に目もくれず、エリは歩き去りながら背中と言う。

「そう。演説が得意なオバマ先生。早く行きな」

「え？あ…うん」

エリに急かされ、美優は仕方なく教室に入った。教室に入ると、向かい合った机の片方に、オバマとは似ても似つかない容姿の、隼人が座っていた。

「そこに座って」

隼人に言われ、美優は向かいの机に腰掛ける。

「佐藤は…、就職希望でいいのかな？」

2年生の時に書いた進路希望の紙を見ながら、隼人が尋ねる。

「はい」

美優は、エリと隼人の間に何があったのか聞きたくてしようがなかったが、何事もなかったかのように面談を進める隼人を前にすると、何も言い出すことが出来なかった。

「そうか。何かやってみたい仕事とかはあるのかい？」

「やってみたい仕事…事務とかの仕事がいいな、と思います。私、喋るのが苦手だから営業とかは絶対出来ないし、接客も得意じゃないし」

「事務…と」

美優の希望を紙に書き留め、隼人は次の質問をする。

「行きたい会社、とかはないのか？」

「うーん。そういうのは特にはないです。そういうのよくわかんないです」

「そうか。けどどの会社に入るかは君の人生にとって大事な選択になるから、ゆっくり、じっくり考えような」

「はい。わかりました」

そのあとも進路について当たり障りのない幾つかの質問がされ、面談は終わりに近づく。

「じゃあこれで面談は終わりだ。どこか行きたいと思うような会社がないか暇な時にでも調べておこうな」

「はい。ありがとうございます」

面談が終わり、席を立とうとした時、隼人が迷ったように美優に問いかける。

「佐藤。君は神谷のことをどう思う？」

「エリちゃんのこと？エリちゃんが何かあったんですか？」

廊下でのエリの言葉や、エリと隼人の言い争いがあった為、美優はエリの話題に敏感になっていた。エリに何かあったんじゃないか。だから今日のエリはおかしかったんじゃない。美優はそう思った。

「いや、君が神谷に強く言われているのを何回か見たんだが。…そうだな。はっきり言おう。君は神谷にいじめられてるんじゃないか？」

予想外の隼人の言葉に、美優はキョトンとしてしまう。時が止まったかのように、お互い微動だにしなかった。

「私がエリちゃんに？…全然そんなことないです。先生面白い」

美優は隼人の言葉の意味をようやく理解し、笑ってしまった。

「そうなのか？本当にそうならいいんだが」

「本当にいじめられてなんかいません。だって、エリちゃんは優しいから」

その言葉に、次は隼人が不思議そうにした。

「優しい？」

「はい。エリちゃんはとっても優しいですよ。みんなにはわからないかもしれないですけど、いつも私のこと気に掛けてくれるし。この前も、私のこと庇ってくれたし」

「この前？タバコの時か？」

「はい」

「だけど、あれは神谷が…いや、その話はやめよう」

隼人は何か言おうとしたが、途中でやめる。美優にも隼人が何を言いかけたのかはよくわかっていた。

「じゃあ佐藤は神谷のことどう思っているんだ？」

隼人の問いに、美優は迷わず答えた。

「私、エリちゃんのこと大好きです」

そして、隼人の言葉を思い出しながら、ゆっくりと続ける。

「先生がこの前、友達が友達を想う気持ちも愛だって言ってたじゃ

ないですか？私、その時に思ったんです。エリちゃんと私は愛し合
ってるんだなあって。あ、これは同性愛とかの愛じゃないですよ？」

「ああ。それはわかってるよ」

ようやく2人の間に柔らかい空気が流れる。

「だから、全っ然いじめられてなんかいません」

美優はキツパリと言い切った。

「そうか。じゃあいいんだ。変なことを聞いて悪かった。面談も終
わったから帰っていいぞ」

「はい。じゃあ、先生さようなら」

「ああ。気を付けて。さようなら」

教室を出た美優は、廊下を歩きながら先ほどの自分の言葉を思い出
す。

（愛してるなんておかしかったかな？けどエリちゃんのこと大好き
だからいいよね）

校舎を出て、真っ赤に染まる夕焼けの中を、美優は軽快、とは言い
難いスピードで走り出した。

隼人

隼人は、教室の椅子に座り一人考えていた。この日の面談は全て終了し、もう教室にいる必要はなかったのだが。

神谷エリと佐藤美優。2人はどこをどう見ても仲が良いように見えない。だが、美優はエリのこと大好きだと言った。言われてみれば確かに、美優がエリのことを好きだというのはわかる気がしたが、果たして、エリは美優のことをどう思っているのだろうか。

隼人が勝手に想像するには、おそらくエリも、美優のことを好きなのではないかと思う。好きじゃなかったら、退学の危険を冒してまで美優のことを庇ったりしないだろう。エリがどんな秘密兵器を持っているのかは見当もつかないが、それでもリスクが高すぎる賭けだったように思う。そう考えると、少なくとも嫌いではないはずだ。だが、実際のエリを見てみると、毎日美優にきつく当たり、全く仲が良いようには見えなかった。

2人の間に何があったのか。その答えがわかれば2人の今の関係の謎も解ける気がしたが、そんなことはいくら考えても、隼人にわかるわけもなかった。

隼人は立ち上がり、窓辺に歩く。グラウンドでは、サッカー部の生徒たちが大きな声を上げながら駆け回っていた。パスが何本も繋がり、鮮やかなシュートが決まる。隼人には一生決めることの出来ないであろう、美しいゴールだった。

いつの間にか見入っていた隼人は、ふと思ひ至る。何かがあったのはエリのほうだけかもしれない。今の2人だけしか見ていない為、2人の間に何かがあったのだとばかり考えていた隼人は、そんな可能性には全く目がいかなかった。だが、よく考えれば、パスを出さなくなっただのも、シュートを打たなくなっただのもエリだけなのかもしれないのだ。

その瞬間隼人には、エリと初めて会った日から感じていた違和感の正体が見えた気がした。

神谷エリは、神谷エリであって神谷エリではないような、そんな感じがしていた。美優にきつく当たっているエリも、知香や靖子と話しているエリも、授業中に寝ているエリでさえも、エリではないような気がしていた。神谷エリは、神谷エリをプレーすることをやめてしまったのかもしれない。

自分自身をプレイすることをやめた少女は、これからどうなるのだろう。肉体だけが残り、誰も操縦席に座っていない少女は、あまりに呆気なくこの世界から消え去ってしまうんじゃないか。そんな絶望感を感じ、隼人は無意識のうちに拳を握りしめていた。

エリ

6月18日。

湿った空気が窓から室内に吹き込む。身体中にまとわりつくような不快感に、エリは顔を顰める。

エリは、この季節が大嫌いだ。もうすぐ梅雨に入り、雨ばかり降る。雨が降ると、いつも以上にイライラするのだ。そして、梅雨を越えても次は夏がやってくる。これからやってくる3、4・カ月は、エリにとって最も苛立つ季節だった。

「知香。タバコある？」

「あるよお。ほい」

知香にタバコを貰い、火を点ける。窓の外に向けて煙を吐き出すと、煙はどんよりと曇った灰色の空に向かって旅立った。この空を見ているだけで、エリの気分は、さらに悪くなった。

エリがタバコの煙をぼんやりと見つめていると、知香と靖子の会話が耳に入る。

「今日暇つしょ？」

「勝手に暇とか決めんなよ」

「じゃあなんかあんの？」

「ないし。あははははははは」

「あはははははは。ないんかい！じゃあマルキュー行こうよお」

「いいね！いいいこお」

2人のバカ丸出しの耳障りな喋り声が、エリの感情を刺激する。その感情を何とか落ち着けようと、大きくタバコを吸い込むと、心が平静を取り戻すのを感じることが出来た。そして、今にも爆発しそうな感情を抑えることに成功すると、エリも今日は渋谷に行くつもりだったので、2人と一緒に行くことにする。

「あたしも行く」

「いいよお。んじゃ3人でいこお」

知香はエリの声にすぐに反応した。おそらく2人も、エリが天候や季節によって機嫌が悪くなることを知っているのだろう。

「エリちゃん」

そこに、トタトタと足音を響かせながら美優がやって来る。その両手には、大量のパンが抱え込まれていた。

「遅い」

「ごめんね。並んでたから」

エリがそう言うと、美優はまた得意の泣きそう顔で謝る。

「もういいから早くちょうだい」

「うん」

机に置かれた大量のパンを、3人はあつという間に取り去り食べ始める。甘いパンはもちろん全部知香。靖子はそんな知香に、「あんなアンパンマンより甘党だね」と、全然面白くないことを言いながら爆笑していた。

エリはそんな下らないバカ話には加わず、ピザパンを頬張る。冷たいピザパンは、おいしくなかった。

冷たく、ケチャップの味しかないピザパンを黙々と食べていたエリは、ふと視線を感じる。その視線のほうを見ると、そこには美優が立っていた。美優は立ったまま、エリがパンを食べる姿を見つめていた。

「…何？」

「ううん。何にもない」

「じゃあ見ないで」

「ああ…。ごめんね」

美優の、「ごめんね」を聞いた瞬間、エリは美優が再び泣きそう顔になるのを察知した。エリは、そんな美優にうんざりしながら、確保してあったツナサンドを差し出す。

「あげる。学校終わったら渋谷行くけど行く？」

「渋谷？うん！行く！」

美優は今の今までこれ見よがしに見せつけていた泣きそう顔を、瞬時に輝かせ大きく頷く。そして、エリが差し出したツナサンドにも頭を下げ、両手で恭しく受け取った。

「門限はいいの？」

「大丈夫。最近はずっと遅くなっても理由言えば許してくれるから。それに、エリちゃんと一緒だからお母さんも安心だと思うし」

「そ。じゃあいいけど」

美優の親にまで信頼されている理由が、エリには全くわからなかったが、美優のこの屈託のない笑顔が、こんなにも昔と変わらない理由のほうも、もっとわからなかった。

学校が終わると、4人で渋谷に繰り出し、化粧品や服などを買い歩く。その後は、いつも通り靖子が歩き疲れたと言い出し、全員でファミレスで休憩することになった。荷物は全て美優が持っているの、他の3人はただ歩くだけなのにすぐ疲れたと言いつつはどうかと思うが、エリも歩くのがめんどくさかったので、いつものように従うことにした。そして、ファミレスに入店して、ドリンクバーを注文した瞬間、ここで最低でも2時間は過ごすことが決まった。靖子と知香は、ドリンクを取りに行き、席に着いた瞬間から、買ってきた服のお披露目を開始する。ろくにドリンクも飲まず、休憩に入っただけのファミレスで、2人が一息つく様子は全くなかった。

「ねえねえ。これマジ可愛くない？」

「可愛い！超可愛いよ。靖子に絶対似合うっしょ」

「知香のその服もチョー可愛いじゃん」

そんな風に、お互いを褒め合う2人がエリには理解出来なかった。エリからしてみたら、可愛いコンセプトで作られた服が可愛いのは当たり前で、後はそれを着る人間の問題なのだ。それなりの容姿を持つ靖子と知香が着れば、服もそれなりに可愛い。だが、その服を美優が着れば、通りすぎる男たちが振り返るのは間違いないだろう。どんなに繕っても、結局はそういうことなのだ、エリは思っ

た。

2人の褒め合いはその後も延々と続き、拳句の果てにはお互いの彼の褒め合いまで始める始末だった。

「知香の彼氏って毎日メールくれるしマメでいいよね。うちの彼氏なんてうちがメールしないと絶対してこないかね」

「けど靖子の彼氏カッコいいからよくね？」

「まあねえ」

「まあねえ、じゃねえよ！」

「あはははははは」

2人は爆笑し続けるが、何が面白いのだろうか。どっちの彼氏も、エリにとっては同じに見えていた。どっちの彼氏もパツとしない。それだけだった。

やがて2人も、自分たちだけで盛り上がっていることに気付いたよ
うで、慌ててエリに話を振ってくる。

「エリは彼氏とか作んないの？」

「エリが彼女だったら、チョー自慢じゃない？」

「わかるう。うちが彼氏だったら絶対自慢しまくるもん」

2人でエリを持ち上げようとしているのが手に取るようにわかって
しまう。それほど2人のお世辞は下手くそで、呆れるしかない。エ
リは2人と褒め合いなどする気などなかったし、それ以前に、この
2人の褒めるところなどないと思っていた。

「彼氏なんか金にならないからいらない。鬱陶しいだけだし」

「ふん。エリだったら百発百中で落とせるのになあ」

知香はそんなエリの態度に気付いているのかいないのか、その後も
何とか話を広げようとするが、エリがもう話に乗ってこないのを見
て、矛先を変える。

「みいは彼氏いないの？…いないか」

だが、変えた相手が美優だった為、早々に話が終わってしまう。そ
れを見ていたエリは、暇つぶしに美優を困らせれば面白いと考え、
言う。

「みいは彼氏いるよ」

「ええ！マジ！？だれだれ？」

案の定、知香と靖子は身を乗り出して美優の回答待ちをする。だが、当の美優はキョトンとしたままエリの顔を眺めているだけだった。

「誰だよ！早く言いなよ！」

「ほらほら！早く！」

知香と靖子はそんな美優に業を煮やし、取り調べのような追及を始める。

「彼氏なんていないよ」

美優は困ったような顔のままで、ようやくそう答えた。その困ったような顔は、次のエリの一言で一変することになる。

「晃太は？」

美優の顔が、いや、全身が真っ赤に染まる。美優は真っ赤になったまま何度も首を横に振り、必死に否定する。

「大村君は彼氏なんかじゃないよ」

「晃太？大村？誰？」

「知らねえ」

知香と靖子は顔を見合わせ、お互いがその名前に聞き覚えがないことを確認した後、エリのほうを見る。

「大村晃太。中学の同級生でみいの初恋の人。てかまだ告ってないの？」

「告白なんて…出来ないよ。恥ずかしいもん」

美優の顔はゆで蛸状態だった。それを見た靖子は、ニヤニヤとしながらさらに追い打ちを掛ける。

「向こうはどう思ってるの？」

「わかんない」

「いつから好きなの？」

「中学3年生の時から、かな」

真っ赤になったままでも、靖子の質問に真剣に答える美優。こんな時でも真面目に相手と向き合う美優が可笑しく、エリは久しぶりに

笑った。

「ええ〜！じゃあもう3年くらい片思いってこと？まだチューもしてないの？」

「チューなんて…」

美優は先ほどよりも強く首を振る。今にも首が飛んで行ってしまいそうなほど、激しかった。そんな美優を見て、知香と靖子はまた爆笑していた。エリも久しぶりに楽しくなり、このままもつと美優を追い込んでやろうと考えていた時、外から爆音を轟かせるバイクの音が聞こえてきた。その音を聞いた瞬間に、エリは誰が来たのかを把握する。把握したのと同時に、楽しかった気分が急速に萎えていくのを感じていた。

3台のバイク音が止むと、すぐに3人の、いかにも頭の悪そうなガキが入って来た。その3人のことを知っていた。暴走族に入って、毎日アホみたいに走り回っている奴らだ。知香と靖子に匹敵するほどの、下手をしたら2人を超えるくらいのバカトリオだった。騒ぎながら席を探していた3人がエリに気付く。

「エリじゃあん」

長髪の宏樹が、店内に響き渡るほどの大声でエリの名を呼び、近付いてくる。まるで親友のような態度に、エリは吐き気を催すような不快感を感じ、今すぐにでもこの場から逃げ出したかった。

「久しぶり」

それでもここでエリが無視すれば、空気の読めない5人の暴走がさらに面倒な状況を作り出しそうだった為、仕方なくエリは3人と向き合った。

「誰？」

知香は、すぐに小声で尋ねてくる。エリは全く紹介したくなかったが、3人を紹介することにした。

「宏樹と雄介と翼」

そして、3人にも一応紹介する。

「知香と靖子と美優。同高の友達」

「よろしくです」

知香と靖子は早くも3人と話し始める。バカはバカと合うのだろう。エリが何も言わなくても、次々と話題を提供し合い、盛り上がり続けていた。

そんな中、宏樹が美優をずっと見ていることに、エリは気付いていた。気付いていたが、見て見ぬふりをし、これ以上面倒なことが起きないよう、（何も言うなよ）と心の中で念じ続けていた。だが、そんなエリの願いも虚しく、空気の読めない宏樹は、小声でエリに言う。

「あの子超可愛いじゃん。彼氏いんの？」

エリは内心ウンザリしながら、その気持ちを隠そうともせず、かなり不愛想に答える。

「いる」

「なんだよ。じゃあ…ヤツていい？」

そんなエリの態度に宏樹が気付くわけもなく、とんでもないことを何でもないことのように言う。エリも、宏樹がこれほどぶっ飛んだバカだとは予想外だった為、思わず宏樹の顔を見つめてしまった。

「はあ？あんとヤルわけないじゃん」

「別に許可もらってヤルわけじゃねえから大丈夫だよ」

大丈夫の意味が全くわからず、エリは呆れ返る。

「そんならもつとダメ」

「何だよお。たぶん雄介と翼も賛成だつて」

「ダメ」

「エリがダチ庇うなんてらしくねえつて」

「庇ってるわけじゃない。あたしがいいつて言つて、ホントにヤツたら気分悪い」

「いいじゃんかよお」

あまりのしつこさに、ついにエリの怒りは沸点を超える。

「ダメつて言つてんじゃん！殺すよ？」

突然エリが大声を上げた為、6人はもちろん、店内にいる全ての人

たちが驚いたようにエリのほうを見ていた。

「わかったよ。ごめん」

宏樹はようやく諦め、知香や靖子たちとの会話に戻っていく。

エリは、自分があればほど激昂してしまった理由が、美優に関することだったという事実嫌悪を感じてしまう。普段から辛く当たり、大嫌いなはずの美優を庇っている自分に、どうしようもなく苛立った。

「じゃあみんなでカラオケ行きますかあ！」

しばらく何の意味もない話題で盛り上がり続けていた5人が、初めて会ったとは思えないような親密さで店を出ていく。今にも手を握り合いそうなほど寄り添い合う5人に、エリは思わず溜め息を漏らしていた。美優の姿を探すと、ほとんど会話に参加していなかったはずの美優も、5人の後ろに付いて行こうとしていた。その姿に、エリはなぜか猛烈な焦りを感じ、慌てて美優を呼び止める。

「みいは帰りな。あたしの荷物とか全部みいの家に置いて。今度取りに行くから」

「え？私もカラオケ…」

「いいから帰りな。わかった？」

エリの強い口調に、美優は寂しそうな顔をしながらも頷く。

「…うん。わかった」

「じゃあね」

そう言い、エリは5人の後を追おうと歩き出す。その時、エリの背中に「エリちゃん」と美優が言う声が聞こえた。

「今日は誘ってくれてありがとう。嬉しかった。じゃあ、ばいばい」振り返ると、美優は心底嬉しそうな表情でエリに微笑んでいた。駅に向かって歩き出す美優の後ろ姿を、エリはしばらく見つめ続けていた。

エリを呼ぶ靖子の声が聞こえ、エリも美優に背を向け、カラオケ屋へと歩き出す。2人の背中が向き合ったのは、ファミレスに入店してから2時間後のことだった。

エリ

7月4日。

シトシトと降り続ける雨が、窓を濡らす。窓から見える景色は、ここ数日ずっと灰色だった。エリの心は、降り落ちる雨粒と同じように、落下を続けていた。

梅雨の長雨で渋谷に繰り出すのも嫌になり、1週間以上、知香と靖子の家を行ったり来たりで過ごしていた。

そんなエリの気分とは対称的に、生徒たちのテンションは高かった。なぜなら今日で期末テストは終了。もう夏休み気分です。学校に来ている生徒が大半だったからだ。そういう周りのテンションも、エリをイライラさせる原因の一つであった。

そのような負の連鎖は続くもので、今日は知香と靖子に用事があり、泊まることが出来ない。2人とも彼氏と“お泊まり”らしい。そんなところに無理矢理泊まりに行つて、見たくもないものを見せられたら、本当に人殺しをしかねないので、仕方なく諦めることにしたのだ。

雨の中、渋谷の街を歩く気分ではないし、どうしようかと朝から考えていると、美優が音も立てずにやってきて、「エリちゃん」と話し掛けてきた。なぜいつも機嫌の悪い時にはかり話し掛けてくるのだろうか。美優はエリをイラつかせる才能だけは抜群で、その苛立ちを隠そうともせず、エリは答える。

「何??」

「この前買った服とか、まだ家に置いてあるけどいいの?」

美優の用件は実に下らなかつた。

「そのまま置いといて。あたしが帰ってないの知ってるでしょ? またいる時に取り行くから」

エリは強い口調で言い、その直後に気付く。美優がまた、あの顔に

なるということに。

「ごめんね。じゃあいる時に言っただけ」

気付いた時にはもう手遅れで、美優は得意の泣きそう顔でしょんぼりしてしまふ。エリはその顔を見て溜め息が漏れる。どうしてこうも毎回、同じようなやり取りばかり繰り返さなければならぬのか、苛立ちを通り越して、呆れるしかない。

「そうして。使う時に言うから」

「うん。わかった」

そう言い、席に戻っていった美優は、体全体から悲しみのオーラを全開に放出していた。その姿を呆れながら見ていたエリは、美優の家に泊まるうかと思いつく。ここ何年も美優の家に行っていないので、久しぶりに行ってみようと思いつき、しょんぼりと席に座っている美優をもう一度呼び寄せ、聞く。

「ねえ。今日みいの家に泊めてよ」

すると、美優の泣きそう顔が、みるみる笑顔になり、輝き出す。

「うん！いいよ！エリちゃんとお泊まりなんて久しぶりだなあ」

「じゃあ行くから」

「わかった。じゃあ、一緒に帰る？」

「いいけど」

「やった！早く授業終わらないかなあ」

さっきまでの悲しみオーラはどこへやら。再び自分の席に戻って行った美優は体中から幸せオーラを全開に放出していた。その美優の姿を、エリはなぜか見ることが出来ずに目を逸らす。先ほどまで見ることが出来ていたはずなのに、突然見ることが出来なくなってしまう。

美優は、エリの一つ一つの言葉に、様々な感情を見せる。喜び、悲しみ、幸福、絶望。

美優には自分が必要なのだ。その気持ちを知らながら、都合のいいように利用している自分に、エリは激しい嫌悪感を感じた。

窓の外を見る。外は相変わらず雨が降っており、見上げると、空は

どんよりと濁って、遙か彼方まで灰色に染まっていた。まるで、エ
リの心の中を見ているようであった。

隼人

今日は何かが変だ。隼人は朝、教室に入った時から違和感を感じていた。この学校に赴任してから、違和感ばかり感じている。

結局今回も、その違和感の正体を捕まえることが出来ないまま、昼休みまでできてしまった。いつもなら昼休みは職員室で過ごすのだが、今日はあえて教室に立ち寄ることにした。対して意味はない行動だったが、何となく立ち寄ってみた教室で、その違和感の正体を見つけることが出来た。

佐藤美優だ。いつもは下を向いて陰気な印象を受けることのほうが多いが、今日は、弁当を食べながら左右にユラユラと揺れていた。正確に言うと、リズムを取っているような感じだ。音楽に乗っているのかと思っただが、音楽など掛かっていないし、イヤフォンの類の物も、耳にはなかった。ただ単に機嫌がいいだけだろうか。耳を澄ませば、鼻歌まで聞こえてきそうだった。

隼人は、そんな美優の様子が異常に気になり、目が離せなくなってしまう。このままでは職員室に戻れない為、直接聞いてみようと思っただが、美優の横の席に座る。すると、美優も隼人に気付き、首を傾げながら言う。

「あ、楨村先生。どうしたんですか？」

実の所、座ってみたはいいものの、何をどう聞けばいいのか迷っていた隼人は、美優が先に言葉を掛けてきてくれた為、聞きたいことが聞きやすくなり、ホツとしていた。

「今日は、佐藤の機嫌がいいような気がしてな」

「機嫌？私っていつも機嫌悪そうですか？」

美優は、隼人の言葉に驚いたように口を開ける。自分の機嫌について聞かれるなんて予想していなかったのだろう。

「いや、機嫌というか、いつもより元気な気がするって言ったほう

「がいのかな」

隼人はもつとわかりやすく言い換えたつもりだったが、美優のほうは隼人の言いたいことが未だによくわからないようで、再び首を傾げる。

「何かいいことでもあったのか？」

仕方なく隼人は、もつとストレートに聞いてみることにした。すると美優は、開いていた口をニンマリと横に広げ、満面の笑みになる。「はい！今日、エリちゃんが家に泊まりに来るんです。久しぶりにエリちゃんとお泊まりだから嬉しくて。早く授業終わらないかなあつてずつと思ってるんです」

美優は心底嬉しそうな顔で話していた。

「そうか。それは楽しそうだな」

隼人は、こんなにも嬉しそうにしている美優を見ているうちに、美優とエリの関係がどういう関係なのか、さらに知りたくなる。

「佐藤と神谷は仲が良いな。いつから仲良しになったんだ？」

「初めて会ったのは小学校6年生の時です。それまでも名前は知ってたけど、同じクラスになったのは初めてで」

美優は楽しそうに隼人に話す。大好きな彼氏との馴れ初めを話しているように見えるほどだった。

「席が前後だったから、よろしくねって声を掛けたら、エリちゃんもよろしくって言うてくれて。私がドジばかりで、色々忘れ物するんです。その度に貸してくれたり、私が休むと毎回ノートも写しといてくれたりしたんです。それから今年まで7年連続で同じクラスなんですよ」

「そうだったのか。正直今の2人からは想像できないな」

隼人は思わず本音を漏らしてしまう。それほど今の2人とはかけ離れた関係に思えた。

「そうですか？…槇村先生は、エリちゃんが悪い子だと思いますか？」

突然美優の声小さくなり、大切なことを伝える時のような真剣さ

を帯びる。隼人は美優の質問に対する返答を、束の間悩むが、最後まで本音を貫こうと決め、答える。

「まあ、優等生ではないな」

「槇村先生」

すると美優は、さらに深刻そうな声で隼人の名前を呼ぶ。その声音に、隼人は不穏なものを感じ、身構える。

「なんだ？」

「エリちゃん、勘違いしてるんです」

「勘違い？」

あまりに深刻そうな声だったので、隼人は自分が理解出来ないのがいけないのだと思い、必死で意味を考える。だが、いくら考えてもその意味はわからなかった。美優のほうは相変わらず、かなり真剣な表情のまま、隼人のことを見つめていた。隼人は考えることを諦め、美優に聞くことにする。

「どんな勘違いだ？」

「いっぱい」

「いっぱい？」

「はい。お母さんに愛されてないって思ってる所とか、自分は居ても居なくても一緒だと思ってる所とか。たぶん、他にもいっぱい」「神谷が自分でそう言ったのか？」

美優は首を横に振る。

「エリちゃんって強いから我慢してるんです。そういうの誰にも言わないで一人で耐えてるんです。だけど、私にはわかるんです。エリちゃんの悲しみが…」

最後の言葉は消え入るようであった。隼人は突然の話に、うまく言葉が出てこない。

「槇村先生。これは内緒ですよ？エリちゃんにまた怒られちゃうから」

「ああ…わかった」

隼人はそれだけ言うのが精一杯だった。

「じゃあ、次は移動教室だから行きます」

美優は教科書を持って教室を出ていく。残された隼人は、美優の言った言葉をもう一度思い出す。エリの普段の態度からは、想像出来ない話だった。エリが母親を愛していないと言うのならば、納得出来る気がする。同様に、エリが他の人間を必要としないと言うのならば、納得出来る。

隼人には、どの糸が本物の糸なのか、未だに見つけ出すことが出来ていなかった。ただ、美優だけは、本物の糸しか見えていないような、そんな気がした。本物の糸を必死に引っ張っているのは、美優だけなのかもしれない。

エリの机を見る。その横にはエリのカバンが掛けられていた。そのカバンには、何一つ付いていなかった。

エリ

午後になり雨はさらに強さを増した。それは、授業が終わり、帰る時間になっても変わらなかった。

エリは、美優と帰る為の下駄箱で美優を待っていた。美優は土砂降りの雨なのに傘を教室に忘れて取りに戻っている。教室を出る数秒前まで、「雨、全然止まないね」と楽しそうに話していたはずなのに、なぜ傘を忘れるのか、そして、なぜこの土砂降りの雨を見て楽しそうなのか、エリには意味がわからなかった。

「エリちゃんお待たせ。ごめんね」

傘を取りに行くだけでこれほど時間の掛かる美優に、今日3度目の嫌気が差した頃、ようやく美優がやってきた。トタトタと走ってくる美優を見たエリは、もしかしたらこれが美優の全速なのかもしれないと、本気で思ってしまった。

「早く帰ろ」

エリは、美優が横に並ぶのを待たず、雨の中に歩を進めた。

美優

(歩くの速いなあ)

美優はそんなことを考えながら必死にエリについていく。エリが家に泊まってくくれるのは、この雨の中で何時間も過ごしたくないからだろう。そう考えると、美優は両手を合わせて上空を覆う雨雲に感謝したくなってしまふ。

その喜びを噛み締めながらも、歩き始めて10分以上経った今まで、一言も会話を交わしていないことに焦りを感じていた。

美優は、何でもいいから話さなければいけないと必死に考える。

「最悪」

「え？」

美優が頭をフル回転させて話題を探していると、突然エリの声がした。

「水溜まり」

一瞬何のことかわからなかったが、前方を見てエリの言った言葉の意味を知る。

「本当だ。大きい水溜まり」

2人の前方に、道幅いっぱい広がった水溜まりがあったのだ。通るには水溜まりの中を歩かなければいけない。

しばらく立ち止まっていたエリだったが、溜め息を吐いて水溜まりの中に歩を進める。それを見た美優も、慌てて後に続いた。

1歩目で靴の中に水の入る感覚があり、その次の瞬間には、美優の靴下は水を吸い始めた。かなりの不快感の中、何とか水溜まりを抜けた2人だったが、靴の中は濡れてグチャグチャになってしまっていた。

エリは顔を顰めて、一層不機嫌そうな顔になりながら歩き続けているが、美優は足元の不快感など忘れ、昔あったある出来事を思い出

していた。

「エリちゃん」

「何？」

やはりエリはかなり不機嫌な様子だったが、美優は構わず話し続ける。

「6年生の時にさ、私とエリちゃんが今日みたいと一緒に帰って、私たちの横をトラックが走り抜けた時に水溜まりの水を跳ね上げてさ、私だけびしょ濡れになっちゃったの覚えてる？エリちゃんは私の陰にいて、私だけびしょ濡れになっちゃったの。あの時、エリちゃんが走り去るトラックに向かって、ふざけるな！って怒ってくれて、しかもエリちゃんの家で制服も乾かしてくれて、お風呂も入らせてくれたよね。私、びしょ濡れになったのにすごい幸せだったの覚えてるなあ」

美優はその時のことを思い出しながらエリに説明しているつもりだったが、いつの間にか本当に幸せな気分になっていた。笑顔でエリの顔を見ると、エリは下を向いたままスタスタ歩いて行ってしまふ。(違う話のほうがよかったかな？)

エリの表情を見た美優が、そんなことを考えながら歩き続けていると、もうすぐ美優の家に着くという頃になってようやく、エリが言葉を発する。

「覚えてない」

エリの言葉はその一言だけであった。そして、その一言が嘘であると、美優は知っていた。

エリ

美優の家は、前に来た時と何も変わっていないかった。外観的にもだが、内装もほとんど一緒だった。

好子もエリのことを覚えており、昔と変わらぬ優しい笑顔でエリを迎えてくれた。好子は昔から、美優以上にマイペースだったような気がするが、今も昔のままの好子だった。美優もたぶんこういう母親になるのだろうと、容易に想像出来るくらいに、2人はよく似ていた。

美優の家でご飯を食べさせてもらい、お風呂にも入らせてもらったエリは、美優の部屋に敷いてもらった布団の上で、なぜ美優の家族はこんなにも変わらないのか考えていた。もちろん答えがわかるはずがないこともわかっていたが、それでも考えなくなるくらい不思議でしかなかった。

人は誰しも少なからず変わる。思春期の子供がいれば尚更で、下手をすれば家族全員が大きく変わるだろう。それなのに、美優の家族だけはまるで変わっていないかった。それが羨ましいことなのか、それともつまらないことなのか、エリには判断がつかなかった。

そうやってボーっとしていると扉が開き、お風呂から出た美優が部屋に入ってきた。美優はお盆にジューズを載せて、ゆっくりゆっくり歩いてくる。扉から机までの5歩の道のりが永遠に感じられる。

ジューズのお盆を持って歩くだけなのにどうしてこんなに遅いのか。扉はどうやって開けたのか。美優に関する疑問は、毎日泉のように湧き上がるが、その答えが見つかることは稀だった。そしてエリは、そういう疑問が湧き上がってくる度に呆れてしまう。

やっとお盆を机に置いた美優は、ホツとした表情を見せる。

「オレンジジューズだよ。これおいしいんだ」

そう言いながら、美優は早速ジューズに口をつける。おいしそうに

ジュースを飲む美優は、可愛かった。普段から一緒にいるエリにはあまりわからなかったが、客観的に見れば美優は可愛らしく、男子生徒から密かな人気を集める理由もわかる気がした。

ようやく一つだけ、美優に関する疑問が解けた気がしたエリだったが、すぐさま次なる疑問が浮かび上がり、その疑問も解いておこうと試みることにする。

「そつえば晃太とは連絡取ってるの？」

「え？お、大村君？」

美優はジュースを落としそうになるくらい動揺をする。コントのような滑稽な行動に、エリは笑いを堪えるのに必死だった。笑いを堪えながらさらに質問を重ねる。

「最近晃太の話聞かないけど、まだ付き合ってるの？」

「っ、付き合ってるんかないよ」

「じゃあデートは？」

「で、デート？デートもしてない」

恥ずかしそうに下を向いて、モゴモゴと答える美優。今時こんな女がいることが、エリには驚きだった。

「デート誘えばいいのに」

「ど、どうやって？」

「遊びたいとか、デートしたいって言えばいいじゃん」

「い、言えないよそんなこと」

「なんで？」

「恥ずかしいもん」

美優は、エリと話しているはずなのに、まるで晃太と話しているかのように真っ赤になっていた。エリは、一応泊めてもらうお礼にでもと、少しだけアドバイスをすることにした。

「じゃあメールで送れば？デートとか言わなくても、映画観たい。とかさ」

「映画？」

顔を真っ赤にして下を向いていた美優が、真剣な表情でエリのアド

バイスに聞き入る。エリはオレンジジュースを一口飲み、続ける。オレンジジュースは美優の言った通り、非常においしかった。

「そう。観たい映画があるんだけど。みたいな感じでメールすれば？そしたら、じゃあ一緒に観にいこうってなるかもよ？」

「…うまくいかな？」

「さあ？夏休みにでも送ってみな」

「うん。何とか頑張ってみる。ありがとう。エリちゃん」

何とか頑張るもくそも、ただ文章を作って送信ボタンを押すだけだろう、と思うのだが、たぶん美優にとっては勇気をかき集めなければ送ることが出来ないのだろう。

それから2人とも布団に入り、しばらくは美優が昔話を1人で楽しそうに喋っていた。美優と喋る話は、ほとんどが雑用か、小学生の時の話だった。その間にあっちははずの時間が、すっぽりと抜け落ちてしまったかのように。

エリが適当な相槌を打ちながら、今にも眠りそうになった頃、美優は急に何かを思い出したようで、おもむろに起き上がり、カバンから1冊の文庫本を取り出してきた。その文庫本の間から取り出した槩に、エリは見覚えがあった。

それは、小学6年生の時に、小学校最後の思い出にと、エリが美優にプレゼントした槩だった。桜の花をスケッチして、美優にプレゼントしたのだ。まさかまだ持っているとは思わなかった。

「エリちゃんがくれた槩。ちょっとボロボロになっちゃったけど、私の宝物なんだ」

エリには、こんな下らない物を宝物と言える美優の気持ちが変わらなかった。そして、そんな物を宝物と言える美優に、無性に腹が立った。

「覚えてない」

そう言って、エリは布団に潜り込む。

「おやすみ。エリちゃん」

しばらくして、美優がその言葉と共に、布団に潜る音が聞こえてき

た。エリには、美優が今どんな顔をしているのか、ハッキリと見え
ていた。

エリ

7月23日。

蝉は狂ったように鳴き続け、空はバカみたいに晴れ続ける。エリが四季の中で最も嫌いな夏がやってきた。朝から夜明けまで、少しも涼しくなることはなく、東京のジャングルは様々な場所に揺らぎを見せる。それが塵気楼なのか、目の錯覚なのか、それとも死へのカウントダウンなのか、それは倒れてみて初めてわかるのだ。そして、倒れたら最後、死へのカウントダウンを止めてくれる心優しき人間など、ここ東京にはいなかった。

もちろん学校の暑さも尋常ではなく、生徒も教師も全員汗だくで、毎日授業をこなしていた。

そんな監獄のような学校から今日で解放される。1学期は今日で終了し、明日からは待ちに待った夏休みだ。生徒たちはもちろんだが、教師もみんなどこか嬉しそうで、浮き足立っているのがよくわかった。

だが、苦痛からの解放には最後の試練というものが付き物で、学校に携わる全ての人間が、校長の挨拶という試練に立ち向かっていた。エリは、自分が校長になったら、“校長の長話は禁止”という校則を真っ先に作るう、などという下らないことを考えながら、地獄の試練に耐えていた。

校長の長い挨拶がやっと終わっても、試練はまだ続く。次は拷問のような声を撒き散らす、猿渡の話だった。猿渡は鼻息荒く、夏休みの諸注意を話している。高校生に向かって、知らない人にはついて行かないこと、などど大きな声で喋る猿渡に、生徒全員の冷たい視線が突き刺さる。蒸し風呂のような体育館で、猿渡の体だけは涼しいんじゃないかと羨ましくなるほどの冷視線だった。だが、猿よりアホな猿渡に、空気を読むなどという芸当が出来るはずもなく、猿

渡の諸注意は、その後10分以上続いた。忍耐力を養うという意味では、ある意味最も効果的かつ効率的な方法なのかもしれない。

そんな試練に打ち勝ち、ようやく長い終業式は終わった。すぐに教室に戻ると、早速知香と靖子が寄ってきた。

「ツルリンの話聞いたあ？」

「聞いたよ。知らない人にはついて行っちゃダメなんでしょ？」

エリが猿渡の言ったことをそのままなぞっただけで、知香と靖子は爆笑だった。2人のツボは単純明快。自分の思っていたことを言われれば笑う。自分が予想もしていなかったことを言われても笑う。

つまり、何でも笑う。そんな幸せな2人は、エリがいつの間にか離れていっても気付くことなく笑い続けていた。

そんな風に全員が思い思いに校長と猿渡の悪口を喋っていると、隼人が教室に入ってくる。その瞬間、生徒全員が信じられないスピードで席に着いた。隼人はいつものように全員を席に着かせようと準備をしてきていたのか、見たこともないスピードで席に着いた生徒たちを見て、ちょっと驚いたようだった。が、すぐに話し始める。

「今日で1学期は終了だけど、みんなは3年生だから進路の話や補修で夏休みも学校に来ることが多いと思う。これから先は君たちにとって本当に大事な時期だから、あんまりハメを外しすぎないように」

「はい」

生徒たちは隼人の話を早く終わらせようと全員素直だった。隼人は猿渡とは違い、空気を読むことは出来るようで、これで話を終えた。一応猿よりは利口らしい。

「じゃあ成績表を配るから、貰った人から帰っていいぞ」

その一言で隼人の前には長蛇の列が出来た。どうせ名簿順にしか貰えないのに、我先にと隼人の前に並ぶ生徒たちに、エリは自分の席から冷やかな視線を送っていた。

エリが何も考えずに座っていると、いつの間にか美優が横にやってきていた。それに気付き見上げると、美優は笑顔で話し掛けてくる。

「エリちゃん」

「何？」

「夏休みにまた遊びに来てね？エリちゃんがお泊まりしてくれてすつごい楽しかったからまた来て？」

「行けたらね」

「うん！」

エリは全く行くつもりはなかったが、断るとまた例の顔で謝ってくるので一応合わせておいた。それに気付かない美優は嬉しそうに去っていく。美優の家族に会うのは、3人の美優に囲まれているような感覚に陥る為、非常に疲れるのだ。だからあまり会いたくなかった。

「神谷」

そうこうしているうちにエリの順番が来て隼人に呼ばれる。さつさと隼人から成績表を貰って帰ろうとするエリだったが、成績表を取ろうとすると、隼人が押さえていて取ることが出来なかった。

「何？」

「待ってるからしつかり面談に来いよ？」

「わかったって。早くちょうだい」

「よし！信じてるからな」

そう言つて隼人は成績表を渡してくれた。夏休み中に隼人と面談をすることになっていたので、エリはすっかり忘れていた。隼人があまりにしつこいので仕方なく了承していたのだ。夏休みに学校に来るなんて考えられない。脱獄犯が監獄に自ら戻るようなものだ。それに、隼人は母親も一緒に、と言っていた。

エリは他の生徒たちが自分たちの成績に一喜一憂しているのを背中に聞きながら、教室を抜け出す。

（あいつと一緒になんてあり得ない）

全ての教室から同じような騒がしい声が聞こえる。エリはいつの間にか早足になっていた。

（あいつと一緒になんて…）

下駄箱を抜けると、次は狂った蝉が鳴き出す。

（あり得ない！）

エリは走り出していた。逃げ出すように。

第3章 美優

7月30日。

美優はベッドの上で携帯とにらめっこをしていた。勝敗が着くことは一生ないにらめっこだった。

携帯の液晶画面にはメールの編集画面。その文面は、“私、観たい映画があるんだ。大村君は映画とかって観ないのかな？”だ。

エリのアドバイスを受けてから、美優は毎日のようにこのメールを送ろうとしていた。だが、あとは送信ボタンを押すだけ、という状況になるとしても指が動かなくなってしまうのだった。

「うーん…これならストレートに誘ったほうがいいかなあ？」

そう独り言を言いながら新たな文面を作成する。

“観たい映画があるんだけど2人で一緒にどうかかな？”

「2人で一緒になんて無理無理。そんなの送れないよ」

削除。

美優は自分で作ったメールに赤面してしまう。

「もつと気楽な感じで送ったほうがいいかな？」

“映画でも観に行こうよ。面白い映画があるんだ”

「軽いかなあ？もうちょつと礼儀正しくかなあ？」

“映画でもご一緒しませんか？”

“…他人行儀すぎるかな？”

“レッツ・ゴー。ムービー！”

「……」

削除。削除。削除。

「ダメだあ！どうしよう？」

美優は、メールを作成しては削除するという行為を繰り返している。

気付くとメールを作成し始めてから、もう2時間近く経過していた。

「やっぱり最初のにしよう」

そう言つて、一番最初に作成したメールをもう一度作成する。

“面白そうな映画があるんだ。大村君は映画とか観ないの？”

「あれ？こんななんだつたつけ？なんか違う気がする。まあいつか。

よし！……えい！」

最初のメールとは明らかに違うメールを、気合とともに送信する。

画面に送信完了の文字が出ると、また赤面してしまった。

「…送っちゃった」

呆然とベッドの上に寝転がる。あれほど悩んでいたメールも、送つてしまえば何ということもなかった。

「あれで伝わるかなあ？」

今頃になつて大したことを送っていないことに、美優は気付く。大したことを送っていないのだから、何ということはないに決まっているのだ。

メールの文面で悩んだ後は、晃太に自分の意思が伝わったかどうかで悩んでいると、美優の携帯が大きな音を立て鳴り響く。ベッドに寝転んでいた美優は飛び起き、すぐに携帯を取る。

「来た…」

送ったことよりも、返信がこんなにも早く来たことに、美優は動揺する。そして、次は受信したメールを開くかどうかで悩むことになった。

「…よし！」

しばらく悩んだ後、開くことを決意し、気合とともに恐る恐るメールを開くとそこには、“観るよ。美優ちゃんと一緒に観たいな…なんて思つたりして。”と書かれていた。

「…うそ？本当に誘われちゃった」

美優は驚きのあまりメールを何度も読み直す。そして、何度読み直しても文面が変わらないことを確認すると、またも赤面してしまつた。

「どうしよう？恥ずかしくなってきた。よし…寝よう」

美優は自分を落ち着けようと布団に潜り込む。だが、緊張と興奮で

全然眠気がやってこない。∴と思っていたが、3分後には夢の中へ旅立っていた。

エリ

8月10日。

今年の最高気温を観測。昨日も一昨日も、今年の最高気温を更新し続けていた。うだるような暑さが続き、毎年最高気温を更新し続けている日本は、今年も記録を更新しそうな勢いであった。

時間は夕方から夜に入る時間帯のはずなのに、気温は全く落ちない。そのあまりの暑さに、エリは涼しい場所を探してフラフラと歩いていた。歩いているのか走っているのかわからなくなるほどに、エリの身体中から汗が滴り落ちていた。

夏休みに入ってから、知香と靖子の家に日替わりで泊まったり、街で声を掛けてきた奴に寝る場所を提供してもらったりして過ごしてきたエリだったが、今日は知香も靖子もデートらしい。楽しいデート。幸せな時間。エリには無縁の世界だった。

仕方なく渋谷まで出てきたエリだったが、今日に限って誰も声を掛けてこないし、知り合いにも会わなかった。日陰に座っていても汗が噴き出すほどの暑さにさすがに参ってしまったエリは、ネットカフェに避難しようと歩き続ける。今日はこのままネットカフェで夜を明かそうか。などと考えていたエリだったが、その心の中は強い疎外感と孤独でいっぱいだった。

自分は今この時、この世界に存在しているのだろうか。存在していないから誰も声を掛けてこないんじゃないか。そんなバカげた考えが頭を過る。だが、バカげた考えだとわかってはいるはずなのに、エリの頭の中はそのバカげた考えに埋め尽されてしまう。

母は何をしているのだろうか。2年以上も自宅に帰っていないくても何も言っていない。もちろん家を出た当初は心配して何度も電話を掛けてきたが、今じゃメールもこなかった。

(あんな女の顔も見たくない)

知香と靖子は自分のことをどう思っているのだろうか。おそらく2人は自分のことを友達とは思っていないだろう。自分といたいわけじゃなく、自分のバックにいる不良集団を味方にしたいだけなのだ。(こっちこそあんなバカコンビと一緒になんていたくない)

気付くと、ネットカフェの前に立っていた。様々な想いを掻き消し、さっさと涼しい場所にいこうと店に入る。そして、店員が来るのを待つが、なぜか誰もいないし、誰もエリに気付かなかった。しばらくして急いでやってきた店員がエリを個室に案内してくれたが、席に座ったエリは信じられない出来事に呆然とし、またも強い疎外感と孤独を感じた。ネットカフェで店員が入店した客に気付かないなんて有り得るだろうか。普通は有り得ない。いくら渋谷でも、それは有り得ない。だが、そんな常識など消えてなくなってしまったかのように誰にも気付いてもらえなかった。自分はこの世に存在していないのだろうか。再び現れたバカげた考えを、エリは必死に消し去ろうとする。そして、エリは思い出す。エリがお泊りに来てくれて楽しかったと言っていた美優の存在を。美優なら喜んで泊めてくれるだろう。そう思ったエリは携帯を取り出し、美優の番号に掛ける。だが、なかなか電話は繋がらなかった。しばらく待ったが繋がらないのでエリは諦めて電話を切ろうとする。その時、電話が繋がる音がして、美優の声が聞こえてきた。

「もしもし。エリちゃん？」

エリは携帯を耳に戻し答える。

「そう」

「どうしたの？」

「今からみいの家、行っていい？」

「今から?...今からはちよつと」

エリは美優の予想外の答えに驚く。

「ダメなの？」

「ダメっていうか...今、出掛けるの」

「どこに？」

「映画」

「映画!？」

その言葉を聞いた瞬間に。自分が美優に与えたアドバイスを思い出す。

「…もしかして晃太と？」

「…うん」

「…そう。じゃあいい」

「あ! エリちゃ…」

エリは電話を切った。

自分のことを必要としていたはずの美優にまで断られてしまった。タイミングが悪かったただけだとわかってはいたが、怒りが込み上げてくる。

美優は大好きな彼とこれからも仲良く付き合っていくのだろう。そうならば美優にも自分は必要なくなる。そうなったら自分は本当にこの世界に必要な人間になってしまう。エリは何も考えることが出来なくなってしまった。気付くと、リダイヤルボタンを押していた。

「もしもし。エリちゃん? あのね…」

「10時に噴水公園の噴水前に来て」

エリは美優が何か言う前に話していた。

「うん。わかった。じゃあ10時に行くからお泊まりしていつてね?」

「…うん」

エリはそれだけ話すと電話を切る。エリに、美優の声は聞こえていなかった。聞こえていたのは、自分の中の何かが、一気に崩れていく音だけだった。

次に、エリは違う番号に電話を掛ける。電話に出た宏樹は、いつも通りの大声で答える。

「おう! エリどうしたあ?」

宏樹はクラブにいるのか、携帯の向こうから激しいビートを刻む音

が聞こえていた。

「今日の10時に噴水公園の噴水前に美優が1人で来る。それだけじゃあね」

エリは一方的に話すと宏樹の答えを待たずに電話を切った。さらに携帯の電源も切る。エリの心は、何も映っていない真っ暗な液晶画面の中へ落ちていった。

美優

美優は夢を見ているようだった。晃太とデートなんて夢としか思えない。美優は1日中、夢見心地のまま過ごしていた。その為、映画の内容なんて全く覚えていないし、晃太が何を話していたのかも、自分が何を話したかも定かではなかった。

「美優ちゃん」

「え？なに？」

夢のような時間の余韻に浸っていた美優は、晃太に呼ばれて我に返る。だが、次の言葉は聞こえてこなかった。美優は自分が聞き逃したのかと思い、慌てて晃太の方を見る。すると、晃太は真剣な眼差しで美優を見ていた。

「今日は楽しかった。…また遊んでくれるかな？」

「え？あ、…うん。こちらこそよろしくお願いします」

美優はすぐに視線を逸らし、軽いパニック状態で答える。まさか次のデートの約束まで出来るとは思ってもいなかった。

「よかった。じゃあまたメールするね」

「うん。…待つてる。じゃあ、ばいばい」

2人は手を振って別れる。晃太は何度もこちらを振り返っては手を振っていた。もちろん美優も。

今日はなんて幸せな1日だろうか。そんなことを考えながら公園への道歩く美優の顔は、ずっとニヤけていた。晃太とデートした後、エリが泊まりに来るのだ。美優にとっては世界一贅沢な1日になるはずであった。

そんな幸せな考えに浸りながら歩いていたら、約束の時間よりも1時間も早く待ち合わせ場所に到着してしまった。それでも待たせるよりはいいかと、美優は噴水前に座ることにした。

暗くなっても尚、真夏の暑さは残っていたが、噴水の前に座ってい

ると、少しだけ気温が下がったような気がした。

（今日はエリちゃんに何を話そうかなあ？あ！始めにお礼言わなきゃいけない。エリちゃんのアドバイスのおかげで、大村君とデート出来たんだから）

相変わらず美優の顔はニヤけたままで、端から見たらおそらく、いや、確実に公園に現れた変質者だった。もちろん美優にそんな自覚があるわけではないので、月明かりに照らされる怪しいニヤけ顔を保つたまま、1人エリの到着を待っていた。だが、エリを待っているはずの美優の所にやって来たのは、3つの黒い影であった。

エリ

エリは電話を掛け続けていた。相手は美優だ。

ネットカフェの机に突っ伏したまま、何も考えられなかった。いや、考えたくなかったの方が正確だ。それでも時間が経つにつれて、これから何が起きるのが徐々にわかってきた。そして、それを考えたのが自分だと気付いた。その瞬間、背筋が凍るような戦慄を覚えた。それからずっと、電話を掛け続けているのだった。

時計は9時半を指している。待ち合わせ時間は10時だからまだ間に合うはずだ。しかし、電話を何度掛けても美優は出なかった。もしかしてもう。そんな考えが脳裏に浮かぶ。その考えを必死に打ち消して、もう一度電話を掛ける。が、やはり誰も出なかった。

電話を切り、エリは最悪の結果と必死に闘う。もう間に合わなかった。取り返しのつかないことをしてしまった。エリがその考えに負けそうになっていた時、エリの携帯が着信音を発した。急いで携帯を見ると、美優からであった。

麗子

麗子は公園の階段の上に立ち尽くし、一点を見つめていた。階段の下には、大量の黒い血が溜まっていた。アスファルトに溜まった出血の量を見るだけで絶望的な気持ちになる。

「槇村さあん」

麗子を呼ぶ声が聞こえ振り返ると、部下の近藤が走ってきていた。

近藤啓二。刑事になる為に生まれてきたような名前。だが、刑事になる為に生まれてきたはずの近藤の性格は、驚くほど単純で騙されやすかった。容疑者を泣き落とそうとして、自分が泣き出してしまふほど。そんな間抜けな刑事を、麗子は嫌いではなかった。そんな刑事が1人くらいいてもいいんじゃないかと思うのだ。上司がクズなら、部下は必死にならなくてはならないが、逆に上司がしっかりしていれば、部下の1人や2人使えなくても問題ないのだ。そして、麗子はもちろん後者のタイプの上司だった。

噴水の辺りから全速力で走ってきた近藤は、麗子の目の前で止まり、文字通り麗子の目の前に携帯を差し出してきた。

「何？」

「噴水の前に落ちていました」

「誰のなの？」

「自局番号表示の所には、佐藤美優と書いてありました」

「佐藤…美優」

麗子はその名前を口の中だけで呟く。どこかで聞いたことのある名前だった。

「事故つすかねえ？」

近藤が呑気に言った声で麗子は我に返る。そして、その発言に耳を疑った。

「事故なわけないでしょ。いえ、結果的には事故かもしれないわね」

「どついつことつすか？」

近藤は大きな目をキョロキョロさせながら聞いてくる。興味がある話題になればなるほど、その瞳はよく動く。相手の話を聞きながら、周りの状況や相手の細かい動きを確認しているのだ。そういう刑事の癖が、麗子と話している時でも出てしまう。それ自体は何の問題もなかった。問題なのは、普通の刑事はそれを相手に悟られないように行うという点だ。残念ながら近藤の場合は、それを相手に見せ付けるように行う。それも無意識で。聞き込みには全く適さない癖だった。

「事故だったら、噴水の前に携帯が落ちているのはなぜ？ここから噴水の前まで50m以上あると思うけど」

「ああ！そうつすよね。てことは…誰かに突き落とされた？」

事件の臭いがしたからだろう。近藤の瞳は動きだけではなく、輝きまで増した。

「かもしれないし、違うかもしれない」

「違うかもしれない？違うとしたらどついつことですか？」

「わからないわ。そんなことより、他に何かわからない？」

麗子がわからないと言った瞬間に、近藤はあからさまにガツカリした表情を見せる。麗子はその表情の単純さを見て、近藤以上にガツカリしてしまう。改めて、この刑事を教育しなおさなければいけない。そう思わざる負えないほどに。

「他に、と言いますと？」

「だから、メモリーとかから親とかわからないの？」

麗子は近藤の頭の悪さと、刑事としての勘の鈍さに呆れながら言う。

「ああ。それはもうバツチリです。ご両親に連絡したらずくに病院に来るそうです」

「そう。他には？」

「他…ですか？……そついえは着信が10件以上来てました。しかも同じ人から」

なぜそれをすぐに言わない。喉元まで出かかった罵声を飲み込み、

聞く。

「誰から?」

「エリちゃんです」

「エリちゃん?」

「はい。着信履歴にエリちゃんから12件、着信アリとなっていました」

近藤はそう言うと、携帯を開き着信履歴を見せてくる。

「あなたの彼女と同じ名前ね」

「え? いや、俺の彼女はエミです。エ・ミ」

「そうだった?」

自分の彼女の話になった途端にデレデレとし出した近藤の手から携帯を取る。

「何やるんですか?」

「エリちゃんに掛けるの」

「え? 勝手にそんなことしていいんですか?」

近藤は麗子の行動に焦ったように聞いてくる。

「なんか文句ある?」

「いや、ないっすけど」

「よろしい」

麗子はエリちゃんと表示されている画面で通話ボタンを押す。呼び出し音が鳴り始めると、すぐに相手は出た。

「もしもし? みい? 今どこ?」

「佐藤美優さんは病院よ」

「……誰?」

電話に出た瞬間から矢継ぎ早に話し出した相手は、麗子の声を聞いて一気に警戒心を露わにする。かなり焦っている様子だった。

「青崎警察署の榎村って言います。あなたはエリちゃんね?」

「警察?... みいが病院?」

麗子の研ぎ澄まされた感覚は、エリのその反応を敏感に感じ取った。

「ええ。あなたの名前は?」

一瞬の沈黙。麗子は相手が電話を切ろうとしたのを察知し、鋭く言い放った。

「切らないで！ここで切ったら印象悪いわよ？」

「……」

「名前だけでも名乗りなさい」

「…神谷エリ」

「高校生？」

「もう名乗ったから切る」

最初の勢いはなくなり、携帯を耳に押し当てても聞き取りづらいほどの小声で、エリは話す。

「そう言わないで答えて？」

「……青崎高校」

かなりの沈黙の後、ようやくそう答えた声が聞こえた。

「そう。ありがとう。今日はもう遅いから明日にでも病院に来なさい。じゃあおやすみ」

「……」

電話が切れる。麗子は携帯を近藤に渡し、歩き出した。

「どうでした？」

近藤は興味津々といった感じで聞いてくる。顔は見ていないが、どんな表情をしているのかはわかった。わかりすぎて、絶対に見たくなかった。

「聞いてなかったの？名前と高校名しか聞いてないわ」

「そうっすよね。どこの高校でした？」

「青崎高校」

「青崎高校？それって…」

青崎高校と聞いた近藤は、続く言葉を言うべきか悩んでいた。

「そう。弟の勤める高校ね。もっと言えば、たぶん弟のクラスの生徒だわ。聞いたことのある名前だった」

「マジっすか？」

麗子は近藤に変な気を遣われるのが癪だったので、自分から話す。

隼人のクラスの生徒だということまでは予想していなかったのだろう。近藤は心底驚いたという顔をしていた。ちよつと意外な事実や証言が出るというも大袈裟に表情が変わる。一般人なら無邪気で可愛いが、刑事としては最悪だった。

刑事は何があつても感情を表情に出してはいけない。常に冷静に、客観的に物事を捉えることが重要なのだと、あれほど教えた自分がバカみたいで情けなかった。

「嘘言つてどうするのよ。そんなことより、聞き込みしつかりして目撃者がいるかも」

「やつぱり事件ですか？もしかして、エリちゃんが犯人！？つて、んなわけないか」

「犯人かはわからないけど、何か知ってるかもね。あと、エリちゃんじゃなくて神谷エリさんよ」

麗子は話しながらも足を止めることはなかった。その横に、近藤がピッタリとくっつく。

「その神谷エリさんがなんで何か知ってると思うんですか？被害者が落ちたと思われる時間、神谷エリさんは何度も電話を掛けているですよ？」

「電話を掛けてるからよ」

「はい？」

「電話を何度も掛けて、やっと繋がった相手が刑事だった。その刑事に友達が病院に運ばれたと教えられる。近藤ならどうする？」

「僕ならですか？僕なら病院に行きます」

麗子は立ち止まり、近藤の顔をまじまじと見つめる。そして、大きな溜め息を吐いた。ここまで来ると、この刑事がなぜ殺人などの重大事件を扱う捜査一課に配属されたのか全く意味がわからなかった。「信じられない。それでも刑事？ていうか刑事じゃなくてもわかるわよ？」

「え？…あ！そうか！病院に行くとか言う前に、なんで病院に運ばれたのか聞きますね」

しばらく考えた後、ようやく答えを出した近藤に、麗子は呆れながら、溜め息と共に説明する。

「そう。普通は病院に運ばれた理由を聞く。ましてや何度も電話を掛けてる。今すぐ話さなきゃいけない何かがあったはず。それなのに病院に運ばれたって聞いても理由を聞いてこなかった。なんでだと思っ？」

「病院に運ばれた理由を知っていた？」

「名前」

麗子は近藤に気のない拍手を送った。近藤はそんなことは気にもしていない様子でしきりに頷いている。

「それに、病院に対する反応に比べると、警察に対する反応が弱すぎる。まるで、警察が自分の所に来るのを知っているみたいだった」

「そういうことっすか。じゃあその神谷エリって子を問い詰めればいいんじゃないんですか？」

近藤のその言葉に、麗子は先ほどの拍手を早くも撤回したくなる。

「今の話は私の印象でしかない。証拠があるわけでもないし、事故か事件かもわからないのよ？その状況で尋問して、はい。私がやりました。なんて言っと思っ？」

「…ですよね」

「とにかくその辺の野次馬からでもいいから、話を聞きまくって情報を集めなさい」

そう言っ麗子は再び歩き出す。

「槇村さんはどこに？」

「病院」

「何の為にですか？まだ被害者は意識不明ですよ？」

「でしょうね。神谷エリさんをちょっと見ておくわ」

麗子が歩きながらそう言っ、近藤は不思議そうにする。

「え？でも槇村さんが明日にでも来なさいっ言ってたじゃないですか」

ここまで歩いてくる間も、近藤はずっ麗子の隣にくっ付いていた。

そのまま病院までついてきそうな勢いで。

「そうね。でも彼女は来るわ」

麗子の中では話は終了していたが、近藤はまだ何か言っていた。麗子はそんな近藤を無視。手を振り、「早く聞き込み！」と一喝する。その言葉で近藤は慌てて聞き込みに走り出した。従順で、素直。

麗子はようやく一人で病院に向かって歩き出す。

「絶対に来る」

歩きながら、麗子はそう呟いた。

エリ

「佐藤美優さんは病院よ」

その言葉が、エリの脳内を駆け巡り続けていた。

やはり間に合わなかった。おそらく美優は宏樹たちに犯されたのだろう。それで、3人が立ち去った後も倒れていたのだ。泣いていたのかもしれない。そこに誰かが通りかかって、警察と救急車を呼んだのだ。

美優は精神的に強いほうではない。それはエリが一番わかっていた。美優はどれほどの恐怖を感じながら、地獄のような時を耐えていたのだろう。もし黒幕がエリだとわかったら、美優はどうなるだろうか。自分を憎むだろうか。少なくとも、誰も信じられなくなってしまうだろう。もしかしたら、襲われた瞬間に全てを悟ったかもしれない。エリが仕掛けた罠だと気づいたかもしれない。エリの瞼の裏に焼き付いていたはずの、美優の笑顔が、泣きそう顔が、エリには見えなくなってしまった。

エリは激しい自己嫌悪と罪悪感に陥り、どうしても病院に行くことが出来なかった。行かなくてはいけないと頭では理解しているのだが、体が全く動かなかつたのだ。すると、再び携帯が鳴り出す。液晶には宏樹の文字。エリは出るのが憂鬱で辛かったが、一応話を聞いておこうと電話に出た。

「もしもし」

「……やべえよ」

聞こえてきた宏樹の声は、暗く沈み、今にも消え入りそうなほどのか細い声だった。いつものバカみたいなハイテンションを予想していたエリは、その予想外に暗い声を聞き驚く。

「確かにヤバイ。けど黙ってれば大丈夫じゃない」

そうエリが言っても、宏樹からは何の反応もなかった。先ほど掛け

た時には背後から聞こえていたビートも聞こえない。

「…死んだかな？」

「え？」

どれほど時間が経ったかわからなくなるほど沈黙は続き、ようやく宏樹はポツリと呟く。エリの頭は、宏樹のその一言で一気に混乱し始める。

「どういうこと？ヤツただけじゃないの？」

「ヤツてねえよ！…落ちたんだよ」

「落ちた？誰が？どこから？」

「美優ちゃんだよ！押さえようとしたら逃げられて、追いかけたら…」

宏樹はそこで言い淀む。

「…追いかけたら、何？」

続く言葉はわかっていった。公園の作りや、どこに何があるかくらいはエリも知っていたからだ。それでも聞き返していた。違う言葉が返ってくることを、心の底から祈りながら。

「階段から落ちた。あの公園真つ暗だから。近付いて声掛けたけどピクリとも動かないし、血も…すげえ出てたし。…けど俺らは追いつけただけなんだよ！あいつが勝手に落ちたんだよ。だから俺らは何にもしてねえ。あいつが勝手に…」

宏樹は何かのスイッチが入ったかのように一気に捲し立てた。だが、エリの耳には何の音も入っていなかった。エリの祈りは届かなかった。

「みいが死ぬ？」

声を出してみると、その言葉はエリの心に鋭く突き刺さる。誰のせいかなど考えなくてもわかる。自分のせいだ。この期に及んで誰かのせいにしてしまうとしている自分を呪いたい気分だった。

「だから俺らは関係ねえからな！ただ声掛けただけなんだよ！関係ねえか…」

宏樹の声は通話口を通過してネットカフェの店内に漂い、一瞬で消え

る。その声は誰にも届いていなかった。

「病院に行かなくちゃ……」

エリは無意識のうちにネットカフェを飛び出し、人々が目覚め、昼間よりも明るくなった真夜中の街を、全速力で駆け出した。

病院は独特な匂いがする。エリはその匂いを嗅ぐ度に、自分が病気になるような気分になる。

自分でも信じられないくらい走り続け、病院にやって来ていた。病院に着いて独特な匂いを嗅ぎ、手術室の前に立ち真つ赤に光る“手術中”のランプを見ても、その扉の向こうに美優がいるとは思えなかった。そんなエリに現実を突きつけたのは、手術室の近くに設置してあるソファアールに座る、美優の両親の憔悴しきった姿だった。その姿を見たエリは、美優は本当に死ぬのかもしれないと改めて感じた。ソファアールに俯いて座る好子のほうは、特に憔悴しており、今にも倒れてしまいそうだった。

そんな2人の姿を見て、立ち尽くしていると、俯いていた好子が顔を上げ、エリの姿に気付く。エリに気付いた好子は前に会った時と同じように微笑んだ。だがその微笑みもどこか無理をしているようで痛々しかった。

「エリちゃん来てくれたのね。ありがとう」

好子はエリの横まで来て、小さな声でそう言った。

「みいは？」

そんな好子の顔をエリは見る事が出来ず、手術室のほうを見ながら質問をする。

「まだ手術中」

「助かるんですか？」

「……助かってくれなきゃ……私……美優ちゃんが死んだら……」

好子はエリの前で泣き始める。好子はよく笑い、よく泣く人だった。それでも、こんな悲痛な涙を見たことはない。声を上げず、ハンカチで目を押さえ泣き続ける好子の肩を、美優の父親がそっと抱き寄

せソファーに連れて行く。その目元にも、拭いきれない涙の跡がはつきりと刻まれていた。支え合って、支え合わなければ5メートル先のソファーにすら辿り着けない2人の姿は、ひどく小さく見えた。

エリはその後も手術室の前から動くことが出来ずにいた。今自分に出ることなど何一つないことがわかつているにも関わらず、手術室の前に立ち尽くしていた。

「結局来たのね」

エリが手術室の前から動けずにいると、後ろから声を掛けられた。振り返ると、そこには30半ばくらいの女性が立っていた。声は女性にしては低く、髪は黒髪のアート。目鼻立ちもスッキリしているが化粧気が全くなかった。それでもエリは、その女性を見た時、綺麗な人だと思った。エリがその女性を見つめ、黙っていると相手から再び声を掛けられる。

「神谷エリさんね？」

もう一度その声を聞いて、エリは相手が誰なのかに気付く。さっき美優の携帯から電話を掛けてきた刑事だ。

「そう…だけど」

エリは警戒しながら答える。

「こっちで話を聞かせて」

そう言うと、その刑事はエリの答えを待たずに歩いて行ってしまった。エリはどうしようか迷うが、美優の両親の姿を見ていたくなかったので付いて行くことにした。

女刑事は振り返りもせず喫煙所まで歩き続けた。そして喫煙所に到着するとすぐにタバコに火を点ける。エリは設置してある椅子には座らず、立ったまま相手が話し出すのを待っていた。だが、女刑事は何も言わずにタバコを吸い続ける。そして、2本目のタバコに火を点け、エリの顔を見ながらようやく言う。

「綺麗ね」

エリは刑事の予想外の言葉に困惑するが、相手のペースに引き込ま

れないように気を引き締める。

「話って何を聞きたいんですか？」

そして、自分から水を向けることにした。

「え？ああ、そうね。じゃあ一つ聞いわ」

女刑事はそう言うと、タバコの灰を灰皿に落とし、エリの顔を正面から見据えてきた。女刑事は座ったままのはずなのに、エリはその瞳から強い威圧感を感じた。

「なんで佐藤美優さんに電話したの？」

「…それと事件と何か関係あるんですか？」

「別にないわ。ただ10回以上も電話するほどの用事って何か気になっただけ。最近の若者についてちょっとくらい勉強しておかなきゃと思ってるね」

女刑事はそう言い、口元を緩める。刑事とは思えないほど美しかった。

「別に大した用事じゃありません」

エリはそれでも警戒心を解かずに、一言ずつ確認をしながら話す。

「大した用事じゃないなら聞かせて？」

女刑事は、そんなエリの顔を見据えたまま動かない。瞳も体も全く動かず、じつとエリの心の動きを見透かそうとしているかのようだった。エリも女刑事を睨み続けたが、埒が明かないので仕方なく話すことにする。

「みい、今日デートだったんです。だからその話を聞こうと思って」

「デート？デートの結果を聞く為にわざわざ10回以上電話を？」

「今時の女子高生はそういうのが気になるんです」

そう言うと、女刑事は頷くように少しだけ首を上下に動かしながら「今時の女子高生は友達とのデート結果がどうしようもなく気になるのね」と、独り言のように呟く。そして、すぐに次の質問を繰り返してきた。

「どうして事件だと思うの？」

「え？」

エリは質問の意味がわからず聞き返した。

「あなたさつき、事件と関係あるんですかって聞いたじゃない。事件だなんて誰も言っていないのに。警察も事故か事件かまだ判断出来ていない状況なのに、あなたはどうして事件だと思ったのかしら？」
エリはその瞬間、自分の顔が歪むのを感じた。女刑事はエリの変化に気付いているのかいないのか、相変わらず無表情のまま、エリの顔を、その奥にあるエリの心を見つめ続けているようだった。エリは目の前にいる美しい女刑事に底知れぬ恐怖を感じた。

「…何となくですけど」

絶体絶命の状況の中、何とかそれだけ言う。エリがそう言った後も女刑事はエリの顔を見つめ続けていたが、フツとその目から力が抜けたように見えた。

「これで質問は終わりよ。最後に、佐藤美優さんとデートをしたっていう男の子の名前と連絡先を教えてもらえると助かるんだけど」
そう言われ、エリは晃太の名前と連絡先を教える。

「ありがとう。じゃあ今日は帰るわ。また話を聞くかもしれないからその時はよろしく」

そう言つて、女刑事は立ち上がり歩き出した。だが、すぐに立ち止まり振り返る。

「お友達、助かるといいわね。そうすれば全部解決する。事件なら犯人もわかるし、佐藤美優さんのご両親のあんな表情も見なくて済む」

女刑事は再び口元を少しだけ緩め、そう言つ。そしてすぐに背を向け歩いて行ってしまった。

エリは喫煙所のソファに座り込み、大きく息を吐き出す。その時になって初めて、自分が大量に汗をかいていることに気付いた。もちろんその汗は、走ってきたことによるものではなかった。

しばらく目を瞑り、心を落ち着けようと試みる。そのまま、先ほどのやり取りについて考えた。あの女刑事はどう思ったのだろうか。上手く誤魔化せたとは到底思えなかった。もしバレたらどうなるだろう

うか。それを考えると、今さっきまで感じていた恐怖とは違う、別の恐怖を感じる。だが、その恐怖と同じくらい、美優に助かってほしいという思いがエリことを内側から激しく揺さぶり続けていた。たとえそれで自分が捕まることになっても。そして、エリは呟いた。「みいが助かるなら、それでもいい」

麗子

病院の薄暗い廊下を歩きながら、麗子は先ほどのエリとのやり取りを思い出していた。

やはりエリは何かを知っている。それは間違いないだろう。重要なのはその何か、が何かということだ。エリは事件という言葉を使った。かなり警戒していたにも関わらず、無意識のうちにそう言ったのだからおそらく本音だろう。

事件。すなわち、犯人がいるということだ。エリはその犯人を知っており、その犯人を庇っているのか。それとも、エリ自身が犯人だろうか。そこで、麗子は自分のミスに気付く。

「彼女のアリーブイを聞くの忘れてたわ」

溜め息を吐きながらそう呟く。弟のクラスの生徒だということとで動揺していたのかもしれない。近藤に再教育する前に、自分がもう一度教育をされなければならぬかもしれない。

私もまだまだ甘いな。などと考えながら麗子は屋上へと続く扉を開けた。

屋上は広く、真夏の夜明けは意外なほど涼しかった。最近はやもずつと暑苦しかったので、麗子は久しぶりの感覚に、思わず伸びをしていた。

そのままフェンスの手前まで歩き、空を見上げる。空はすでに白み出してはいるが、星もちらほら見えていた。東京で星を見たのは初めてかもしれない。そんなことを考えながら近くのベンチに座ると携帯が大きな着信音を鳴らして着信を告げる。もう少し星を見ていたかった麗子はその大音量に思わず舌打ちをする。無視しようかと一瞬考えるが、仕方なく携帯を取り出し電話に出る。

「榎村よ」

「俺だ。佐藤に何があった？」

電話に出た瞬間に相手は怒鳴るように聞いてくる。麗子はその大きな声に顔を顰めながら答えた。

「あら、我が愛しの弟君じゃない。そんなに慌ててどうしたの？」

「ふざけるな！佐藤に何があったか聞いてるんだ。なんで佐藤は病院に運ばれたんだ？」

「そんなにカツカしないの。だから結婚できないのよ？」

麗子は隼人の怒声を聞き流しながら、こんなに慌てている隼人を見るのは初めてかもしれない。そう思い、少しだけ嬉しくなった。

「佐藤美優さんは噴水公園の階段から落下して頭を強打。今は手術中よ。あんたどこにいるの？」

「病院に向かっている。何で落下なんかしたんだ？」

「さあ。今調べてる所よ。事故か事件かもわからない」

隼人は何も言わなくなった。おそらく様々な可能性を検討しているのだろう。

「ところで、車で向かっているのね？」

「ああ」

「車を運転しながら電話してるんだ。…逮捕するわよ？」

「下らないこと言っていないで早く調べたらどうなんだ？」

麗子の軽い冗談に、隼人はかなり頭にきているようだ。こんな冗談も通じないほど、隼人の頭の中は混乱しているということだ。

「下らないこと？そんなこと交通課に言ったら、あんたの免許を取り消すまで追い掛け回すかもね」

「……」

無視。一番危険な反応に、麗子もさすがに前言撤回する。

「冗談よ。あんたは先生なんだからもつと冷静に対処しなさい」

「先生だから冷静でいられないんだ。他のクラスの生徒だったらこんな風になってない」

「そう…。それもどうかと思うけど。自分のクラスの生徒だとしても冷静に対処すべきよ。あんたは生徒を守らないといけないんだから。暴漢からも、警察からもね」

「…どういう意味だ？」

麗子の最後の一言に、隼人は不穏なものを感じ取ったのだろう。一瞬の後に聞き返してくる。

「別に。どんな奴が来ても生徒を守りなさいって言いたいだけよ」
隼人は麗子の言葉の真意を測っているようであったが、すぐに答える。

「わかってる。とにかく姉貴は何があつたか早く調べてくれ」

「ええ。全力で捜査するわ。結果はどうなるかわからないけど」

「…頼む」

そう言つと、電話は切れた。呆気ない。

「愛してるくらい言いなさいよ」

麗子は通話の切れた携帯に向かつて、最後の冗談を言う。

もう一度空を見上げる。夏の日の出はあつという間で、もう東の空から太陽が顔を出していた。先ほどまで空に散らばっていた消え入りそうな星たちを探すが、その弱々しい姿は全て灼熱の太陽に飲み込まれ、跡形もなく消え去っていた。

「チツ」

麗子は思わず舌打ちをし、徹夜明けの重い体を引き摺りながら、病棟へと続く扉を再び開いた。

屋上から下りて病院の正面玄関を出た所に、近藤の車が停まっていた。何も言わなくてもしつかり運転手の役割をこなす近藤に、拍手を送りたい気分だった。もちろん、気持ちを含めて。

助手席に乗り込み、すぐにタバコに火を点ける。

「佐藤美優さんの手術が終わったそうです。一応成功して、今はICUで治療中だそうです」

「知ってる。さっき聞いてきた。まだまだ話は聞けそうにないわね」

近藤は、麗子がその情報を知っていることを意外に思ったらしい。普段からそういう情報収集は全て近藤に任せているからだ。

「そうだったんですか。意識が戻るかどうかもわからないみたいで

すからね。1回署に戻りますか？」

「そうね。そうしましょう」

近藤がシフトをドライブに入れて出発しようとした時、エリが正面玄関を出てくるのが目に入った。

「待って」

麗子は近藤が車を出そうとするのを止め、降りる。エリのほうも麗子に気付いたらしく、表情は変えなかったが、その姿からは不快感が滲み出ていた。だが、麗子はそんなことは全く気にせず、エリの前まで歩いて行く。刑事は相手に嫌がられるのは日常茶飯事なので、いちいち気にしてはいられない。重要で、報われない仕事なのだ。

「手術は成功したみたいね」

そう言うと、エリは小さな声で、「ええ」と返事をする。視線も足先も、あさつての方向を向いていた。

「よかったわね」

「どうも」

「あなたにもう一つだけ聞きたいことがあったの。いいかしら？」

「よくないと言っても聞くんでしょ？さっさとしてください」

エリは手を体の前で組んでこちらに体を向ける。精一杯の虚勢。刑事が相手でも怯んでなんといないと思わせたいのだ。いや、麗子ではなく、自分に言い聞かせているのだろう。

「物分かりのいい子で助かるわ」

麗子は口元に微笑を作りながら、忘れていた質問をする。何でもないことのように。重要なことほどさりげなく、相手に準備の時間を与えてはいけない。

「昨日の21時から22時までの間、あなたはどこにいたのかしら？」

麗子の問いに、エリは虚を衝かれたようだったが、すぐにあからさまに顔を顰める。見飽きた表情。今まで何百回と見てきた表情だった。

「アリバイ、ですか？」

「そうなるわね。けどこれは関係者全員に聞くルーティン作業みたいなものだから。気を悪くしないで」

麗子は口元の微笑を絶やさず、エリの答えを待つ。やがてエリは諦めたように息を吐き、麗子の顔を見つめて答える。睨むような視線とは裏腹に、体の前で組まれていたはずの手は、背中に隠れて見えなくなっていた。

「一人でネットカフェにいました。ペンタゴンっていうネットカフェ」

「ペンタゴン？すごい名前ね」

「そうですね。名前や見た目だけでもかつこよく見せたいんですよ、きつと。…もういいですか？」

「ええ。ありがとう。送って行きましようか？」

「結構です」

そう言うとエリは足早に歩き去る。麗子はその後ろ姿を見て、少し意外な印象を受けた。かなり追い込まれているはずなのに、その背中中はピンと伸びていた。エリの精神状態から考えて、歩き去る背中にまで気が回せるとは考えにくかった。

エリの開き直ったかのように伸びきった背中をしばらく見つめ、麗子は近藤の待つ車に乗り込む。

「あれが神谷エリさんですか？」

車に乗り込むと、早速近藤は話を聞いてきた。麗子は再びタバコに取り出し、火を点ける。

「そうよ」

「何を話してたんすか？」

「世間話」

「世間話？」

「そう。早く出してよ」

「え？ああ、はい」

近藤は納得していないような表情ではあったが、シートベルトを締めて車を発車させる。従順で、素直。

麗子は窓を開けてタバコの煙を外に吐き出した。その煙の向こうに、エリの小さくなった背中が見えていた。

エリ

8月17日。

エリは渋谷にいた。

美優が宏樹たちに襲われて、ケガをしてから1週間が経っていた。エリはあの日以来、1度も病院には行っていないかった。行かなかったのではなく、行けなかったのだ。

美優は一命は取り留めたものの、依然意識不明の状態であるらしい。あの日から誰にも会わずに過ごしてきたが、誰かから連絡が来ることもなかった。

美優に意識が戻れば自分は逮捕されるだろうか。少なくとも美優には確実に見捨てられるだろう。そうなれば、自分はいよいよこの世には必要のない人間になってしまう。これまで何度となく浮かんだ考えを、エリは再び考えていた。そして、その度に恐怖を覚えるのだった。

だが、身も凍るような恐怖を感じながらも頭の隅では、全ては自分が犯した過ちが原因なのだからという、冷静な考えも浮かんでいた。事件後のエリの頭の中は、その2つの対称的な考えに支配され、混乱し続けていた。

「へい、彼女」

エリが座って混乱した頭を整理しようとしていると、誰かが上から声を掛けてきた。今時「へい、彼女」なんて声の掛け方など聞いたことがなかったし、今はそれどころではなかったので、エリは無視することにした。が、その男は懲りもせず話し掛け続けてきた。

「お茶でもしようよ。ねえ、カーノジヨ」

エリはそのまま無視し続けようとも思ったが、あまりにも鬱陶しく、さっさと追い払ってしまおうと、顔を上げ相手を睨む。

「ウザいんだけ……ど」

だが、顔を上げたエリの目の前に立っていたのは、遊び人のチャラチャラしたバカ男ではなく、常に口元に微笑みを湛えるあの女刑事だった。

「探したわよ」

そう言うと、女刑事はエリの横に座り、タバコを取り出す。

「…何の用ですか？」

エリは驚いたがすぐに立て直し、探りを入れる。

「あなた、家に帰ってないらしいわね」

女刑事はエリの探りなど完全に無視し、深々とタバコを吸い、煙を吐き出しながら全く関係のない話をし出した。何度話しても、常に相手のペースで進む会話に、エリは無力感すら感じ始めていた。

「だから何ですか？」

「どうして帰らないの？お母さん心配してるわよ？」

「関係ないでしょ」

母の話をされた為、エリは苛立つ。冷静に対処しなければならないと頭ではわかっているはずなのに、気が付くと完全に飲み込まれていた。

「関係あるわよ。あなたの居場所を探すのに苦労したんだから。病院にお見舞いに来るかと思ったら全然来ないし」

「……それで、私を探して何の用ですか？」

エリは相手の言葉に苛立ちを隠さずもう一度聞く。何でも答えるから、早く終わらせて欲しかった。

「帰ったほうがいいわよ」

「そんな話をしに来たならどっか行って！」

エリの大声に、道行く人々が振り向く。だが、それは一瞬のことだった。数秒も経たぬうちに、エリの大声などなかったかのように全員前を向いていた。そして、目の前にいる女刑事の表情も少しも変わらない。相変わらず微笑みを口元に保ちながら、静かに核心に迫る。

「清水宏樹っていう男の子はあなたの知り合いかしら？」

あまりにも衝撃的な問いに、エリは言葉が出なくなる。自分の表情が歪み、息も荒くなるのがわかる。数秒間の沈黙の後、何とか平静を保とうと表情を作るが、うまくいっているかは甚だ疑問であった。「お友達？」

そんなエリの不安を見透かすように、女刑事は問い掛けてくる。

「…そうですね。それが何か？」

それだけ言うのにも、エリは精一杯腹に力を込めていた。

「佐藤さんが落ちる数時間前にね、清水宏樹を含む3人組が意気揚々とクラブから出ていくのが目撃されているの」

「クラブから出ていくのに問題があるんですか？」

もう詰みだ。そうわかっていたが、この女刑事に負けるのが悔しい。その思いだけで、エリは抵抗を続けていた。

「そうね。それだけじゃ別に問題ないわね。まあ、未成年がクラブに行っているのは問題と言えば問題だけど、それは今回はいいってことにしましょう」

「問題ないなら別…」

「けどね、その3人組がクラブから出る直前に電話で話してるの。」

すぐに会話は終わったらしいけど、近くにいた別のお友達がね…」

エリが反論を言い終わらないうちに刑事はさらに話し出す。その表情は先ほどと変わらず微笑を保っているが、なぜか少し哀しそうであった。

「“エリ”って言ったのを聞いている。彼らの周りでエリって名前の子はあなただけ。それであなたに話を聞きに来たのよ。あの時、何を話したの？」

「……」

「あなたが話さないなら彼らに話を聞きに行くわ。…時間の問題だと思っ」

女刑事は静かに、優しく語りかけるように話す。エリは、この女刑事に勝てないと悟った。始めから逃げ切ることなど諦めていたが、最初から最後まで一度も勝てなかった。

「何で…何で宏樹が浮かんだんですか？」

エリはどうしても気になつた質問を1つだけする。エリがこの質問をするということは、自分の事件への関与を認めているようなものであつた。それを女刑事も汲み取つたようで、少しだけ目を伏せ、相変わらずの優しい声音で答える。

「警察はあなたが思っている以上に仕事ができるのよ。補導なんかとは全然違う。事件性があれば、虱潰しに聞き込みをしまくるの。そして、真相を突き止める」

そこまで言うのと再び顔を上げ、エリの瞳を見つめたまま、「それに、最初からあなたが怪しいと思つてた。だからあなたがよく行く所を重点的に調べただけよ」と言った。

エリは大きく息を吐き出していた。やはり最初からバレていたのだ。逃げ切れないとわかつていたのだから何も怖がる必要はない。逮捕されてどうなるかはわからないが、どうなつても仕方がないだろう。エリは立ち上がり、女刑事の顔を真っ直ぐに見る。初めて恐怖や怯え、嫌悪以外の感情でこの女刑事の顔を見つめることが出来た気がした。

「あたしを警察に連れて行くんですよね？」

そう言つたエリの言葉は、携帯の着信音によつて遮られる。鳴っているのは女刑事の携帯らしい。

女刑事は、「ごめんなさい」と言いながら電話に出る。少し離れたところまで移動し、携帯で話し始めた女刑事を見ながら、エリは美優のことを考える。エリにとって今何よりも重要なことは、美優の今後だつた。

美優は目覚めてくれるだろうか。一命を取り留めたと聞いた時には自分の犯した罪など忘れてしまうほどに安心した。

美優が目覚めた時に自分はそばに居られるだろうか。居られないだろう。もし逮捕されていないなくても、美優は全てを知っている。エリのことを知って知っている。そんな美優と、面と向かつて会うことなど出来るわけがなかった。

「よかったわね」

「はい？」

そんなことを考えていると、女刑事の声が突然聞こえ、エリは間の抜けた返事をしてしまった。いつの間にか電話を終えた女刑事がエリの目の前に立っていた。

「佐藤美優さんが意識を取り戻したらしいわ」

「…え？」

そう言われても、一瞬何のことか理解出来なかった。たった今まで考えていた美優のことなのに、エリには女刑事の言葉がすぐには頭に入ってこなかった。だが、徐々にその言葉の意味を理解し始めると、喜びが押し寄せる。

「ホントに？みいが起きたんですか？」

「ええ。起きたらしいわ。今から病院に行くけどあなたも一緒に来る？」

エリはすぐにもも病院に行きたかったが、先ほどの考えが頭の中を満たしていく。美優と顔を合わせた時、美優は反応を示すだろうか。エリは恐怖で首を縦に振ることが出来なかった。

「…あたしは…行きません」

その答えを女刑事は予想していなかったのである。驚いたように眉根を寄せるが、すぐに理由に思い至ったようで、静かに息を吐く。皮肉にも、エリは初めてこの女刑事に驚きを与えることに成功していた。

「…そう。美優ちゃんがあなたに会いたって言うてるらしいけど、それでも来ない？」

「え？」

女刑事の言葉に、次はエリが驚く。美優が自分に会いたがっているなんて少しも考えていなかった。

「行きましょう」

そう言って、女刑事はエリの答えを待たずに歩き出した。エリは無意識のうちに、その背中を追って歩き出していた。

病院の待合室で待っている間、エリは何度も帰ろうと思った。病室には、先に警察が話を聞きに入った為、エリはそれが終わるまで待っているのであった。

美優が自分に会いたがっていると聞いて、もしかしたら美優は何も気付いていないのではないかと思ったが、よくよく考えてみると、ただ単にエリを問い詰める為に呼んだのかもしれない。何も気付いていないとかもしれないと思った自分がどうかしていたとしか思えなかった。時間が経てば経つほど、逃げ出したい気持ちが強くなっていく。

そんなエリを待合室のベンチに留まらせているのは、先ほど見た好子の姿であった。病院に入り、病室に向かっている時、廊下で擦れ違った好子。擦れ違うエリたちに深々と頭を下げ、礼の言葉を述べた好子。美優の着替えを取りに家に戻ると、嬉しそうに喋る好子。

どの表情も幸せに満ち溢れていた。美優への愛の深さを感じさせた。あの表情になるまでの1週間、好子はどれだけ苦しんだのだろうか。どれだけ不安や悲しみに苛まれたのだろうか。それを考えると、美優や好子に謝らずにはいられなかった。その気持ちだけが、エリを待合室の固い椅子に座り続けさせていた。

どのくらいの時間が経ったのかわからないが、前方から2人の刑事が歩いて来るのが見えた。2人の刑事はエリの前に立ち、エリを見下ろす。

エリも立ち上がり、2人の目を交互に見る。遂にこの時が来た。エリは思った。美優に全てを聞いた警察が、エリを被害者に会わせてくれるだろうか。会わせてくれないに決まっている。それでもエリは、少しでも美優と話をさせてもらえるように頼むつもりだった。だが、エリが何か言う前に刑事の口から出た言葉は、エリが全く予想していなかった言葉であった。

「署に帰るわ。美優ちゃんが待ってるから会って行ってあげなさい」

女刑事の表情からは相変わらず何も読み取ることが出来なかった。

「でも、あたしは警察に行くんでしょ？」

エリはからかわれているのかと思った。その為、自分から警察へ行く話をしてしまう。

「…何の話かしら？」

だが。女刑事から返ってきた答えは、エリをさらに困惑させるものだった。

「何のって…どういうこと？」

警察は美優から話を聞いて、エリが事件に関わっているのは知っているはずなのに。何が起きているのか全くわからなかった。そんなエリの困惑を見透かすように、女刑事は話し始める。

「佐藤美優さんから話を聞いて、事件性はないと判断したのよ」

「事件性がない？」

「そう。彼女は家に帰るのに近道をしようとして公園を通り、誤って階段から落下したそうよ。だから事件じゃなくて事故」

「そんな…」

エリはあまりの驚きに言葉が出なかった。女刑事から話を聞いた今でも、何が起きているのかわからなかった。

「だから帰るわ。さっさと彼女の所に行きなさい。じゃあね」

そう言つて、2人の刑事はエリの前から立ち去った。2人の内の片方。男の刑事の方は明らかに納得していない表情であったが、それはエリも同じである。

エリの頭の中は何が何だかわからないほどに混乱していたが、それでもその足は、自然と病室に向かって1歩を踏み出していた。

麗子

エレベーターは1階に止まったまま一向に上がってこない。下で誰かがもたついていているのかもしれない。麗子はエレベーターに乗るのを諦め、階段に向かって歩く。

「何か納得出来ないうすよね」

近藤は麗子の横にピッタリとくっ付いたまま、独り言のように呟く。

「何が？」

「槇村さんは被害者が言った証言を信じるんですか？」

「被害者じゃない。事故なんだから」

そう言くと、近藤はあからさまに不服そうな顔をする。

「それなんですよ」

「それって？」

麗子は近藤が何を言いたいのかわかってはいたが、敢えて聞いてみることにする。

「事故じゃないって、槇村さんが言ったじゃないですか。事故なら携帯が落ちていた位置と、被害…、佐藤さんが倒れていた位置の説明が着かないって」

50点。不合格。

「持っていくのを忘れたのよ」

「今時の高校生が公園のど真ん中に携帯を忘れますか？」

近藤は珍しく食い下がってくる。60点。

麗子は階段を下り始める。近藤に残された時間は何分くらいだろうか。3分がいい所だろう。

「清水宏樹たちの行方は？神谷エリと電話で話した後に消えました。その神谷エリは事件…じゃなくて、事故のあった時間に佐藤さんに電話し続けている。その理由もわかってない」

70点。不合格。

「今時のガキが消えることなんてよくあることじゃない。その内出てくるわよ。それに、神谷エリが佐藤美優に電話を掛けた理由は、デートの首尾を聞く為」

ようやく1階に着いた麗子はそのまま正面玄関に向かう。

「そもそも駅からあの公園を通るルートは近道じゃなくて遠回りですよ。完全におかしい」

80点。タイムアップの為不合格。残念。

麗子の目は正面玄関を抜ける見知った顔を捉えた。知りすぎた顔。30年以上も見続けた顔。

「先に帰っていいわよ。車は置いて行って」

近藤も隼人の姿を見つけたのだろう。

「じゃあまた連絡してください」

そう言い、歩いて行こうとする。従順で、素直。90点。

「近藤」

「はい？」

「日本の法律は知ってる？」

「当たり前じゃないですか」

「じゃあ…わかるわね？」

近藤はしばらく考えていたが、やがて顔を上げ、小さく頷く。

「疑わしきは罰せず。ですか。灰色…ですからね」

100点。合格。

「また連絡するわ」

麗子は、少しでも成長した可愛い相棒から、中学の頃から何も変わらない見飽きた弟へと、視線を移した。

エリ

病室の前に立ち、身動きが取れなくなってしまうてからどのくらいの時間が過ぎただろうか。エリは何度も手を扉の前に持つていつては、その手を引っ込めるといふ動作を繰り返していた。美優に会わずに帰ろうと思っても、次は足が動かない。動くのは手だけだった。このままでは埒が明かないと意を決し、大きく深呼吸をしてから逃げ出しそんな手を必死に抑え、扉をノックする。

「はい」

扉の向こうから小さな返事が聞こえ、エリの心臓は早鐘を打ち、その速度はみるみる内に速くなる。思い切つて扉を開くと、その扉の向こうには美優の白い顔があつた。

美優は勢いよく開いた扉に驚いたような表情を見せたが、扉を開いたのがエリだとわかり、その表情は途端に輝く。

「エリちゃん！来てくれたんだ！」

そう言つて笑顔で手を振る美優の頭には、包帯がグルグル巻きにされてきた。それを見たエリは、さらに罪悪感を感じ、病室に入ることが出来なくなつてしまった。そんなエリの姿を見て、美優は不思議そうに首を傾げる。

「エリちゃん？入つて？」

「…うん」

美優に言われ、エリは重い足を無理矢理動かしてベッドの横まで歩いた。今動いているのが自分の足だとは思えないほど、エリは緊張していた。

ベッドに座る美優は、顔色こそ良くないが、元気そうであった。そして、エリが何かを喋ろうと口を開く前に、美優は嬉しそうに喋り出す。

「久しぶりだね。つて言つても私はずっと寝てただけだ。エリち

「やんは元気だった？私、1週間も寝てたんだって。ビックリしちゃった。起きたらお母さんがワアワア泣き出すし、何が悲しいのか全然わからなかったよお」

「嬉しそうに喋ってはいるが、そんな美優の姿はまるで、エリに何も聞かれたくなくて喋りつづけているように見えた。エリは、美優が喋り続けるのを静かに聞き続けた。」

「お母さんって泣いたり笑ったり忙しい人なんだ。私が起きた時は泣きまくってたのに、ちょっとしたら次はずっと笑ってるの。だから私も釣られて泣いたり笑ったりで疲れちゃった」

「中々途切れない美優の声が一瞬途切れた時、エリは美優に全てを告白しようとして口を開く。」

「みい。聞いて？」

「だが、美優から返ってきた返事は、今まで聞いたことのないような大きな声だった。」

「聞かない！」

「美優の強い口調にエリは驚き、美優の顔を見る。口を真一文字に結んだその顔は、強い決心のようなものが滲み出していた。」

「…何で事故だなんて言ったの？」

「それでもエリは聞いていた。」

「だって事故なんだもん。私が足を滑らせて自分で落ちたんだもん」

「みい。違うよ？わかってるでしょ？あれは…」

「違うくなんかない！」

「美優の大きな声にまたもエリは驚く。こんなに強い口調でエリに反論する美優など、見たことがなかった。」

「あのね、いつもは使わない道だったから、それで、見えなくて…落ちちゃったの」

「みい…」

「美優の瞳からは大粒の涙がいくつも零れ落ちていた。」

「あのね、近道しようとしてね、それで…」

「泣きじゃくり、何度もつかえながら、必死に同じことを繰り返す言

い続ける。その姿を見て、エリは全てを悟った。美優はやはり何もかも知っている。知っていて、エリを庇っているのだ。

「あのね、いつもは使わない道だったから……」

「みい…もういいよ」

エリの瞳からも涙が止めどなく溢れた。

「…ごめんね…ごめんなさい」

「違うよ？私が勝手に落ちちゃったんだもん…私が勝手に…」

エリは美優を抱き締めていた。どうしようもなく悲しかった。自分の犯した過ちが。

美優の優しさが。

そして、この期に及んでその優しさに甘えようとしている自分自身
が。

「みい？」

「何？」

「みい。あたしがみいを守るからね。これからずっとずっと、みいを守るから」

「エリちゃん…ありがとう。じゃあ私がエリちゃんを守るね」

「…うん。ありがとう」

美優とエリは抱き合ったまま泣き続けた。涙が出ているのかわからなくなるほど泣き続けた。

どのくらいの時間そうしていただろう。実際には数分だったかもしれないが、エリには何時間にも感じられた。

お互いだいぶ落ち着きを取り戻し、美優が眠っている間に、おしどり夫婦で有名だった俳優が離婚した、などの他愛もない話を続けていた。美優は事件などなかったかのように、終始笑顔であった。

そして、エリも事件に触れることはなかった。

「あら！」

2人が無難な会話を続けていると、突然背後から声が聞こえ、エリは驚いて振り向く。そこには、好子が美優と瓜二つの笑顔で佇んで

いた。

「エリちゃん。来てくれたのね。ありがとう」

好子は先ほど廊下で擦れ違った際に話したことを忘れてしまったかのように、もう一度礼を言い、深々と頭を下げる。その姿がエリに、隠そうとしていた罪悪感を思い出させた。

「いえ。あの…すみませんでした」

エリも深々と頭を下げ、謝罪した。だが、好子は小首を傾げ、不思議そうにエリを見ていた。

「どうしてエリちゃんが謝るの？」

「え？あ、あの…何となく」

好子の疑うことを知らない瞳を見たエリは、結局本当のことを言うことが出来なかった。

「フフ。おかしいこと言うわね」

好子はエリの答えを聞いて笑い出す。エリは本当のことを言えない自分が腹立たしくて仕方なかった。

「そろそろ帰るね」

そして、何も知らない好子と一緒にいることが辛くなり、逃げるように病室から出ようとする。

「エリちゃん！また来てね？」

病室を出ていくエリの背中に美優の声が届くが、エリは振り返ることなく病室を出た。

病院の廊下を逃げるように早足で歩きながら、エリは美優と抱き合っただけ泣いたことを思い出していた。

あんなに泣いたのはいつ以来だろうか。初めてかもしれない。美優のことを守ると約束したのになぜ逃げ出してしまったのか。エリは自分の矛盾した行動に、再び怒りが込み上げて来るのを感じていた。正面玄関が見えてくると、その扉の先に知った顔があるのに気付いた。

「またか」

思わず呟きながら正面玄関を出ると、案の定声を掛けられる。

「お友達とは仲直り出来た？」

女刑事は車に寄り掛かり、口元に例の微笑を浮かべながら、エリの瞳を覗き込むように聞いてくる。

「別に喧嘩してませんから」

エリはつつけんどんに言い返し、そのまま去ろうと歩き続けた。

「どこに行くの？」

「帰るんです」

「どこに？」

そう聞かれ、エリは立ち止まる。自分はどこに帰るのだろうか。自分の帰る場所はどこだろうか。家？いや、家には帰れない。母は娘が帰ってきたら邪魔で仕方ないだろうし、何より母の待つ家には何があっても帰りたくなかった。じゃあ渋谷？またあの街に戻るしかないのだろうか。

「また夜の街に戻るの？」

女刑事はエリの心を見透かしているように言う。

「うるさい！」

エリは思わず大きな声を出す。だが、出した後に、またこの女刑事に対して感情を露にってしまった自分がいることに気付く。

「…関係ないでしょ」

一気にトーンダウンしたエリは、ゆっくり振り向く。その視線の先に見たものは、女刑事の顔ではなく、開いた助手席のドアであった。「乗りなさい」

女刑事は助手席のドアを片手で押さえながら、先ほどと変わらぬ微笑を浮かべていた。

「え？」

「帰る所ないんでしょう？今日だけ私の家に泊めてあげるわ」

「な、何で刑事さんの家に泊まらなきゃいけないのよ。ほっといてください」

エリは急な話に驚きながらもすぐに拒否する。刑事の家になんて死

んでも行きたくなかった。

「あなた、私の名前覚えてる？」

「名前？」

そういえばこの女刑事の名前は知らなかった。いや、事件の日、美優の携帯から掛かってきた時に聞いたような気がするが、全く覚えていなかった。

「…覚えてません」

「でしょうね」

「何？」

「榎村。榎村麗子」

「榎…村？」

その名前を聞いてもピンと来なかったエリだったが、次の女刑事の言葉を聞いて、驚愕する。

「青崎高校3年A組担任、榎村隼人の姉です」

「え！？……嘘でしょ？」

「嘘じゃないわよ」

エリは驚きのあまり言葉が出てこず立ち尽くしてしまった。そんなエリに、麗子の穏やかな声が届く。

「神谷エリさん。私は刑事としてじゃなく、榎村麗子としてあなたと話がしたいわ。あなたも誰かに聞いてもらいたいことがたくさんあるんじゃない？」

どうしてこの人はこんなに人の心が読めるのだろうか。もしかして自分はかなりわかりやすい人間なのだろうか。エリはなぜかそんな場違いなことを思う。

本当は全部誰かに話したかった。自分の苦しみを誰かに聞いてもらいたかった。そして、これからどうすればいいのか教えてもらいたかった。

「さあ、乗って？」

それでもエリは迷っていた。榎村麗子として話したいと言ったが、やはり警察を信用することは出来なかった。そう思い、ふと麗子の

顔を見ると、彼女の口元には、いや、彼女の全身から、刑事として対峙していた時に感じた威圧感が消えていた。残っていたのは、槇村麗子の優しさだけだった。

「……はい」

いつの間にかエリは返事をしていた。麗子はその返事を聞くとエリの横まで来て、そつとエリの肩を抱き車まで歩いた。

助手席に乗り、シートベルトを締めると、麗子が運転席に乗り込む。乗り込むのと同時に、エンジンが唸りをあげて掛かり、辺りに轟音が轟いた。

「今日は安全運転で帰ることにするわ。弟の生徒を怪我させたら怒られちゃうから」

そう言う麗子の顔は、イタズラをしようとする少女のように可愛らしかった。エリは、麗子の刑事の時とは全く違う表情に思わず微笑み返す。麗子のことを信頼し始めている自分に驚きながら。だが、次の瞬間その微笑みは恐怖に歪む。麗子の運転する車は、風のように病院の正面玄関を吹き抜けて行った。

隼人

隼人は病院のロビーから走り去る姉の車を見送った。そして、先ほどロビーで交わした姉との会話を思い出しながら、美優の病室に向かって歩き出す。

「どうするつもり？」

「今、考えてる」

「まだ考えてるの？」

「ああ」

「ダメ教師ね」

「…かもしれないな」

「……私が彼女と話すわ」

「姉貴が？」

「ええ。私が」

「どうして？」

「あんたが何にもしないからでしょ」

「……」

「女の子同士のほうが話しやすいかもしれないし」

「…そうかもな」

「そうよ。いつもあんたが邪険に扱う姉をちょっとは信じなさい」

「邪険に扱ってるつもりはないよ」

「そう？そうは見えないけど、まあいいわ。とにかく私がエリちゃん

んと話すから、あんたは自分の出来ることをさっさと見つけなさい。

じゃあね」

世界一女らしくない女が、自分のことを女の子と言うのはどうかと思っただが、隼人にはエリや美優の為に自分の出来ることをまだ見つ

けることが出来ていなかったの、何も反論することが出来なかった。

自分のは何が出来るのだろうか。エリを救う、特別なことが出来るだろうか。そんなことは到底出来そうにない。自分出来ることと言え、せいぜい話を聞くことくらいだ。だが、そんなことではエリを救うことは出来ないだろうし、それ以前にエリが自分に話をするととは思えなかった。

他に出来ることはないだろうか。隼人は考え続けていた。そして、これからも考え続けるしかないだろう。エリを救うことが出来るかはわからないが、とにかく考え続けるしか、隼人には思い付かなかった。転任してきて以来、自信を失いかけている自分を叱咤するよ、うに、歩を進めることしか、今の隼人には出来なかった。

美優の病室の前に立ち、隼人は大きく深呼吸する。肺に空気が送り込まれる、幼いころから慣れ親しんだ感覚が、隼人の気持ちを落ち着ける。

「俺が、神谷エリと佐藤美優の担任だ」

もう一度、大きな深呼吸をして隼人は病室のドアをノックした。

エリ

麗子の運転する車は、信じられないくらいのスピードで走り、エリは目を瞑り、必死にそのスピードに耐えていた。ほんのわずかな時間目を瞑っていたはずのエリが次に目を開けた時には、車はもう停止していた。

停止した車の中で、エリが放心状態になっていると、麗子が身を乗り出すように目を覗き込んでくる。その表情は楽しげで、エリが放心状態になることを予想していたかのようにだった。

「大丈夫？」

全く心配していない口調で聞く麗子に腹が立つ。はずだったが、あまりにも衝撃が大き過ぎたのか、エリは自然と首を縦に振っていた。

「…大丈夫です」

「そう。よかったわ。じゃあ行きましょ」

そう言うと、麗子はあっという間に車から降り、スタスタと歩き始めてしまう。エリはフラフラする体を必死に動かし、麗子の後を追った。

麗子の後ろを歩きながら、エリは少しずつ冷静さを取り戻し、周りを確認する余裕も出始めていた。歩きながらゆっくりと周りに視線を巡らせてみる。おそらく今いる所は地下駐車場だろう。いつ地下に下りたのかもわからなかったが、ここが麗子の自宅なのだろうか。麗子は相変わらずかなりの早足で歩いているが、その歩き方はとても美しく、あの槇村隼人と姉弟だとは思えなかった。

しばらく歩くと、麗子はエレベーターの前で立ち止まり、上ボタンを押す。

「何階に住んでるんですか？」

エリは無言の空気が嫌で、たいして気にもならないのに質問をしていた。

「7階よ」

「結構高いんですね」

「10階建てだったかな。駐車場に入る前に見なかったの?」

「そう…でしたっけ?あんまり見てなかったから」

エリは内心、見れるわけねえだろ!と思っていたが、口には出さずに、適当にごまかす。そんなエリの答えを聞いて、麗子は首を少し傾げ、微笑んでいた。その瞬間、エリはこの女刑事がわざとそんなことを言ったのだと気付いた。

「悪魔!」

……そんなことを麗子に言えるはずもなく、エリは降りてくるエレベーターの階数表示を睨み付けていた。

チン。という最新のマンションには似つかわしくないレトロな音とともに、扉が開き、麗子とエリはエレベーターに乗り込んだ。

「ご飯食べた?」

エレベーターが動き出すと、麗子が正面を向いたまま聞いてくる。

「まだです」

「そう。じゃあ麗子姉さんがあなたに手料理をご馳走してあげる」

「姉さん?」

麗子の言った言葉に、エリは思わず笑い出しそうになる。だが、当の麗子は真剣そのものという表情のままだった。

「そうよ。端から見れば姉妹みたいに見えるでしょ?」

「姉妹って…」

2人の年齢差を考えれば到底姉妹とは思われないだろうが、見た目だけで言えば、麗子の言うように姉妹に見えてしまうのが不思議だった。

「それは、あたしが老けてるってことですか?」

エリは、実際には全く腹を立てていなかったが、少しだけ不機嫌そうな声に変えて問い質してみる。「まさか。エリちゃんが老けてるんじゃないくて、私がピチピチなのよ」

麗子はエリのそんな変化など無視し、開いたエレベーターの扉から、

さつと7階フロアに足を踏み出す。

「ピチピチなんて今時使わないっつうの」

麗子には聞こえないくらいのでエリは呟き、その後ろ姿を追い掛け、エレベーターを抜け出す。そうやって1人文句を言うエリは、ほんの少しだけ微笑んでいた。

美優

シン、と静まり返った病室に、美優は1人横になっていた。先ほどまで隼人が椅子に座り、たくさん色々な話を聞かせてくれていたが、好子と一緒に帰ってしまったからは、ずっと1人だった。隼人は事件については何も聞いてこなかった。美優のケガの状況と、心の状況、それだけを確認しに来たようだった。

結局、誰にも本当のことは話さなかった。1度も嘘をついたことがない母親の好子にも話さなかった。だが、本当にこれが正しい選択なのか、美優にもわからなかった。エリを守るつもりで嘘をついたが、嘘をつくことがエリを守ることになるのだろうか。エリがもし、あの3人と付き合い続けたら、もっと取り返しのつかない事件を起こすことになるかもしれない。そうなったら、美優がエリの為に嘘をついたことが、逆にエリを深く真つ暗な穴底に突き落としたことになるのかもしれないのだ。そう考えると、美優には何が正しいのかがわからなくなってしまうのだった。

“トントン”

美優が、答えの見つけることの出来ない問題に頭を抱え悩んでいると、ノックの音が弱々しく病室に鳴り響いた。こんな時間に誰だろうと時計を見ると、夜の8時を回ったところだった。面会の時間は過ぎているのに病室まで来るということは、警察かもしれない。

「…はい」

そう思った美優は、警戒しつつ返事をする。だが、返事をして扉が開く気配がなく、しばらく待っても全く動きがなかった。もしかしたら声が聞こえなかったのかもしれないと、もう一度返事をしようとした時、ようやく扉が開いた。

警察が立っていると警戒していた美優は、扉の向こうに現れた予想外の顔に衝撃を受ける。

「やあ」

扉の向こうに立っていたのは、大村晃太であった。美優は晃太の突然の出現に言葉を発することが出来ず、ただ呆然と晃太の顔を見つめてしまった。

「元気？」

「え？」

混乱した美優の頭には、“元気”というたった3文字の言葉でさえ、理解不能になってしまっていた。

「元気？」

「あ、うん。元気だよ」

美優の見つめ続ける視線に、晃太は恥ずかしそうに下を向いてしまう。晃太のそんな姿を見て、自分が見つめ続けていたことに気付いた美優も、思わず赤面してしまった。

「…そつか。よかった。看護婦さんをお願いしたら、少しだけなら面会してもいいって言われて」

「そうなんだ。あ、入って？」

「うん」

未だに扉の向こうに立ち尽くしていた晃太は、どこかギクシヤクした動きで、ベッドサイドまで歩いて来て椅子に腰掛けた。美優はあまりの緊張に頭が働かず、何の言葉も浮かんでこなくなってしまう。

「ケガの具合はどう？」

「え？」

真っ白になっていた頭の中に突然晃太の声が響き、美優はまたも聞き返してしまう。自分が日本語を忘れてしまったのではないかと思ってしまうほど、晃太の言う言葉の意味が理解出来なかった。

「ケガの具合はどう？」

「あ、うん。全然平気だよ。意識がなかったなんて信じられないくらい」

「そうなんだ。美優ちゃんがケガしたって聞いてびっくりしたけど、

本当に良かった」

「びつくりだよ。階段から落ちて死にかけるなんて自分が一番びつくり。まあ昔からタンスの角に小指ぶついたり、窓が開いてると思っただけで走って行ったら閉まっててぶつかつたりとかはよくあるんだけどね。けど死にかけるほどのドジなんて恥ずかしいよね。他にもドジはたくさんあるんだけど、例えば……」

「フフ」

「え？」

「あ、ごめん。美優ちゃんが元気そうでよかったと思って」

気付けば無意識のうちに喋り続けていた美優は、晃太の笑いで我に返り、恥ずかしさであっという間に真っ赤になってしまった。晃太と話している時は何度も赤面してしまう。

「ごめんね。ペラペラ喋りまくっちゃって。なんか恥ずかしい」

「ううん。全然大丈夫。美優ちゃんの話聞いてると楽しいし」

「本当？」

「うん」

「じゃあよかった」

喋っている間、晃太と同じようにずっと下を向いていた美優は、ふと晃太の顔を見る。すると、晃太も美優のことを見ていた。普段なら恥ずかしさですぐに目を逸らしてしまう美優だったが、この時はなぜか目を逸らしてはいけなような気がして、じっと晃太を見つめていた。

そんな風に見つめ合っていると、徐々に晃太の顔が近付いてくるように感じる。錯覚かと思っただ、それにしてもやけに近くに晃太の顔が見えた。

ゆっくりと近付いてくる晃太。

晃太の顔がどんどん大きくなる。

50cm、40cm、30cm、20cm……。

「そ、そろそろ帰るね」

「ふえ！？」

「じゃ、じゃあまたメールするね。あ、やっぱり電話のほうがいい？あ、けど病院だしメールのほうがいいのかな？あ、けど病院なんだからメールもしないほうが、……あの、とにかくまた連絡するね。じゃあ、おやすみ」

「え！？あ、うん……」

美優が返事をした時には、晃太の姿はどこにもなかった。

ベッドに座り、呆然としていた美優は大きく息を吐き出し、苦笑してしまう。

「おやすみ。大村くん」

そう言い、布団に潜り込んだ美優は、晃太とどんなことを喋ったか改めて思い出そうとした。しかし、どれだけ考えても、自分が何を喋っていたかまるで覚えていなかった。喋った内容どころか、晃太が病室の扉の向こうに現れた瞬間から先のこと全てが、おぼろ気で霞が掛かったかのように不鮮明になってしまっている始末であった。ただ、どんなに混乱した頭であっても、真実は話さなかった。あくまで自分で落ちたと言い張った。それが、月明かりに照らされる病院の硬いベッドの中で、美優の出した答えであった。

エリ

目の前をユラユラと立ち上る湯気を見ながら、エリはなぜここに来てしまったのかを考えていた。先ほどまで、麗子の作ってくれた料理を食べ、今は高級そうなソファに座り、麗子が淹れてくれた、これまた高級そうなコーヒーを飲んでいる。麗子はシャワーを浴びてくると言い、部屋に入って行ってしまった。おそらく浴室なのだろうが、エリにはわからなかった。

麗子が作ってくれた手料理は、手の込んだものではなかったが、とても美味しかった。適当に野菜を放り込んでいるように見えたスープも、口に入れてみると感動すら覚えるような美味しさだった。パンプキンやサラダも美味しかったが、はつきり言って手料理と呼べるものはスープしかなかった。高級そうな物ばかりの部屋で、料理だけは安っぽかったが、そんな料理でもエリには久しぶりの手料理であった。

なぜついて来てしまったのかわからなかったが、麗子と話しているとかを隠したり、意地を張ったりすることが、どこまでも無意味な気がしてしょうがなくなってしまう。エリの頭の片隅では、もう1人の自分が、「まだ逃げる事が出来る」と必死に呼び掛けているのが聞こえたが、エリはその声を無視して、ここにいることを決めた。

「エリちゃんもシャワーどう？」

エリがもう1人の自分と格闘していると、背後から麗子の声が聞こえ、思わずドキッとしてしまう。だが、振り返って麗子の姿を見た瞬間に、エリの心臓はさらに跳ね上がった。そこに立っていたのは、バスローブを着た麗子だったが、その頬にはほんのり赤みが差しており、艶やかな黒髪や、スラッと伸びた長い脚も相まって、驚くほどに美しかった。こんなにも刑事らしくない刑事を見た

のは初めてで、エリは麗子から視線を外すことが出来なくなってしまう。

「…何？」

あまりにもエリが見つめていたのを訝ったのか、麗子はそう聞いてくる。その時になってようやく、エリは自分が麗子のことをずっと見つめていたことに気付く。

「あ、いや、何にもない…です」

エリは急に恥ずかしくなり、下を向きながら答えるが、使い慣れない敬語がたどたどしくなってしまう、顔を上げられなくなってしまう。

「そう？で、シャワーどうするの？」

麗子はそんなエリの反応を楽しんでいるかのようにニヤニヤしながら聞き直してくる。

「えっと…後でいいです」

麗子の対応にエリは少しムツとするが、不思議と腹は立たなかった。

「そう。じゃあ…っと」

麗子はエリの横に座り、ゆっくりとタバコに火を点ける。そして、

「さあ、話してごらんなさい」と言い、深々とタバコを吸い始めた。

「何を？」

エリには何を話さなければいけないのかよくわかってはいたが、それでも敢えて聞き返す。麗子に話しやすいきっかけを作ってもらいたかった。

「あなたの話したいこと」

だが、麗子は正面を向いたまま、タバコの煙が宙に漂うように、緩やかに言う。

「え？」

エリはてっきり、麗子が事件のことを聞きたがっていると思っていたので、そんな抽象的なことを言うとは思わなかった。

「みいがなんで落ちたのか聞きたいんじゃないの？」

「みいちゃん？あれはみいちゃんのドジ話でしょ？」

「でも…」

「そんな話がしたいの？」

正面を向いていた麗子がゆっくりとエリのほうに顔を向ける。その目は穏やかで、それでいて、エリの心の最も暗い部分を睨み付けるようであった。

「あなたが私に話したいことはそんなことじゃないでしょう？あなたの話したいこと、あなたの全てを教えて？」

「私の全て？」

そう言われても、エリには何を話せばいいのかわからなかった。麗子のほうを見ても、すでに麗子は正面を向いて、タバコを吸い続けていた。

「私の…全て」

そう声に出してみると、なぜか、今まで自分に起きた様々な出来事が頭の中に溢れてきて、自然と口が動いていた。

「小学校までは、ごく普通の女の子だった…と思う」

「じゃあ、なぜ中学校に入ってから変わってしまったの？」

麗子の、穏やかで優しい声が、エリの耳にゆっくりと到達し、エリの次の言葉を誘う。

「きっかけは…なんだろう？…親の離婚かな？」

「離婚？」

「うん。離婚自体はこの家でもよくあることだし、別に大したことないって思う。だけどやっぱり、少しだけ落ち込んだのは否定できない。…そんな時期にあいつに会ったから」

「あいつ？そのあいつがあなたの人生を変えたのね？」

じつと前を向いて話を聞いていた麗子が、エリの瞳を覗き込むように聞いてくる。エリの話が、最も重要な部分に到達したと、感じ取ったのかもしれない。

「どうだろう？もちろんきっかけにはなったかもしれないけど」

「聞かせて？」

「初めて会ったのは中1の春先くらい。親が離婚して2週間後くらいだったかな。母親は毎日パソコンに向き合って難しい仕事ばっかしてた。だからあんまり家に居たくなくてよく1人でプラプラしてたの。そしたら男が声掛けてきて、それが龍二だった」

「りゅうじ？それがあいつ？」

「そう。ナンパ。そんな龍二は高2で、あいつはあたしのこと高校生くらいだと思って声掛けてきたみたい。あたし結構ませて、中学生なのに化粧とかもバツチりだったから。けどまさか高校生に見られるとは思わなかった」

「それで？」

「向こうがあたしのこと高校生だと思ってるのに、実は中学生です。なんて言ったらバカにされる気がして、遊び慣れたる女子高生って感じで演技した。そしたら遊び行こうって言われて、好奇心で行ったの」

「どこに連れて行ってもらったの？」

「ゲームセンター。ゲーセンなんてプリやりに行くくらいしか用ないからあんまり好きじゃなかったけど、龍二と話してると楽しかった。その後は龍二の家に行って、キスして、そのままSEXした。遊び慣れたる演技してたけど、やっぱりヤツたら一発でバレちゃって。そんな時に龍二がね、奪っちゃったから一生大事にしなきゃな。って言ったの」

エリはその時の情景を思い出し、思わず吹き出してしまった。

「フツ。今思うとホントにバカバカしい。遊びで、やりたくて甘い言葉囁いただけなのに、そんなあたしは夢見る少女だったから信じちゃった」

「騙されたの？」

「騙すほどのことでもなかったよ、きつと。だって合って3時間後には裸で抱き合ってたんだから」

「…そう。それから？」

「それから2週間くらいは毎日会ってSEXした。数えきれなく

らいヤリまくった日もある。だけど、突然連絡着かなくなって。心配になって家まで行ったらすごい勢いでキレられた。勝手に来るな！中学生だって知ってるんだ！騙しやがって！って言われた」

エリの頭には、その時の龍二の顔が昨日のことのようにはつきりと映っていた。大事なものが消えてしまった瞬間。あっという間に無くなってしまった何か。それが何なのか、5年近く経った今でもわからなかった。

「だけど本当の理由は別にあつた。それをエリちゃんのせいにして逃げたんだ。そいつ」

エリの回想は、麗子のステップを踏むような軽快な言葉によって遮られる。麗子は、何でもないことのように真実を言う。

「麗子さんって、何でもわかるんですね」

エリは麗子の勘の鋭さに、改めて舌を巻く思いで言う。

「そりゃ30数年生きてれば、浮気されたり、したりくらいあるわよ」

「…したこともあるんだ」

「私みたいな美人は男がほつとかないのよ」

確かに麗子くらいの美人なら仕方ないかもしれない、とエリは妙に納得してしまった。

「それで？」

脱線しかけた話を、麗子がすぐに戻す。

「もうわかっていると思うけど、龍二には彼女がいて、その彼女にあたしのがバレそうになって慌ててあたしのことを切つたみたい。夢見る少女のあたしでもさすがに気付いた」

「気付いて、どうしたの？」

「別にどうもしない。ただ、何もかもめんどくさくなって、壊れちゃった」

「壊れた？」

「そう。神谷エリは壊れちゃいました」

エリは無理に笑顔を作り、おどけてみせる。だが、麗子はそんなエ

りの姿を見ても、顔色一つ変えない。

「壊れるって、具体的にはどういう風に？」

顔色一つ変えずに質問してくる麗子のことを見つめながら、こんな人がホントにお姉ちゃんだったらな。などと、全く関係ないことをエリは考えていた。

「具体的には、援交とかかな。自慢じゃないけど、お金くれた奴とやらなかったことないよ」

「本当に自慢じゃないわね。そんなこと刑事に自慢する娘いないもの」

麗子のキツイツッコミに、エリは麗子が刑事だということを思い出す。不思議なことに、麗子と話し出してから、麗子が刑事だということをしつかり忘れてしまっていた。

「他に犯罪は？」

「え？」

突然麗子の口から出た不穏な言葉に、エリは言葉を失う。

「犯罪？」

「そう。援交は犯罪よ。他には？」

「他？えっ…と」

犯罪という言葉と、目の前にいる女性が刑事だったという事実が、エリの言葉を詰まらせる。

「ほら、早く言いなさい。お姉ちゃんに」

言葉に詰まるエリに、麗子が掛けた魔法は、エリの心の氷を溶かすには十分過ぎるものだった。

「お姉ちゃん…」

「そう。全部話しなさい。お姉ちゃんに」

「…援交、万引き、リンチ、恐喝、後は、シンナーかな」

「シンナーはずっと？」

「ううん。ちよっと吸ったら気持ち悪くなってすぐやめた」

「覚せい剤は？」

「やったことない。高いし、あたしのとこに来る前にみんなが買っ

「ちやうから」

「じゃあ来たら買ってた？」

「たぶん」

「そう。じゃあ運がよかったのね」

麗子はホツとしたようにそう言う。

「運がいいのか悪いのかわからない。みいにあんなことするなら、薬中になってたほうがよかったのかも」

エリはまたおどけたように笑顔を作って麗子を見る。相変わらず麗子の表情は変わらない。と思った瞬間、麗子の顔がみるみる赤くなつていった。

「ふざけないで！いいに決まってるでしょ！次そんなこと言ったら私はあなたを許さない！」

麗子の物凄い剣幕に、エリはたじろぎ言葉が出てこない。少しの声も出せないまま下を向いてしまい、顔を上げることが出来なくなつてしまった。しばらくすると、麗子が吐息を吐き出すのが聞こえてきた。

「エリちゃん」

呼び掛けられ、恐る恐る顔を上げると、そこには穏やかな表情に戻つた麗子が優しく微笑んでいた。

「エリちゃん。これだけは約束して。二度と自分で自分を傷付けるようなことは言わないこと。わかった？」

「……はい」

「いい子ね」

返事をして再び俯いてしまったエリの髪の毛を、麗子が優しく撫でる。こんなに叱られたのはいつ以来だろうか、思い出すことが出来なかった。エリは叱られて涙が出そうになる自分に驚き、思わず麗子のバスローブを掴む。そんなエリの心境に気付いたのか、それまで優しく撫でていた麗子の手に少しだけ力が加わり、エリの頭はゆつくりと麗子の胸に抱き寄せられた。

「お母さんから連絡はないの？」

その状態のまましばらく時が経ち、エリの心も平静を取り戻し始めた頃、頭上から麗子の声が出た。その声は先ほどまでの美しい声音ではなく、少しだけ掠れていたが、それでも相変わらず優しい響きを保っていた。

「…ない。うちの親はあたしがどうなるうと関係ないから」

エリは麗子の胸に顔を埋めたまま、自嘲気味に言う。また麗子に叱られると思ったが、麗子から返ってきた声は、意外にも穏やかなままだった。

「さっきの約束、もう忘れたの？」

「…ごめんなさい。だけどホントのことだから」

「どうしてそう思うの？」

「だって、最初の頃は毎日電話あったし、メールも来てたけど、今は全然連絡ないから。たぶん諦めたんだよ。あたしなんか娘じゃないって思ってるよ、きつと」

麗子との約束を破るつもりはないのに、自然とネガティブなことがかりが口から出てしまう。止めたくてもどうしようもなかった。

「確認したの？」

「何を？」

「お母さんがあなたのことを娘だと思ってないって」

麗子が言った言葉の意味が一瞬わからなかったが、エリはすぐに苦笑する。

「確認するわけないじゃん」

「どうして？」

「わかりきってるもん」

そうエリが言うと、麗子が再び吐息を吐くのが聞こえた。

「確認しなきゃダメよ。自分で勝手に決めつけちゃダメ。あなたの想いを言葉にしなさい。そして、相手の想いをしっかり聞きなさい」
エリにはよく意味がわからなかった。言葉にしなくても、相手の態度や行動などを見ていれば、相手が自分のことをどう思っているのかわかるはずなのに。それをわざわざ言葉にしたら、逆に傷付くで

はないか。そう思ったエリは、麗子の言葉に反応することが出来な
いまま、黙り込んでしまった。

麗子もしばらく何も言わなかった。それから数分が経った頃、「み
いちゃんは？」と麗子はようやく言う。

「みい？」

突然麗子の口から美優の名前が出たので、エリは動揺してしまう。

そして、次にどんな質問が続くのか不安になる。

「みいちゃんは親友でしょう？あなたのことを理解してくれてるん
じゃない？」

エリの心配をよそに、麗子は事件とは全く関係のないことを聞いて
くる。エリは一瞬の間の後、美優のことを真剣に考える。

「…どうだろう」

いくら考えても、美優がなぜこんなにも自分のことを大切にしてく
れるのか全くわからなかった。

「みいちゃんはあなたのことが本当に大好きなのね。目が覚めて真
っ先にあなたのことを心配していたみたいだから。自分に何が起き
たのかなんて全然気にしていなかった。そんな彼女のことをあなた
はどう思ってるの？」

そう言われ、次は自分が美優のことをどう思っているのかを考えて
みる。

痛々しい包帯姿の美優。

笑顔の美優。

今にも泣き出しそうな顔をする美優。

いつも横にいた美優。

どこにいてもすぐに来てくれた美優。

そんな美優のことを、自分はどう思っているのか。

「わかんない…」

わからなかった。だが、その時エリの脳裏には、意識を取り戻した
美優が必死に自分のことを庇おうとしている姿が、はっきり映し出

された。

「わかんない。けど…」

「けど？」

「みいのこと、守りたい」

聞こえただろうか。麗子の胸に抱かれたまま言ったので、聞こえたかどうか不安だった。

「…そう」

そんなエリの不安は、しばらくして聞こえてきた麗子の返事によって解消される。だが、聞こえてきた麗子の返事は、今度は完全に掠れて、聞き取ることも困難であった。

再び部屋が静寂に満たされようとした時、携帯のバイブが振動する音が部屋に響き渡った。その音に麗子が反応して立ち上がる。

「ちよつと待ってて」

小さな声でそう言つて、麗子は携帯を開き誰かと話しながら奥の部屋へと消えて行った。

エリはソファ―に座り直し、麗子との会話を思い返す。麗子に自分の過去をほとんど話してしまった。こんなに1人の人と会話をしたのはいつぶりだろう。思い出すことが出来ない。会話をしたと言っても、ほとんどエリが一方的に喋るのを、麗子が聞いているだけではあったが、それでも誰かが話を聞いてくれるということが、こんなにも自分を安心させてくれるものだと露ほども知らなかった。

誰かに叱られることがこんなにも恐ろしいということも初めて知った。今振り返ってみると、麗子に見放されたらどうしようかと思ひ、涙が零れるほど激しく動揺してしまった自分に心底驚いてしまう。

母との今の関係についても初めて誰かに話したが、エリが麗子と話していて唯一納得がいかないのがこの部分だった。なぜわかり切ったことをわざわざ確認しなければならぬのか。もう何年も連絡は来ていないし、学校の行事に親を呼んだこともない。三者面談なども全て無視してきたが、親や教師が何か言ってくることもなかった。確かに毎日学校に来ているので、安否に関しては問題ないにしても、

娘が毎日学校に来ているからといって、連絡もせずに放っておく親がいるわけがないのだ。何度考えても、母が自分を心配しているようには思えなかった。

エリがそんなことを考えていると、奥の部屋の扉が開き、麗子が現れた。麗子の格好は、先ほどまでのバスローブ姿ではなく、Ｔシャツにジーンズという軽装に変わっていた。

「ちょっと呼び出しを受けちゃったから出るわ。この部屋が寝室だから眠くなったら使って。じゃあ行くわ」

麗子は奥の部屋を指差し、早口でそう言いながら足早に玄関に向かう。エリは麗子が一度も振り向かないことを不審に思うが、あまりに早い行動に少し虚を衝かれ、呆然と見送ってしまう。

靴を履き、そのまま何も言わず出ていくと思われた麗子は、玄関のほうを向いたまま話し始める。

「ねえ。エリちゃん」

「はい」

麗子そのまま出ていくと思っていたエリは、麗子に話し掛けられ、再び虚を衝かれる。だが、返事は自然と出ていた。

「壊れたものは、修理出来るのよ」

「え？」

「おやすみなさい」

麗子はそれだけ言うと、暗闇の向こうに消えてしまった。残されたエリは、麗子が最後に残した言葉の意味を考える。

こんな風になつてしまった自分を元の自分に直すことが出来るのだろうか。そんな可能性は全くないように感じる。だが、エリが今一番信頼出来る大人だと思い始めている麗子は、直せると断言した。

エリの頭の中では、“壊れたものは修理出来る” “確認しなきゃダメ” という、2つの言葉が目まぐるしく周り続けていた。その時、エリの携帯が大きな音を響かせ鳴り始めた。久しぶりに聞く自分の携帯の着信音に少し驚き、慌てて携帯を掴むと、そこには、“知香” と表示されていた。突然知香から連絡が来たことに、エリはどう

しよつもないくらいに不安を感じてしまう。なぜ今頃になって急に連絡をしてきたのか。まず間違いなく知香はエリが美優にしたことを知っているだろう。そう考えると、そのまま携帯を机に放り投げそうになってしまう。そんなエリに携帯を握り締めさせ続けていたのは、着信音以上の音量で頭の中に響き続ける、麗子が言っていた2つの言葉だった。そして、エリは携帯をゆっくりと開いた。

麗子

昼間とは全く別の顔を見せ始めた夜の街を、麗子の車が疾走していた。爽快に走り続ける車とは対称的に、車内の麗子の心境は重く、どんよりとしていた。

始めはエリがどのようにして現在に至るのかを聞きながら、麗子は呆れに近い感情を抱いていた。両親の離婚と男の裏切り。たったこれだけのことで壊れてしまうエリの心が理解出来なかった。あまりにも弱すぎる。そう思った。だが、エリにもそれはわかっていたのだ。わかっていながらもどうすることも出来なかったのだ。そうやって苦しんでいるエリを誰が救おうとしたのか。答えは、誰も救おうとしなかった。誰も手を差し伸べようとしなかった。エリに不良のレッテルを貼って誰も近付けようとしなかったのは、他でもなく自分たち大人だった。彼女の中に、大人たちの身勝手さや狡さを垣間見た気がした。その瞬間、麗子は無性に悲しくなった。

麗子は車を停車させ、携帯を開いた。電話帳から隼人の番号を呼び出す。

「はい」

3コール目で隼人は電話に出た。

「私。麗子よ」

「ああ」

しばしの沈黙。

「どうだった？」

隼人は勢い込むわけでも、変に冷静さを装うわけでもなく、普段通りの弟だった。

「話は聞いたわ」

「原因はわかったか？」

「ええ」

「話せるか？」

「聞きたい？」

麗子がそう聞くと、隼人の言葉が止まった。聞きたいはずなのに、なぜか隼人は何も言わず黙っている。麗子は痺れを切らせてもう一度尋ねた。

「聞きたくないの？」

「俺には自信がない」

「え？」

予想だにしない隼人の答えに、麗子は戸惑い二の句を継げなくなる。すると、隼人はゆつくりと話し出した。

「こんなことを言うと担任失格、いや、教師失格かもしれないけど、佐藤がケガをしたって聞いた時、真っ先に頭に浮かんだのは神谷の顔だった。信じられないよな。教え子をケガさせたのが教え子だなんて考える教師。自分でも信じられなかった。そんな俺が神谷に何ができる？ 1度は彼女を疑った俺が、今さら何ができる？ 俺が何を言っても神谷には響かない。そんな気がするんだ」

ゆつくりとだが、一気に話し切る弟の声。その声を聞いているうちに、麗子が必死に押し返していた感情の波が、堰を切ったかのように流れ込んでくる。気付くと、麗子は涙を流していた。その涙を拭おうともせず、麗子が話す。

「逃げてきたの」

「え？」

麗子の言葉に、次は隼人が戸惑っていた。だが、麗子は構わず続ける。

「あの子は気付いてる。自分がどれだけ愚かで馬鹿か。気付いてるけどどうすることも出来ないのよ。なぜだかわかる？ 誰も教えてあげなかったからよ。誰も救おうとしなかったからよ。だから戻り方がわからないの。戻ることが出来ないならどうすればいい？ 進むしかないじゃない。間違ってるってわかってても、進む以外に道がないんだもの。彼女にこんなにも痛くて辛い道を進ませたのは私た

「ちよ」

麗子は一息にそこまで喋ると、大きく深呼吸をした。肺に空気が送り込まれる感覚が、麗子を落ち着かせた。弟も何かある度にこうして深呼吸をしていたな。なぜか麗子はそう思った。

小学校の学芸会で初めてセリフを貰った時も、中学で生徒会長に立候補した時も、教育実習初日の朝にも、大事な時にはいつも深呼吸していた。そして、弟はその度に成功させてきた。

「エリちゃんの為に闘っているのはみいちゃんだけだった。結局私も何も出来なかつたんだもの。エリちゃんと一緒にいるのが辛くて、メールが来ただけなのに電話のフリして逃げてきちゃった」

麗子は、先ほどとは打って変わって、ゆったりとした口調で話す。すると、それまで黙って聞いていた隼人が麗子と同じようなゆったりとした口調で言う。

「もう一度考えてみる。俺に、神谷エリの担任に何が出来るか」
隼人はそれだけ言うと電話を切った。

麗子はもう一度大きく深呼吸をし、そのまま窓の外に目を移す。窓の外には、決して眠ることのない首都東京が広がっていた。この地に、大人から見捨てられた子供が何人いるのだろうか。繁栄がもたらした絶望を、最も背負わされたのは自由を与えられた眠らない子供たちかもしれない。

麗子は、ネオンが光り輝く東京の闇に向かって、再び車を走らせた。

エリ

「もしもし」

エリは、知香からの電話に無意識に近いうちに出ていた。携帯を開き、通話ボタンを押す自分の姿がどこか遠くに見える気がしていた。「もっしい。エリ？」

久しぶりに聞く知香の声は、普段とほとんど変わらないように感じた。唯一変わったことといえば、電波の向こう側にいる知香の周辺が静かのことくらいだ。知香や靖子と話す時は、必ずと言っていいほど周辺が騒がしい。クラブやゲームセンターにいたことが多いからだ。だが、今日の知香の周辺からは何の雑音も聞こえてこなかった。

「どうしたの？」

エリは、知香がなぜ電話をしてきたのか恐る恐る尋ねる。すると、知香は電話の向こうで大きな声で笑い始めた。隣に誰かいるようで、その誰かにエリの言葉を伝えて、一緒に笑い出す。なぜ知香が笑うのかがわからず、エリは不安になる。知香は横にいると思われる誰かとひとしきり笑い合った後、思い出したようにエリに言う。

「なんでそんな声小っちゃいのさ？エリらしくなくて笑える…プツ」
そこまで言うと、知香は再び笑い出す。エリは状況があまり飲み込めていなかったが、知香が事件のことで電話をしてきたわけじゃないことがわかり、安堵した。

「あたしはいつも声小っちゃいし」

「まあ、それもそうだね」

笑いながら話す知香の声を聞いていると、エリも少しだけ元気になったような気がして、普段通りに話せるようになっていた。

「で、何の用？」

「え？ああ。用はないけど最近連絡ないからちょっと心配しただけ

「さあ」

「心配？」

知香の口から心配などという単語が出てくると思っていたいなかったエリは、思わず聞き返してしまう。

「なにさ。うちが心配するのおかしい？」

それをどう取ったのか、知香は一段と大きな声で怒りを表現してきた。だが、その声は全く怒りを含んでおらず、文字通り表現しただけであった。

「おかしいよ。なんか今日の知香はおかしい」

エリは、いつも以上にテンションが高くなり始めた知香を、少し奇妙に感じていた。エリには、知香が無理にテンションを上げて話しているように感じたのだ。

「そう？いつも通りだって。そんなことより、エリはどうなのさ？」

「あたし？あたしは……」

知香の問いに言葉が詰まる。どの答えが正解なのか、エリにはその答えを導き出すことが出来なかった。

「元気？」

エリが言葉に詰まり一瞬黙ると、すぐに知香が問い直してきた。まるで、問いであり答えでもあるかのような、強い問いだった。

「……うん。元気だよ」

なんと答えればいいのかわからなかったエリは、知香の問いにそのまま答えた。

「そっか。元気だつて。……んじやいい」

その答えを聞いた知香は、安心したように隣の誰かにも伝える。エリは、知香の隣にいるのが誰なのか、半ばわかつてはいたが敢えて聞いてみる。

「誰と一緒になの？」

「誰とつて、靖子に決まってるんじやん」

やはり靖子の名前が出てきた。いつも通り2人で遊びながら、いつも通りエリに電話してきた。そんな感じだった。美優の事件などな

かったかのような自然さに、エリは戸惑い始めていた。

「てか今ひま？」

なぜ知香たちが美優のことを聞いてこないのか不思議に思っている
と、知香はこれまた普段通りにエリを遊びに誘ってくる。

「今？今は…ちよつと出てる」

「そっかあ」

「あ、でも男じゃないから。…お姉ちゃんみたいな人の所にいるだけ」

エリがそう言うと、電話の向こうからまた笑い声が聞こえてきた。

「何？」

おかしいことを言っただろうか。エリはそう思いながら聞く。

「ハハハ。だって…別に聞いてないし。エリ…やっぱりおかしい」

知香は笑いの合間に何とかそこまで言う。そして、再び爆笑し出した。エリは知香にそう言われて、自分が男の所にいることを慌てて否定していたことに気付く。その情報は確かに知香たちには全く必要のない情報であり、普段のエリならば決して言うことのない情報でもあった。

「てか、エリにお姉ちゃんなんかいたっけ？」

ひとしきり笑うと、知香はエリの言った、お姉ちゃんという言葉に疑問に思ったらしく、質問してくる。エリは麗子のことをお姉ちゃん
と自ら言ったことに今さらながら困惑し、だが、ここでまた慌てて否定するのもおかしい為、少し考えてから答える。

「まあ、お姉ちゃんみたいな人だよ。みたいな、ね」

「ふん。よくわかんないけど、まあいいや。とりあえずエリが元気でうちらも元気だし」

知香はエリの答えに納得しているのかしていないのか、というか、
エリにお姉ちゃんがいるかどうかの質問すらどうでもよかつたんじゃないかと思えるような生返事をした。その知香の反応に、エリは
少しだけムツとする。だが、心の別の場所で、普段だったらイライ
ラしてしまうが知らない知香の反応や笑い声に、今日の自分が安心感の

ようなものを感じていることに気づき、驚いていた。最初は、知香が美優のことを聞いてこないことに対する安心感だと思っていたが、本当は、知香の適当な相槌があまりにも普段通りで、そんな知香と会話をしていること自体に安心感を感じていたのだ。そして、そんな自分に思わず笑い出しそうになってしまふ。知香の言う通り、今日のエリはエリらしくなかった。

「知香って、あたしのことどう思ってる？」

エリは、その安心感に後押しされるように、自然と聞いていた。

「はあ？なんて？」

エリの質問に、知香は間の抜けた返事をする。その反応は当然の反応ではあったが、その反応によって、エリは自分がした質問があまりに突飛で、要領を得ない質問であったことに気付く。そして、気付いてしまうと、もう一度同じ質問が出来なくなってしまう。エリが何も言えなくなってしまうために、嫌な沈黙が流れる。

「人を見下してバカにしてる嫌な女」

沈黙に耐えかねたエリが、自分のした質問を撤回しようとして口を開きかけた時、突然知香がそんなことを言った。その言葉は、エリがした質問の答えだとは気付かないくらい強烈な言葉だった。だが、徐々に言葉の意味を理解すると、エリの心を再び暗い闇が覆い始める。先ほどまで感じていたはずの安心感など、一気に消え去ってしまう。知香や靖子が自分のことを好きじゃないことくらいわかっていた。わかっていたのだ。だから確認しなかったのだ。わざわざ確認した所で何の意味があるのか。結局、傷付いただけだった。

「聞こえた？」

エリがずっと黙っているからか、知香は大声で呼び掛けてくる。ほんの少し前まで安心感を感じていたその声も、今はひどく遠くに感じられ、エリは返事をするのもやっとという感じだった。だが、知香はそんなエリの変化を気にもせず、相変わらずの大声で話し始めた。その声はどこか楽しんでいるようでもあり、それがまたエリには苦痛であった。

「ちょっとキツかったあ？けど、エリが聞くから答えたんだぞお？」
「わかつてるよ。もういいから」

大声で話す知香にエリは嫌気が差し、電話を切ろうと指を動かす。そんなエリの行動を察知したのか、知香は慌てたように、「ちょっと待った！冗談冗談。ホントのこと話すよ」と言った。その言葉を聞いても、エリは全く信じる気にはならなかったが、麗子が言っていた“相手の想いを聞くこと”という言葉を思い出し、とりあえず最後まで聞いてみよう、動かしていた指を止める。

「何話してくれるの？」

エリは強い口調で知香に尋ねる。その数分後に、自分が泣き出ししてしまうことなど、この時には知る由もなかった。

「じゃあ話すよ？全部本音だかんね？」

知香は隣の靖子にも、「話すかんね」と言ってから、本当はエリのことをどう思っているのかを話し出した。その声は、先ほどまでとは打って変わって、張り詰めた緊張感を含んでいた。

「エリと初めて会ったのは1年の時だったじゃん？そんな時はあんまし関わらないようにしようって思ってた。なんでかって言うと、まあ…エリの色んな噂聞いてたからって感じ」

最後は消え入るような声だったが、エリにはしっかりと聞こえていた。エリに関する噂がどんな噂かは知っていた。その中には事実もあったし、根も葉もない嘘もあった。なので、知香から噂の内容を聞く必要はなかったのだが、知香の口から全てを聞きたいと思ったエリは、知香に言う。

「どんな噂？」

知香は少しの間の後、口を開いた。

「…それは色々だよ。…売春してるとか、目が合ったら殺られるとか」

「他には？」

「まだ聞くの？」

エリに直接噂の内容を言うのが気まずいのだろう。知香の口は次第に重くなる。

「ホントのこと言うんでしょ？」

エリはそんな知香の口をこじ開けようと、強い口調で言葉をぶつけた。

「…わかった。言うよ」

知香は溜め息を吐き出し、再び話し始めた。

「他は、ヤクザと付き合ってる。薬中。何とか中の誰それを殺した。あの時の通り魔はエリだった。とかかな。他にも小っちゃい噂はあるけどもういいでしょ？まあ、バカバカしい噂ばっかだけど、エリのこと初めて見た時は全部マジなんじゃないかと思っただよ。そんならいのオーラあったもん。ハハ」

知香はそこまで言っただが、その笑いは重く、長くは続かなかった。やはり知香や靖子は、最初から自分のことが嫌いだった。いや、嫌いどころか、関わりたくないと思っただ。これではさつきと全く同じ結論ではないか。そう思った時、エリの中にふと疑問が湧き上がった。

「じゃあなんで話し掛けてきたの？」

エリはその疑問をそのまま知香にぶつける。知香はその質問が来るとうわかっていたかのようにすぐに答えた。その答えは、エリが全く予想していなかった答えだった。

「みいだよ」

「みい？」

「みいが言いに来たんだ。私とお友達になって、エリちゃんともお友達になってほしい。って」

知香は、美優のモノマネのつもりなのか、高音でゆっくりとした喋り方で、美優の言っただと思われるセリフを言った。だが、エリの耳にはその言葉がうまく入ってこなかった。

あの時、知香と靖子が話し掛けてきた時、エリには2人が何かの目的の為に、それこそエリのバックにいると噂されていたヤクザや、

色々なヤバい連中を敵に回さないように、エリを味方に付けようと愛想を振り撒いて寄ってきたのかと思っていた。いや、美優が言いに来たと聞いて今でも、結局はそういう計算をして話し掛けてきたんだと思った。そう思ったエリは、もう一つ質問を重ねる。

「なんでそんなことくらいで話し掛けようと思ったの？」

「なんでって、あんなに頼まれちゃしようがないじゃん」

「じゃあ、あたしのバツク目当てじゃないの？」

「バツク？バツクってカバン？」

知香はエリの質問に、アホ丸出しの答えを返してきた。だが、その答えが、知香たちの目的がそんなものではないことを表していた。

2人は、純粋な美優の頼みを断ることが出来ず、エリに話し掛けてきたのだった。ただそれだけ。汚い計算などではなく、頼まれたから話し掛けたのだ。エリは呆然としてしまい、言葉を返すことが出来ず、一言、「そう」と呟くのがやっとだった。

「ねえ！」

知香はエリの反応があまりのも弱かったのが気になったのか、大声で呼び掛け、さらに問い掛ける。

「ねえ！もしか、これで終わりだと思ってる？」

その問い掛けにエリは我に返るが、知香が次に話す内容も、信じられない思いで聞くことになるのだった。

「これで終わっちゃったらなんでうちらが今もエリと仲良くしてるのかわかんなくね？」

「なんで？」

エリは知香に問われた質問をそのまま聞き返した。確かに、知香たちがなぜ今も自分のそばに寄ってくるのかはわからないが、そんなことはもうどうでもいい気がしてきていたのだ。

「最初はちよつと喋って、後は適当に距離取つときゃいいかって考えてたけど、エリと喋ってみたら意外と楽しかったんだよね」

「楽しかった？」

「そう。あんなにヤバいって言われてたのに冗談も言うし、うちら

がタバコ見つかりそうになった時も、カンニングがバレそうになった時も、エリが庇ってくれたしね」

「それは、あたしもとぼっち喰らいそうだったからでしょ」

「そうかなあ？だってさあ、エリは停学なんて常連でしょ？なのになんでわざわざ庇うのさ？うちは違うと思うよ」

確かに停学なんて大したことではないが、庇ったつもりもなかった。ただ、大人に突っ掛かりたかった。言いなりになりたくなかっただけなのだ。だが、知香はエリが庇ってくれたと断言した。それは間違いだろうか。タバコやカンニングがバレたのが知香や靖子じゃなかったらどうだっただろうか。その時、エリの脳裏に1つの場面が甦った。

目の前に、大きな絆創膏を膝に貼り、泣きそうな顔で謝る美優がいた。いつだったか、美優がタバコを持っているのがバレた時だ。もちろん美優が自分で吸う為を持っているわけもなく、エリが持たせていたタバコだったが、あの時エリはわざわざ教室から出て行って美優を庇った。あれが美優や知香たちじゃなかったら庇っただろうか。庇わなかった。間違いなく無視していただろう。エリの目の前で、泣きそうな顔をしていた美優の顔がみるみる笑顔に変わる。その笑顔は、優しい光に包まれていた。

「…だよ」

その美優の笑顔は、知香の声で消え去る。エリはその時になってようやく、自分の見ていた映像が幻だったことに気が付いた。

「なんて？」

全く知香の声を聞いていなかったエリは、知香が何と言ったのかを問い直す。すると知香は、恥ずかしそうに口の中でモゴモゴと何か言っていたが、意を決したようにもう一度答える。

「だからあ…、エリはうちの大切な友達だよって言ったの！1回目で聞き取れよう！」

心配。元気。楽しい。そして、大切な友達。そんな言葉が自分に向けて発せられることなどないと思っていた。1人で生きてきたし、

これからもそうだと思っていた。知香や靖子のことなんて、寝泊まりするときに必要なだけの、都合のいいバカ女たちとして扱っていた。そのつもりだった。しかし、結局エリは何もわかっていなかった。2人のことも、自分の本当の気持ちさえも。

「ねえ、聞こえた？」

エリが黙っていたので、また聞こえなかったのかと心配したのか、知香はさっきから何度も確認してきていた。エリも何か言わなければならぬと頭ではわかっていたのだが、何一つ言葉が浮かんでこず、ただ「うん」と言うことしか出来なかった。そして、再び沈黙が流れ始めると、電話の向こうで知香と靖子が話し合う声が聞こえ、しばらくすると電話を持ち替えるような音が聞こえてきた。

「もしもし。靖子だよ」

聞こえてきた声は紛れもなく靖子の声だったが、その声は普段の靖子からは想像も出来ないくらい真剣な色を帯びており、ああ、靖子も何か大切なことを言いたいんだ。と、容易に推測することの出来る声だった。

「知香がぶっちゃけたからうちもぶっちゃけるよ。いい？」

「…うん」

エリは先ほどと同じように、それしか言うことが出来なかった。だが、靖子はそんなことなど気にしていないのだろう。構わず話し始める。

「エリに初めて会った時は、マジで人を見下してバカにしてる嫌な女って思ったよ。これは事実。けどあの時のエリに直接そんなこと言える奴いないよね。うちも結局の所ビビってたから心の中でそう思ってたちょっと優越感に浸ってるって感じだった。けどねエリ。今はエリに直接言えるよ。エリは友達思いなくせに、自分は誰も必要としてないって思い込んで勘違いしてるバカな女の子だよ。エリはうちらが……みいが必要だよ。そんなこともわかんないエリはホントにバカ。…バカだよ」

靖子はそこまで言うとき大きな音を出して鼻を啜った。横で、知香が

すすり泣く声も聞こえた。エリには、2人がなぜ泣くのか不思議
でしうがなかった。何が悲しいのかわからなかった。そのエリの
瞳からは、涙が溢れていた。1粒、2粒と溢れ出し、見る見るうち
に涙の川を作った。3人は何の言葉も出ないまま大声で泣き続ける。
頬を伝って流れ落ちるその涙は、エリの中に溜まり続けていた黒い
塊を、汚れ続けた心を、優しく洗い流していった。

終章 エリ

9月1日。

9月に入っても暑さが和らぐ気配は一向になく、太陽が狂ったようにアスファルトを熱している。何とか地面の向こう側へ光を届けようと躍起になって照りつけている、そんな感じだった。エリはそんな太陽の独りよがりを真正面から受け止めながら、高校への1本道を歩いていった。

まだ朝の8時を少し過ぎた頃だというのに、エリの額にはうっすらと汗の玉が浮かび上がっていた。このままの調子でいくと、昼過ぎには40に達するのではないか、そんな風に思わせるほどの暑さだった。

あれから2週間が経ったが、結局美優の所には1度も行くことはなかった。なぜ行かなかったのかは自分でもよくわからない。色々なことがあの1日で起き過ぎた為に、頭の中の整理がつかなかった。そう言えれば楽なのだが、実際はただ怖かっただけだろう。美優の痛々しい姿を見る度に、好子の疑うことの知らない微笑みを見る度に、最も傷付けてはいけなかったはずの美優を最も傷付けてしまったという事実が、自分の胸に突き刺さりそうで、それが怖くて逃げているだけなのだ。エリは自分のことを必死に守ろうとしてくれた美優に、未だに向き合うことが出来ていなかった。

結局あの日から今日までの2週間、ずっと麗子の家で寝泊まりさせてもらっていた。行く所もなく、母の待つ我が家に帰ることも出来ないエリに、麗子は何も言わず鍵を渡してくれた。ただ、渡すと言っても、直接渡されたわけではない。あの日、泣き疲れてそのままソファで眠り込んでしまったエリが朝目を覚ますと、毛布と鍵、そしてしばらく部屋を使っていたという置き手紙が置かれていた。その厚意に甘えて部屋を使わせてもらっているエリだったが、部屋

の主である麗子は仕事が忙しいらしく、ほとんど帰ってこなかった。その為エリは、麗子の自宅で独り暮らし状態になっていた。

エリは、麗子が忙しい中自分の為に時間を割いてくれたことを知り、改めて感謝していた。そして、麗子のことを刑事としてはなく、1人の女性として心から尊敬し、こんな女性になれたらな、などと考えるようになっていた。

「おはあー」

エリが真夏の9月に1人で立ち向かっていると、後方から2つの甲高い声が飛んできた。声を聞いただけで誰かわかるいつものハイテンション。振り向けばいつでも目の前にあるギャル2人。夏休み前まで当たり前だった光景を、エリはそこに見た。変わったことと言えば、夏休み前よりさらに暑くなったこと、そして、エリの心が1月前には感じることもなかった温もりを感じていることくらいだった。

「なあにニヤニヤしちゃってるわけ？」

エリに並んだ靖子は怪訝そうに聞いてくる。そこで初めてエリは、自分がニヤけてしまっていたことに気付いた。

「は？あ…別に普通だよ。こういう顔なんだよ」

靖子の思わぬ指摘に、エリは慌ててごまかす。

「ふ〜ん。エリってブスツとした顔ばっかしてるイメージだったけどなあ」

今度は知香が靖子と目配せをしながら言う。2人の口元には先ほどまでエリが2人に見せていたと思われるニヤけた笑いが張り付いていた。それを見たエリは、自分が2人に遊ばれていることに気付く。常に優位に立っていたはずの立場が、いつの間にか逆転していた。だが、エリはそこでもう一つの事実気付く。3人の立場は最初から変わっていなかったのだ。逆転ではなく、初めからずっと同等の立場だったはずなのだから。エリはその事実を再び顔が緩みそうになるが、グツと堪えて反撃に転じる。

「イメチェンしたんだよ！イメチェン！そんなことより知香ってそ

んな眉毛薄かったっけ？ないよ？」

「はあ！？マジ！？汗で落ちた！？」

エリがそう言うと、知香は慌てて鏡を取り出そうとカバンを漁り始める。

「あれ？ねえ、靖子もヒゲ生えてるよ？」

次にエリはマジマジと靖子のアゴを覗き込み、そう言う。すると靖子も「マジ！？」と叫んだかと思うと、知香の取り出した鏡を奪い取ろうとする。そのまま2人は鏡の争奪戦を開始してしまった。

「うちの鏡なんですけど！」

「とりま、見せてよ！」

「いやいや、意味わかんねえから！」

「あんたの眉毛がないことなんかどうでもいいんですけど！」

「はあ！？あんたのヒゲのがどうでもいいし！」

「ふざけんな！」

「ふざけんな！」

最後は罵声のデュエット。エリはそんな2人の掛け合いを見て、堪え切れずに吹き出してしまう。それを見た2人は不思議そうにエリが爆笑するのを見ていた。

「何がおかしいわけ？うちらにとっては死活問題なんですけど！」

「ハハハハハハ。…ごめんごめん。…嘘だよ。嘘」

エリは必死に笑いを堪えながら白状する。それを聞いた2人は、ふざけんな！だの、殺す！だの次々と罵声でデュエットをしていたが、次第にその勢いも落ち、最終的には3人で爆笑のハーモニーを奏でていた。笑いながらエリは、知香と靖子とは、泣くのも笑うのも、電話でも面と向かってでも同じような感性で感情表現をすることの出来るのだという、そんな他愛もない共通点に今まで感じたことのないほどの幸せを感じていた。

美優

「今日も暑そう」

今朝、美優は病院の固いベッドで目覚め、1人呟いた。病院内は当たり前前ではあるが、非常に快適な温度に保たれており、美優はこの記録的な猛暑を、想像で感じることにしか出来なかった。

美優は意識を取り戻してから2週間、ずっとエリのことを考えていた。エリはあの日以来1度も会いに来てくれないかったが、美優は全く気にしていなかった。エリが自らのことを許せない間は会いに来ないだろう。そう思っていたのでシヨツクはなかった。ただ美優は、エリが1人で苦しんでいるのにそばに居てあげられないことが辛かった。私は何も気にしていない。そう何度も何度も言っただけであつた。

美優がそんなことを考えながら1人悶々としていると、目の前に影が落ちる。瞬間、珍しく雲が太陽を隠したんだなと思った美優だったが、先ほど窓から見えた快晴の青空を思い出す。そして、不審に思い顔を上げると、そこには隼人の白い顔があつた。

「ひゃっ！」

美優は思わず悲鳴を上げ、後ろに飛び退く。だが、飛び退いた先には隼人の顔と同じくらい真っ白な壁が待ち構えており、その壁に頭をぶつけた美優は思わず顔を顰める。

「だ、大丈夫か？」

隼人は美優が頭をぶつけたのを見て、慌てたようにそう言った。心配そうに美優のことを覗き込む隼人の顔は、思ったよりも白くはなく、しっかりと血の通った顔だった。

「あ、…はい。すみません」

「いや、いいんだ。俺は幽霊か何かに見えたかな？」

美優は隼人のその言葉を聞き、痛みも忘れて必死に首を振った。そ

んな美優の姿を見て、隼人は苦笑いを浮かべながら椅子に腰掛ける。
「そんなに否定しなくても大丈夫。そんなに否定されたら逆に不安になるよ」

「あ、そうですね。すみませんでした」

「大丈夫。そんなことより本当に頭は大丈夫か？」

隼人は再び美優の頭を心配する。頭に包帯を巻いた人間がその頭をどこかにぶつけなければ心配になるのは当然だろうが、当の美優は本当に痛みも感じていなかったの、「大丈夫です」と答える。答えた後に、美優はふと疑問に感じたことを聞いてみることにした。

「そういえば今日って始業式ですよ？先生は行かなくていいんですか？」

すると隼人は、その質問を待っていたかのようにすぐに答えを返してきた。

「学校に行く前にちよつと寄ったんだ。学校には佐藤に会ってから行くと伝えてある」

「そうなんですか。なんかすみません」

美優は学校に行く前にわざわざ病院に見舞いに来てくれた隼人に悪いと思ひ、ペコリと頭を下げた。だが、隼人はなぜ美優が頭を下げたのかわからなかったようで、不思議そうに見つめ返してきた。その視線が思ひの外強く、美優は恥ずかしくなってしまう。目を逸らし、下を向いてしまう。

「あ、いや、あの、わざわざ来てもらってすみません」

そして、そう言い直してもう一度頭を下げる。すると、ようやく意味がわかったらしい隼人は慌てて言う。

「いや、いいんだよ。気にしないでくれ。聞きたいこともあったしな」

「聞きたいこと？」

隼人の言葉を聞き、次は美優が不思議そうに隼人を見つめ返してしまった。だが、美優がいくら見つめても、隼人が目を逸らすことはなかった。それどころか、その視線を真っ直ぐに受け止め続けた。

そして、隼人は言う。

「佐藤は神谷の友達か？」

あまりに突拍子もない質問に、美優は戸惑う。隼人もそれに気付いたようで、少しだけ下を向き、質問の真意を語り出した。

「突然すまない。だが聞いておきたかった。俺は神谷が1人で生きているわけじゃないってことを伝えたい。神谷を救い出したい」

その言葉は小さな声だったが、心の芯を揺さぶる、強い言葉だった。

「だから聞きたい。佐藤は神谷の友達か？」

美優の口は、何かを考えるよりも先に動いていた。

「はい。私とエリちゃんは友達です。それに、靖子ちゃんと知香ちゃんも。4人は友達ですよ」

隼人は、「そうか」と言い、ゆっくり顔を上げる。その瞳は、先ほどよりも強い意志で、美優のことを貫いていた。美優は、目を逸らさなかった。その意志とシンク口するように、微笑み返していた。

エリ

「なんだよそれえ！」

新学期を迎え、久しぶりに会った同級生たちとの弾む思い出話。そんな賑やかな嬌声が飛び交う教室の中でも一段と騒がしい一帯。それがエリの机周辺だった。知香と靖子は相変わらず騒ぎまくり、エリも巻き込んでロックバンド並みの音量を周囲に撒き散らす。いつもより高すぎると思われるほどのテンションだったが、その理由は3人ともわかっていた。

エリを取り巻く視線。それは、夏休み前とは明らかに異なる視線であった。夏休み前のエリに対する周りの態度は、恐怖や不安が大半だった。エリとまともに目を合わせる人間もあまりおらず、エリの黒い噂を全員が恐れていた。だが、今日のエリに対する周りの視線は、今までの恐怖と不安の視線以上に、軽蔑や嫌悪する視線が大半になっており、学校の至る所にその視線が溢れていた。3人ともその視線を身体中で感じながら、見て見ぬフリをして無駄な話に大袈裟なほどのリアクションを取り続けていた為、いつも以上のテンションになってしまっていた。

そんな風にエリたちが纏わり付く視線に気付かないフリをしていると、始業のチャイムと共に猿渡が教室に入ってきた。その瞬間クラスの話で猿渡が来たんじゃないかと思っていた。今までの教師生活いや、人生でこんなにも自分に視線が集まったことがなかったのだろう。猿渡は喉を鳴らし、咳払いをしてから言う。

「楨村先生はちょっと用事で遅れるから、代わりに私が来ました。始業式が始まるからすぐに移動してください」

猿渡は、相変わらず脂ぎってねっとりした顔に似合わない高音で、生徒の三半規管を攻撃する。普段は苦痛以外の何ものでもない声と

顔に、今回は集中して注目していた生徒たちだったが、猿渡のその言葉を聞いて落胆の表情を露にする。エリも少なからず緊張していた為、思わず溜め息を漏らしてしまった。直後、その溜め息が伝染したかのように、知香と靖子が大きく息を吐き出すのが、エリの耳に猿渡の高音以上の音量で届いていた。

体育館に入ると、校長、教頭による、自己満足の為の独演会が始まる。普段と何一つ変わることはない始業式であった。美優のケガの話は全く出ず、何事もなかったかのように式は終わってしまった。だが、もちろんこんなことであの出来事がなくなるわけもなく、学校側が何も説明をしなかったことで、逆に勢いを増した幾つもの口が、至る所でヒソヒソ話の合唱を始めていた。

「ねえ。終わったらどこ行く？」

式が終わわり、合唱響く廊下を教室に向かい足早に歩いていると、知香が横に来て言う。知多と靖子もやはり緊張しているのか、表情が硬く、どこかきこちなかった。

「どこでもいいけど、昼食べてカラオケでも行く？」

エリはそんな2人に気を遣い、明るく振る舞う。今まではエリが気を遣われる側だったので、明るい表情がうまくできたかわからなかったが、そうやって2人に接することが苦痛ではなかった。2人もそんなエリの変化に気付いているのか、少しだけ目配せをし、打ち合わせたかのような掛け合いをエリに披露した。

「いいねえ！じゃあ久しぶりに靖子の天使の歌声を聞かせてあげようかなあ」

「天使の歌声ってことは、あれだ！ボンジョビ！」

「はあ！？なめてんのかよ！あんなしゃがれ声じゃねえし！」

「じゃあなにさ？」

「MISIAに決まってるじゃん」

「夏だし！」

「はあ！？夏にMISIA歌っちゃいけないわけ？」

教室に着いても一向に終わる気配のないケンカコント。このまま放つておくとカラオケに着いても続きそうな勢いだったので、エリは仲裁に入る。

「なんでもいいから歌いまくろうよ。久しぶりだしさ」

エリがそう言うと、2人は素直に従ってくれた。2人の掛け合いをあんなに下らないと思っていたはずなのに、今のエリはその下らない掛け合いが少しだけ羨ましかった。

ふと窓の外を見ると、担任が歩いて校門を通過する姿が見えた。真つ直ぐ前だけを見て歩いている。

“ 美優の所に行ってきたんだ ”

隼人の力強い1歩1歩を見たエリは、なぜだかそう確信する。隼人の歩く後ろから、出遅れていた蝉たちの、しゃがれた歌声が響き渡っていた。

隼人

スーツを着るにはあまりにも暑すぎる。そんな絶望的な日差しの中を、隼人は前だけを見て歩く。その心には強い決意が満ちていた。エリの為に、いや、生徒たちの為に自分の出来ることを精一杯やる。それだけしか頭にはなかった。

学校に着いた頃には、スーツの下は汗まみれでワイシャツも透けてしまうほどだった。校舎の中は日差しがない分、多少暑さは和らいだが、それでも隼人から汗を奪うことはなかった。病院の面会開始時間まで待つていたので、時刻はすでに10時を大きく回ってしまっていた。

隼人は急いで職員室に向かう。その道すがら、いくつか生徒たちの話す声が聞こえてきたが、そのほとんどが美優とエリの話だった。

「ムカつく女を突き落としたんだって」

「目が合った奴から順番に袋にしていくみたい」

「落ちていくのを見ながら、笑ってたらしいよ」

学校という限られた空間で、これだけの人間が何度も同じ話をする。それだけでいつの間にか、真実は遠くどこかの星へ飛び立ってしまった。話しながら生徒たちは、隼人をも好奇の目で見つめる。

隼人は、エリがこの視線に1日中耐え続けているのを想い、大声で否定しなかった。だが、それをすることで、生徒たちが委縮するどころか喜んでしまうことも知っていた。その為、聞くに堪えない話にも、聞こえないフリをしながら急いで職員室に入った。

職員室に入り、ようやく一息つこうとした隼人は、次の瞬間思わず身震いをしてしまう。職員室内は冷房が効いており、快適な環境だったが、その温度差に身震いをしたわけではない。むしろその逆であつた。

全く一緒だったのだ。さっきまで生徒たちが浴びせてきた視線と全

く同じ視線が、隼人を突き刺していた。その視線を浴びた隼人は、一息つく間もなく職員室を飛び出す。教室に向かって歩く隼人の頭には、エリを貫く無数の目が広がっていた。

エリ

グラウンドに姿を見てから5分後、教室の扉が開き、隼人がゆつくりと教壇に立つ。エリは、随分早い隼人の登場を少し不審に思うが、さして深く考えることもなかった。深く考えれば考えるほど、自分にとってプラスになるような理由が次々と消え去ってしまうような気がした。

「先生、汗だくだよ」

1人の生徒がそう言ったのを聞き、エリは何気なく隼人を見る。隼人も、エリを見ていた。

「今日は暑いからな。しかも遅刻しちゃったし」

すぐに目を逸らし、笑いながらそう言ったが、エリはそんな隼人から目を離すことが出来なかった。一瞬合った瞳の奥に、今までに見たことのないほどの強い意志を感じた。

そんな強い意志を見せたかのように見えた隼人だったが、その後は何事もなかったかのようにホームルームを開始する。いつものように誰も聞いていないように見えたが、隼人が事件のことを話すのを期待して、全員が意識の半分以上を隼人の言葉に向けているのは明白だった。だが、その期待を裏切るように隼人は事件に触れぬまま淡々とホームルームを進め、時間だけが経過していた。時間と共に教室内の空気は重くなっていき、息苦しさすら感じるようになっていった。

「あのお、佐藤さんは何で休みなんですか？」

その空気に耐えられなくなったのか、ついに1人の生徒が口火を切る。

「ケガしたって聞いたんですけど」

その小さな種火は四方八方に広がり、教室の至る所に、「俺も聞いた」、「私も」と飛び火する。教室中に広がった炎は、あつという

間に隼人を飲み込んでしまおうが、もちろんその言葉の半分はエリに向けられたものであった。エリにもそのことは十分すぎるくらいにわかってはいたが、下を向き、炎の嵐が過ぎ去るのを黙って待つことしか出来なかった。

「聞いてくれ」

それまで静かに生徒たちの様子を眺めていた隼人がようやく口を開く。エリは、隼人が大声で生徒たちを止めるか、焦ってあたふたし出すかのどちらかだと思っていたので、隼人の落ち着き払った穏やかな声音を聞いて、思わず顔を上げる。

「佐藤は確かにケガをした。夜道を歩いて過って階段を踏み外したらしい。これは警察が調査した結果わかったことだから間違いない」

隼人がようやく話し始めたことで、一気に静まり返った教室内だったが、その答えを聞き、全員の顔から明らかに失望の色が滲み出る。それでも隼人は落ち着いたまま話し続けた。

「今から私の話を聞いてくれ。それで今日は終わろう」
それを聞き、再び教室中に期待が膨らむ。

「今日は、“道”の話をしよう」
再び膨らんだはずの期待は、隼人の次の言葉を聞いた瞬間にあつという間に萎んでいった。教室のあちらこちらから、「関係ないじゃん」、「また長話かよ」などと不満の声が上がるが、隼人はそんなあからさまな失望にもお構いなしで話し続けた。

「そう。またちよつと話をさせてくれ。まず、道と言っても、車が走るような道の話ではない」

「じゃあ何の道だよ」

「私たち1人1人が生きてきた道だ」

隼人が優しく、それでいて力強い言葉でそう言うと、教室内はざわめいた。もちろんそのざわめきの大半は、隼人をバカにするような嘲笑であるの言うまでもない。

「静かにしろよ!」

隼人をバカにしたような嘲笑の中、突然声を張り上げたのは靖子だった。エリは靖子がそんな風に教師を庇うのを初めて見たので少し驚いてしまう。

「先生。続けて」

靖子の声に続いたのは知香だった。2人は真剣な顔をして、隼人を見上げていた。隼人は、「ありがとう」と小さな声で言い、さらに続きを話し始める。

「人間には、人それぞれ歩んできた道というものがある。1人1人違う様々な道だ」

そこで、隼人はゆっくりと生徒全員を見回す。エリは隼人と目が合いそうになった時、思わず下を向いてしまった。先ほどまで隼人の瞳の奥を覗き込もうとしていたのに、いざ目が合いそうになった瞬間、なぜかその瞳を見ることが出来なかった。

「その道のりで、時には間違った方向に進んでしまうこともあるかもしれない。なぜなら、その道が合っているかどうかなんて誰にもわからないからね。進んでみて初めて間違いに気付く」

「間違ったらもう終わりじゃん。過去には戻れないんだし」

教室のどこかで小さな声上がる。声を出すのを躊躇っていた生徒たちも、こんな話をいつまで聞かせるんだと言わんばかりの視線を、隼人に注ぎ続けていた。

「もちろん過去には戻れない。だけど、自分の進んできた道を進むことは出来るんだ。間違いに気付いたらそこでUターンをして自分の進んできた道をもう一度進めばいい。立ち止まったまま、進めるか進めないかを悩んでいるよりもそっちの方がよっぽど有意義だよ。私は、君たちにたくさん間違えてもらいたい。もちろん法に触れるようなことはしてはならないけど、間違いを犯して傷付くことを恐れてほしくないんだ。怖がって進む前に逃げ出してしまうようにはなってほしくないんだ。間違えてもいいんだ。戻ればいい。進む前に逃げちゃいけない」

隼人は一気にそこまで言う。再び重たい空気が教室を支配しようと

するが、それを知香の勢いよく挙げた右手が払い去る。

「過去に戻れないんだったら意味ないじゃん。過ちは消えないし、傷も消えない。違う?」

知香の声は、勢いよく挙げたはずの右手とは対称的に、小さく、掠れて聞き取ることも困難であった。だが、隼人はしつかりと頷く。

「過去には戻れない。だから自分の進んできた道に向かつて進むんだ。間違いを犯す前の自分まで進んで、そこからまた前を向いて歩けばいいじゃないか。時間は掛かるかもしれないが、次は必ず正しい道を進めるよ」

隼人は知香を見ながら話していたが、その言葉が自分に向けられたものであると、エリは知っていた。

「君たちには仲間がいる。いつでも手を差し出してくれる心強い仲間がいる。一緒に泣いて、笑い合える仲間がいる。少なくとも、私は君たちの仲間だよ」

エリは瞼を閉じる。暗闇に閉ざされた瞳の裏に、甘い物を食べ、幸せそうな知香がいた。下らないことで笑い転げる靖子がいた。そして、ずっとエリに微笑み続ける美優がいた。

あの頃の神谷エリに戻るだろうか。

目を開けると、そこに隼人はいなかった。いつの間にかホームルームは終わっていたらしい。

エリは、真夏日の午後をどのように過ごすかで盛り上がる教室から飛び出し、遠ざかる背中に叫んでいた。

「オバマァー!!」

隼人

「オバマ!!!」

背後で、アメリカ大統領を呼び捨てにして叫ぶ声が聞こえ、隼人は思わず立ち止まる。振り返るとそこに立っていたのは、口を押さえて立ち尽くすエリだった。廊下全体に響き渡る大声だった為、周りの生徒たちも驚いた表情で2人を見ていた。だが、その視線がエリを捉えると、驚いた表情から笑いを堪えるような表情へと変わっていった。やはり事件の影響で、エリを取り巻く環境が大きく変わっているらしいということ、隼人は改めて認識した。

「先生」

隼人が廊下を行き交う生徒たちの視線に注意を引かれていると、目の前に突然エリの顔が現れた。エリが近付いて来ていたことに全く気付いていなかった隼人は、驚いて思わず声が出そうになる。だが、目の前で自分の顔を見つめるエリが、今までに見たこともないくらい真剣な眼差しだった為、すぐに表情を引き締める。

「先生」

「どうした？」

エリの強い眼差しと声に知らぬ間に緊張し、声の上擦りそうになるが、何とか持ち堪えて返事をする。何を話す為に目の前まで来たのかを瞬時に考えるが、頭の中は真っ白になってしまっていた。だが、しばらく待つってみてもエリの口から次の言葉は聞こえてこなかった。先ほどまで強い眼差しを注いでいたエリだったが、その顔は少し俯き加減になってしまっており、そのまま2人の間に沈黙が流れ続ける。

「移動、するか？」

隼人は周りの視線を気にして聞いてみる。すると、エリは小さく頷き、「ごめんなさい」と呟いた。隼人には、それが自分をオバマと

呼んだことに対してなのか、呼び止めたのにも関わらず何も言えないことに対してなのかわからなかった。

とにかく移動しようと隼人は歩き出す。行き先はどこにしようか迷ったが、1つ思い付く場所があったので、そこに向かって歩くことにする。

歩きながらふと、さっきの言葉は、事件に対しての謝罪だったのかもしれないと思ったが、そんなことはどうでもいいと思いつく。エリが何に対して謝ろうと関係ない。最も重要なことは、エリが謝罪の言葉を口にしたという事実なのだ。

歩きながらそつとエリの様子を窺ってみると、相変わらず俯き加減ではあったが、すっかりとした足取りで隼人の後ろを歩いていた。

そのエリの瞳を見た時、隼人は確信する。

もう大丈夫。絶対に戻る。

そう思わせるほど、エリの瞳は生きていた。

エリ

1階にある教室から、隼人は階段を3階も上った。教室は3階までしかない為、3回目を上った先には屋上の扉しかないはずだった。屋上は施錠してあるうえに、学校は屋上に出ることを禁止にしているはずなので、なぜ隼人がこんなところに移動してきたのかエリにはわからなかった。

案の定、屋上の扉の前で隼人がノブをガチャガチャと回してみるが、扉はビクともしない。すると隼人は、エリのほうを振り返りニヤリとしてから小声で言う。

「どうやって開けるんだ？」

エリは驚き、マジマジと隼人の顔を見てしまう。いつの間に気付いていたのか、エリたちが屋上の扉の鍵を開けられることを知っていたのだ。

「なんで知ってるの？」

こんなところに誰も来るはずもないので小声で話す必要などないのだが、なぜかエリまで小声になってしまった。

「担任だからな」

隼人はエリの問いに即答で答える。次の瞬間、エリは声を上げて笑っていた。隼人は怪訝そうな顔をしていたが、その表情がまた可笑しかった。

「先生、今のであたしが感動すると思ったの？」

エリが笑いながらそう言うと、隼人の表情が陰しくなった。凶星だったらしい。そして、どうしてわかったんだ、と顔で聞いてくるので、答えてあげることにする。

「さっき小声だったくせにそこだけボリューム上げ過ぎ。鼻の穴までヒクヒクしてたし」

エリは答えながら、隼人のアホ丸出しのドヤ顔を思い出し、再び笑

ってしまった。隼人は麗子と比べるとポーカーフェイスには程遠く、姉弟だとはとても思えなかった。

笑いを堪えながらチラリと隼人のことを見ると、隼人は頭を掻きながら苦笑いを浮かべていた。校庭を決意に満ちた表情で歩いていた時とは全く違う、とても穏やかな表情だった。

「そんなことより、開けられるんだろ？」

隼人は話題を変えようとしてか、扉の鍵の開け方を再び聞く。だが、エリの答えは全く別のものであった。

「ここがいい」

「ここです？」

隼人はエリの答えに再び怪訝そうにする。階段を上がっただけで、ほとんど廊下と同じ環境だからだろう。

ホコリっぽく、空気もあまり循環されない不衛生なこの空間が、今の自分を象徴しているようで、エリは居心地のよさすら感じていた。エリは1つだけ、最も聞きたかった質問を隼人にする。

「先生。あたしは戻れるかな？」

不思議そうにしていた隼人の表情が引き締まる。緊張して強張ったように見えたが、その顔はすぐに穏やかな表情に変わる。穏やかではあったが、校庭を歩いていた時と同じ強い意志を感じた。小さく頷く。

何度も。

何度も。

「戻れるさ。必ず」

全てがスローモーションに見えた。ほんの数秒の間が、エリには何時間にも感じられた。答えを待つ間、無意識のうちに息を止めていた。それに気付き、エリはゆっくりと息を吐き出す。

「何年歩いてきた？」

隼人は相変わらず穏やかな表情のまま聞く。その穏やかな表情の中に、麗子の顔を見た気がした。

「5年半、くらいかな」

「じゃあ、5年半で戻れるよ」

「5年半、か。結構長いね」

隼人に聞かれ、初めて自分がどれほど長い時間、間違った道を歩み続けてきたのかを実感する。1歩目を踏み出した瞬間から、この道が間違っていることに気付いていたはずなのに、止まることが出来なかった。そんな自分の弱さが腹立たしかった。

「…走れば、3年で戻れる」

エリが過去の自分の弱さを振り返り、その不甲斐なさに苛立っていると、隼人が突然瞳を覗き込むようにしてそう言った。

「…どういう意味？」

エリは隼人の言った言葉の意味がわからなかったので聞き返す。いや、正確には、言葉としての意味はわかったのだが、その真意がわからなかった。すると隼人は、少し困ったように言った。

「いや、落ち込んでいるように見えたから。…違ったか？」

そう言われ、エリは全てを理解した。そして、再び可笑しさが込み上げてきて、声を上げて笑い出していた。隼人は、エリが5年半も掛かることに落ち込んでいると思い、何とかフォローしようとしたらしい。当の本人は落ち込むどころか、自分の歩んできた道を振り返り、その道に戻ることにかつて感じたことのないほどの気力を感じていたのだ。エリが笑っているのを見て、隼人はさらに困ったような顔になる。

「ありがと。じゃあ走って戻るよ」

エリは困ったような表情をする隼人を見ながらそう言う。隼人はその言葉で救われたような顔になった。

「じゃあ、戻ろうか」

そう言っつて隼人は歩き出す。だが、すぐに立ち止まってこちらを振り返る。その企みを含んだ表情に、エリは猛烈に嫌な予感を感じた。「そういえば、なんでオバマなんだ？」

「え？な、何が？」

やはり予感は当たっていた。エリは何とか誤魔化そうとするが、全

く言い訳は浮かんでこず、仕方なく白状することにする。

「えつとお…、演説上手だから」

「演説ねえ。それでバカにしたたのか」

「バカになんて…してたけど」

エリは、自分の顔が熱くなっていくのを感じていた。隼人はそんなエリを見て笑う。その笑い顔を、エリは恨めしそうに見上げるが、隼人の笑い顔が以外にも可愛らしく、思わず吹き出してしまった。エリの突然の笑い声に、隼人の笑っていた表情はみるみるうちに困惑した顔に変わっていった。

「何か可笑しかったか？」

「…ううん。何でもない。早く戻なよ。オ・バ・マ大統領」

エリの小バカにしたような言い方に、隼人はまた苦笑いを浮かべながら、階段を下りていった。

残されたエリは、同じ学校であるにも関わらず、他の場所とは切り離されたかのように暗く、ホコリっぽい廊下に1人立ち尽くしていた。これが、今の自分を表すピッタリの場合のように感じる。

3年後、この場所から、明るく清々しいほどの爽やかな風の吹く扉の先に立つ自分の姿を想像してみる。扉の先には、4人が立っていた。

エリは大きく深呼吸をして、淀んだ空気を肺いっぱいに取り入れた。もう二度と、この空気を吸うことがないように。

美優

久しぶりに外気に触れ、美優は大きく伸びをする。病院の屋上は、洗濯物でいっぱいだった。屋上に洗濯物が干してあるなんて、ドラマの世界の中だけの話だと思っていたので、少々驚いた。快適な環境の中で長いこと過ごしていた為、この陽射しの強さは辛かったが、それでも時々思い出したように吹き抜ける風は心地よく、美優は洗濯物の日陰に隠れ寝転んでいた。

目を瞑っていると、時の流れを忘れ、果てしない時間旅行に旅立てるような、そんな気がした。だが、どの時間に旅立っても、美優の隣には常にエリがいた。

「ヒヤッ」

そんな時間の旅を満喫していると、突然美優の顔の上に何か落下してきて、思わず悲鳴を上げもがく。すると、次は頭上で誰かが笑う声が聞こえた。その声を聞いた瞬間、美優のパニックは歓喜へと変わった。

「エリちゃん！」

美優は慌てて顔に掛かっているものを取る。そこには、エリの顔が逆さに映っていた。

「久しぶり」

エリは少し照れくさそうな表情でそう言う。

「久しぶり！」

美優は、エリの3倍ほどのボリュームで答えた。すぐに起き上がり、エリの顔を正面から見つめる。エリの顔には、最近では見ることもなくなつた、柔らかな優しさが溢れていた。

「あ！」

美優がニコニコしながらエリの顔を見つめっていると、突然エリが指を指しながら叫んだ。驚いてその指の先を見ると、さっきまで真っ

白だったはずのベッドシートが、小石や砂利にまみれ、黒くなってしまうっていた。

「あゝ！！！！どうしよう」

美優は焦り、パニックに陥る。この短時間で起こった数々の出来事に、美優の頭は全くついていけていなかった。

美優が自分の犯した失敗に何も出来ずにただアタフタとしていると、エリがシートを取り、叩き始めた。そして、「よし！」と言い、物干し竿に引っ掛ける。シートの汚れは黒く残っていたが、エリはもうシートを見ていなかった。

「逃げよ！早く！」

そう言つて、小走りにシートの間を駆けていくエリを、美優は呆然と見ていた。しばらく進んだエリがこちらを振り向き、手を招く。

いたずらっ子のような笑顔が、そこにはあった。美優も慌てて追い掛け、2人は汚れたシートから1番遠いシートの陰に逃げ込む。

しばらく息を潜めていたが、誰も来る気配はなかった。美優の心臓は、晃太と会った時とは違う意味で、激しい鼓動を続けていた。その興奮をエリに伝えようと、美優は小声で話し掛ける。

「小学校の時みたい」

「小学校？」

「うん。小学校の時にエリちゃんが先生の車に落書きしたの。覚えてる？」

エリはしばらく考え込んでいたが、頷きながら答える。

「覚えてる。あれはあいつが悪いんだよ。みいに暴力振るうから」

美優は、小学生の時から忘れ物の多さだけは誰にも負けなかった。

それを怒った担任が、美優の頭を叩いたのだ。美優自身はほとんど痛みを感じていなかったが、エリは激怒し、担任の新車に油性ペンで落書きしたのだ。

「あの時もこんな風に隠れて見てた」

「最高だったね。あいつのうな垂れる後ろ姿」

「2人で家に着くまで笑ってた」

「ざまあみろって言いながらね」

その光景は、今も昨日のことのように思い出すことが出来る。それはエリの同じなのだろう。それが、美優には無性に嬉しかった。

「なんで寝転んでたの？」

もう安全だと思ったのか、エリは小声ではなかった。美優はエリの質問に何と答えようか迷う。まさか、時間旅行をしていたなんて、恥ずかしくて言えなかった。

「うーん、気持ちいいからかな。風がね、気持ちいいの」

「そうなんだ。…よいしょ」

美優がそう答えると、エリは先ほどの美優と同じように寝転がった。

「ホントだ。涼しくて気持ちいい」

美優もエリの横に寝転がる。ふと、今日が始業式だったことを思い出した。

「今日、始業式だったんだよね？」

「うん。オバマの演説があったよ」

「本当に？聴きたかったなあ」

朝、隼人が来たことを美優は思い出していた。隼人は、エリの為に出来ることをやったのだろう。実際に内容を聞かなくても、何となくわかった。エリが、今日来てくれた理由も、わかった気がした。

「ホントは知香と靖子でカラオケ行く予定だったんだけど、フラれちゃったんだ」

だから、突然エリがこんなことを言い出しても、美優には照れ隠しの言い訳だと、すぐに見抜くことが出来た。

「そうなんだ。じゃあフツてくれた2人に感謝しなきゃ」

美優は本当に感謝していた。知香にも靖子にも、そして、隼人にも。しばらく2人とも目を閉じ、シーツの下を通り過ぎる初秋の風を感じていた。

「ねえ」

「何？」

「一緒に戻ってくれる？」

「……うん。いいよ」

「……ありがとう」

目を開けると、目の前に雲一つない青空のキャンバスが広がっていた。これから、エリと何を描いていくのか、それはまだわからないが、真っ青な空は何を描いてもとても美しくなるだろう。拙くても、下手でも構わない。

2人で一緒に筆を持つ。

それが何よりも大事なことに思えた。

エリ

コンビニのやけに明るい電灯。ガソリンスタンド店員の威勢のよすぎる掛け声。そして、生まれ育った街の変わらぬ香り。懐かしい記憶が、エリの目の前に広がっていた。

見慣れた風景のはずだったのに、いつの間にか見えなくなってしまう風景。目も耳も鼻も、五感全てが狂っていた。毎日歩いていた我が家への道を歩きながら、エリはそんなことを思った。

自宅に帰るのは何年振りだろうか、思い出すことが出来なかった。帰ることへの不安はあった。それでも帰ろうと思ったのは、麗子が言った「確認しなきゃいけない」という言葉や、隼人が言った「戻ることが出来る」という言葉に背中を押された部分も確かにあった。だが、エリが帰ろうと思った一番大きな理由は、ただ、母に会いたかった。もう母の顔なんて覚えていないと思っていたのに、母の顔をイメージすると、すぐに思い出すことが出来た。

幼い頃、よく「お母さんに似てるね」と言われて嬉しかった。仕事も出来て、料理も出来て、そして何より、綺麗だった。そんな母はエリの憧れだった。いつの間にか母も、この見慣れた風景と同じになっっていた。見えなくなっただけ、聞こえなくなっただけ、匂わなくなっただけ。母に会いたい。そう思った。母が自分をどう思っているのか聞かせてほしい。そう痛切に願った。

そんなことを考えながら家へと続く最後の角を曲がると、正面に真っ白な我が家が現れた。昔は、周りの家々と並んでいても、白さだけは際立っていたはずなのに、今はどことなく茶色掛かり、哀愁のようなものすら感じた。もしかしたら、昔から真っ白ではなかったのかもしれない。どちらが正しいのか、もう確かめようがなかった。だが、いつかスタートに戻ることが出来たら、この家は真っ白に戻っているかもしれない。そんな下らないことがエリの頭を過る。そ

の下らなさに思わず苦笑しながら、エリは我が家の玄関に立った。呼び鈴を押すか、鍵で家に入るか、束の間悩んだ後、エリは鍵を取り出す。長い月日を経た今でも、その鍵は、カバンの底に変わらずに存在した。

ゆっくりと鍵穴に鍵を差し込み、回す。この鍵ではもう開かないんじゃないかという一抹の不安も、カチャリと音を立てて開いた扉に瞬時に拭い去られる。

扉を開くのと同時に、不安や緊張を感じると思っていたエリは、自分が大きな安心感を感じていることに驚いていた。見た目も匂いも、何も変わらない、エリの居場所がそこにはあった。

短い廊下を歩いていくと、リビングに通じるガラス扉の向こうに、母の後ろ姿が見えた。背筋がピンと伸びた美しい姿勢で、母はパソコンに向かっていた。それは、エリが最後に母を見た時と、寸分違わぬ姿だった。扉越しに母の後ろ姿を見つめていると、何かの気配を察したのか、母の動いていた手が止まる。そして、ゆっくりと母が振り向いた。

エリは逃げなかった。目を逸らさなかった。母と向き合う為に、2人の間に立ち塞がるガラスの壁を、引き開けた。

母は、目を大きく見開いたが、それは一瞬のことだった。美しい母の顔は、いつも見ていた感情の読み取れない表情に戻っていた。

「おかえり」

それだけで十分だった。

「…ただいま」

エリは、溢れる涙が零れ落ちる前に扉を閉める。扉が閉まる直前、母が微笑んだような気がしたが、それを確かめる余裕もないまま、エリは階段を上がり自分の部屋に逃げ込んだ。

エリの瞳から涙が止めどなく流れ、床を濡らす。その部屋も、何一つ変わっていないなかった。ホコリ一つない床に、エリの涙が大きな水溜まりを作った。その水溜まりに窓から差し込む陽の光が反射する。太陽の光さえ届かない、真っ暗な暗闇に閉ざされていたエリの心を、

二つの太陽が照らし出す。眩しいほどに。

エリは小学生の時から座っていた勉強机に腰掛ける。座ってみると、やはり随分低かった。体はしつかりと成長したが、心のほうは、随分間違った成長をってしまったのかもしれない。

携帯を開く。電話帳には、数え切れないほどの悪が詰まっていた。その悪を次々と消去していくと、残ったのはわずか十数件だけだった。

次に、一枚の画像を呼び出す。そこには、猿渡が写っていた。猿渡の横には、見たこともないくらい不細工な女。これがエリの切り札だった。その切り札も、エリは消去する。

エリの心は、言い様のない落ち着きに満たされていた。その落ち着きを与えてくれているのは、言うまでもなく、6つの愛だった。

エリはふと、あることを思い付く。記憶を引っ張り出し、机の引き出しから小さなキティちゃんプリントされた便箋を取り出す。キティちゃんは、昔も今も変わらぬ、可愛らしい笑顔でエリを見つめていた。そのキュートな表情は、どことなく美優を思い描かせた。

顔を上げると、窓の外に真っ赤な夕日が見えた。

真っ青だった空が、真っ赤に染め上がり、そしてもう数時間後には、真っ暗な漆黒の闇へと変貌を遂げる。

エリの心も、新月で月明かりすら届くことのない漆黒の空から、夕日が真っ赤に染める、夕焼けの空まで、少しだけ進めたような、そんな気がした。

エピソード

鏡に映った私の顔は、真つ白でまるで幽霊のようであった。それでも、心の中はとても穏やかで、数時間前とは比べものにならないくらい落ち着いていた。

「みいは黒より白のが似合うよ」と、エリちゃんはよく言ってくれた。エリちゃんは私の喪服姿を見てどう思っかな。そんなことを考えながら着替えを済ませる。

「みいちゃん。一人で大丈夫？」

鏡の前でエリちゃんとの思い出を回想していると、母が扉の間からヒョコツと顔を出し、言う。

「うん。大丈夫だよ。お母さんは後で来て」

多分母は、エリちゃんが亡くなった後の私の姿を見ていたからだろう。心配そうな顔をしていた。だが、私がそう言つと、相変わらず心配そうな顔をしながらも、扉から顔を引っ込め、階段を下りて行った。

クローゼットから小さなカバンを取り出し、持っていくべき荷物を詰め込む。携帯、財布、香典。そして、栞と手紙。

私は、手紙の入った封筒を手取る。その封筒には、女の子らしい、小さな可愛らしい文字で、『みいへ』と書かれていた。出会った時から変わらぬ、エリちゃんの字だった。

窓の外では、春の爽やかな風が木々の緑鮮やかな葉を揺らす。風たちが奏でる音色が締め切った部屋の中まで聴こえてきそうで、私は思わず耳を傾ける。だが、残念なことに、そんな私の耳に聴こえてきたのは、風が作り上げる大自然のシンフォニーではなく、機械が発するやけに美しい着信音だった。私はガックリとしてしまい、溜め息を一つ吐いて、携帯の液晶画面を開く。だが、そこに示された名前を見て、次は私の心臓が激しいビートを刻み始めてしまうこと

になる。

「…もしもし」

私は心の動揺を気取られないように、必死に冷静な声を出して電話に出る。つもりだったが、第一声から声が上擦ってしまい、思わず赤面してしまう。

「あ、もしもし。晁太だけど」

恥ずかしさに顔を顰めていた私だったが、電話の向こうの彼の声も、私に負けず劣らずひどく緊張しているようで、その声を聞いた途端に、幸せな気分になってしまった。

「うん。こんにちは」

「こんにちは」

「どうしたの？」

いつも通りのギクシャクした会話。何年経てば、私たちの距離は縮まるのだろう。言いたいことは山のようにあるはずなのに、声を聞く結局何も言えなくなってしまう。そんな自分にいつもガツカリする。

「下にいるんだけど」

下にいるんだ、そうなんだ。珍しい。…え？

「えっ!？」

そんなことを考えながら彼の話を聞いていた私は、次の瞬間驚嘆の声を上げる。そして、すぐに窓の外に視線を巡らす。先ほどまで優しい音色を奏でていた木々の葉の下、そこに彼は立っていた。

「どうして？」

そう思ったつもりが、私の心の声は、私の声として電話の向こうの彼に届いていた。だが、彼の答えを聞く前に、彼の服装を見て、私はなぜ彼が来たのかを知る。

「一緒に行かない？」

窓の中に見える私の服装で、彼も気付いたのだろう。私の心の声には答えず、そう言う。

「…うん」

頭の中は混乱しっぱなしだったが、彼の言葉に迷うことなく返事をしていた。

「今から行くから、ちょっと待ってて」

そう言い、電話を切る。急いでカバンを持ち、もう一度鏡で身なりをチエックする。

「よし」

チエックを終え、一つ気合いを入れてから、彼の所に向かう為、部屋の扉を開けた。

「あ、いけない。…忘れちゃうとこだった」

部屋を出かけていた私だったが、大事な忘れ物に気付き、部屋に戻る。そして、出しっぱなしにしていた手紙を手取る。

もう一度、封筒に書かれた可愛い文字を見る。

「今から行くね。エリちゃん」

手紙をカバンにしまい、部屋から出て階段を駆け下りる。母が音を聞きつけ玄関に出て来たが、そんな母に目もくれず、私は玄関から、風の音が鳴り響く春の空へと飛び出した。

nd

Dear Friend

親愛なるみいへ。

初めて手紙を書いてみます。

色々言いたいことを文字にしようと思ったのに、なにをどう書けばいいのか全然わかんない。笑

なのでホントに伝えたいことだけを書きます。

みい。ホントにありがとう。

あたしが一緒に戻ってくれるか聞いた時に、なにも聞かずに頷いて

くれて嬉しかったよ。

これからたくさんみいに感謝の気持ちを伝えていくからね。

最後に、みいのこと愛してるよ。

オバマが言ってた愛の意味がようやくわかりました。

あたしはみいに愛されてるし、あたしもみいのことを愛しています。みいのはことはあたしが絶対守るからね。

どこにいても、あたしはみいに微笑み続けます。

PS・晃太とキスしたら教えること！笑

From Friend

春の麗らかな陽気の中、私と彼は並んで歩く。もつと緊張してしま
うと思っていたけど、思ったよりも緊張せずに歩くことが出来てい
る。言葉数は少ないが、私は居心地の良さを感じていた。

それでも、これだけ無言で歩き続けることはさすがにまずいと思っ
た私は、勇気を出して言う。

「晃太くんって本とか読むよね？」

「うん。読むよ。みいちゃんも読むよね？」

「うん。読むよ」

……………。

終わり？

なぜ彼と喋るとこんなに会話が続かないのだろう。

「好きだよ」

す、き、だ、よ

好きだよ？

好きだよ！？

私の頭の中はあっという間にパニックに陥る。

誰が好きなの？何で好きなの？というか、なぜこのタイミングで言うの？

わけがわからなすぎて目眩がしてくる。

「大丈夫？」

声がして慌てて横を向くと、彼は私のことを心配そうに覗き込んでいた。

「あ、ご、ごめん。大丈夫」

そう言うと、彼はホツとしたように再び前を向いてしまった。

しばらく彼の言葉を反芻しながら歩き続けていた私だったが、いくら歩いてもわけがわからなかった。彼は何事もなかったかのように歩いている。

「さつき、なんて言ったの？」

どれだけ待っても彼から答えを貰えなかった私は、仕方なく聞き直す。

「さつき？」

自分が何を言ったのか忘れてしまったのだろうか。彼は真顔で聞き返してきた。

「えっと…好きとかなんとか言わなかった？」

私は恥ずかしさで赤面しそうになりながらも、必死にそれだけ言う。

「ああ。好きだよ。本」

彼は、当たり前前のようにそう言った。私はその言葉を聞き、膝から力が抜けてしまいそうだった。本という言葉聞き逃した為に、私は1人でパニック状態だったのだ。

恥ずかしさと情けなさで、自分が嫌いになりそうだった。そして、彼の声が小さいのがいけないのだという、理不尽な怒りも感じていた。だが、怒りを感じながらも、その怒りは温かい熱を持って、私

の心を安らいだ気持ちにさせている。不思議な気分だった。

「じゃあ、これあげる」

そう言っつて、私はカバンの中から栞を取り出す。桜の絵がスケッチされた栞だった。

「ずつと使つてるからちよつと汚れちゃったけど」

「いいの？」

「うん。私は新しいの貰つたから」

そう言っつて、封筒から真新しい栞を取り出す。その栞にも、美しい桜の絵がスケッチされていた。

「誰に貰つたの？」

「エリちゃん」

彼の質問にそう答えると、彼は不思議そうな顔をしていた。だがすぐに、「ありがとう」と言っつて、栞を手取る。

「桜の花言葉つて知つてる？」

「花言葉？なんだろう？美しい、とかかな」

「うん。壮大な美しさとか、優れた美人。エリちゃんにピッタリだよ。だけど、もう一つあるの」

「もう一つ？何？」

「あなたに微笑む」

「あなたに、微笑む」

「エリちゃんが今も微笑んでくれてるような気がするんだ」

私は、遠くに見える桜の木を見つめながらそう言っつ。桜が咲くこの季節に、エリちゃんが微笑んでくれる。桜が咲いていない時だつて、この栞から、エリちゃんは私に微笑んでくれるだろう。そんな確信が、私にはあつた。

彼の左手が、私の右手に少しだけ触れる。私は、右手を引つ込めなかつた。もちろん彼も。

2人の両手がしっかりと絡み合つた時、一陣の風が2人の間を吹き抜ける。

その風は、たくさんの花びらを舞い上がらせ、青空のキャンバスを、

桜色に染め上げた。

F i n
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0069r/>

Dear Friend

2011年7月27日12時08分発行